アルタの赤い狗

神崎ミア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アルタの赤い狗

【Ｎコード】
Ｎ９３９２Ｏ

【作者名】
神崎ミア

【あらすじ】
幼い頃、父に呪いを受けた右手のせいで、子供でも召喚できるものすら召喚出来ない落ちこぼれのアルタは、ある日友人がいじめられている所を救って召喚獣を呼び出されて反撃される。絶体絶命のアルタを救ったものとは…。

人物紹介・用語解説（前書き）

作中ネタバレを随時含みます。
この人物紹介は出来るだけ作品を読み進めながら見ていただけると幸いです。

人物紹介・用語解説

〔アルタ・マクベイン〕
　１６歳　男　身長１６２？　体重５２？
☆本作主人公
召喚と魔法が反映したグラウンドキングダムの中で尤も劣等生とも言われるほど
魔法と召喚に無縁の生活を送っている。
リエイは父が遺した召喚獣で、その強大な力をコントロールする力を秘めていた。
リエイと再び契約しなおしたので、父が契約したときの条項である死は免れた。
新しい代価は謎のまま。

〔リエイ／李叡〕
　犬の姿にして全長１８０ほどの大型犬。　人間姿　身長１５２？　体重４２？
☆アルタの召喚獣。過去、アルタの父と契約していたが、彼が死ぬ際にアルタに契約が
移行された。更に、アルタの父と契約を交わす前はアルタの父となんらかの関係があったと思われるクロードと契約を交わし、その中で今の名前を与えられる。
オーヴァンと出会う前に何かしでかしたようで、そのことを語ろうとはしない
天界の神獣クラスの召喚獣である。

〔ウルリア・ダックフォーズ〕
１５歳　男　身長１５０？　体重４０？
☆アルタの親友。しかし失踪し、その後はアルタの呪いに関わったとされるクロードと関係のある人物。彼と接触した瞬間、抑止反応が起き、召喚獣ではないかとも疑われている。
今は大会に参加しているのか、クロードと何の関係があるのかも一切の謎。

〔ヘティー・ディズリー〕
１６歳　女　身長１５５？　体重４５？
☆アルタを弱者として目の仇にしている、お嬢様。
だがその虚勢の裏には両親をクロードに傷つけられてのものである。
母は廃人と化し、父は死亡している。母親は１４賢者の末裔一人。
主に家畜や妖獣などを召喚する。得意なのは召喚

〔シモン・マクベイン〕
２３歳　男　身長１７５？　体重６５？
☆シモンの叔父、オーヴァンの弟。
グラウンドキングダムでの王位継承権は、妾と作った子供として剥奪されている。
官能小説を書く生業をしているが、彼の養母が貴族で魔法商業マクベイン家をしていた為、
アルタにその家を譲りたいと考えていた。
１４賢者の末裔の一人。

〔オーヴァン・サレディーション・グラウンド１５世〕
　不明
☆アルタの父で先々代の人間界、グラウンドキングダムを治めていた王。何か大きな目的を持ってリエイと契約していたが、その中で自分の身の危険を感じ、乳母であるコルネリアにアルタと魔石を預けて命を絶った。

〔クロード・バスキンズ／シータ・エーベルリン〕
　不明
☆この世界になんらかの干渉をしようとする男。
オーヴァンと何か関係があったようだが何が起こったかは一切不明。
何の関係性があってか、シモン幼少期の姿を借りているため、その本当の姿は知れない。
だがオーヴァンと関係があった為、少なくとも子供ではないことは確か。
アルタの命を狙っている。

〔シュキア〕
　不明
☆アルタの母。東洋系の女性で容姿端麗、オーヴァンとは幼い頃から許嫁だった。
世界の創生に関わる重要な魔石を体に宿しており、今は失踪している。
１４賢者末裔の一人で、イヴの魔石を保有している。

〔ウィリアム・ボネット〕
　不明　男　身長１８２？　体重７０？

☆アルタのバトラー。ウーラノスの精鋭の一人で、軍階級に表せば大佐。
アルタによくしてみせているが、本意は謎。
主に妖精など召喚する。

〔エミリー・カイザース〕
不明　女　身長１５０？　体重秘密
☆当初、ウィリアムの付き人のようにしていたが、本来は謎の人物。
ウィリアムより力を有しているようだが、基本は回復魔法、召喚が得意。
赤頭巾のような愛らしい姿の反面、口調は老人のよう。

〔コルネリア〕
３８歳　女　身長１６５？　体重５５？
☆アルタの乳母で、オーヴァンの従者。
アルタが通っていた学園で呪術の専門で教師をしていた。

〔ルーペルト〕
３０歳　男　身長１７２？　体重６４？
☆アルタの通っていた学園の教師。

〔アーデルハイト・バッカー〕
１４歳　女　身長１５２？　体重４０？
☆大会前に出会った少女。どこか天然のようなおっとりした性格の少女で、
アルタとリエイにすぐ打ち解けた。特別な力を有しているため、妹

であるモニカに
いつも口酸っぱく言われている毎日

〔モニカ・リッシェル〕
　１４歳　女　身長１５０？　体重３８？
☆アーデルハイトの妹。ツインテールにツンデレという典型的な性格。
アルタに好意を抱いたが、あることがきっかけで中々人に素直になれないため、
アルタによく思われてない。
不思議な能力を有していて、姉のアーデルハイトとは別に特別な能力。

〔フレディク・バーシュナート〕
　１９歳　男　身長１７９？　体重６８？
☆アルタとルームメイトの青年。人当たりがいいが、
どんな能力を有しているのか不明

〔ニコデムス・アスピヴァーラ〕
　３５歳　男　身長１８０？　体重７２？
☆エーオース統括。規律に正しく、それに外れる者は受け付けられない真面目な性格。
ヨハンは特にそれに当たる

〔ヨハン・クロンクヴィスト〕
　不明　男　身長１７８？　体重７０？

☆オネイロス統括。自分を楽しませてくれるものが好き。科学を専門としているが
解体や、人体実験、冥府などの契約や禁忌など黒い噂が絶えない男。
アルタに目をつけている。

☆ウーラノス統括、不明

〔マーテル・ジックス〕
２６歳　女　身長１６８？　体重５７？
☆アルタが恋心抱く、少しワイルドで肉感的美女。
男言葉を話すが、内面はわりと女らしい一面もある。

プロローグ

男は、胸に抱えた小さな我が子を隠しながら路地を駆けていた。追っ手はすぐそこまで迫っていて、一刻の猶予もなかった。泣き叫ぶ子供をあやしながら、男は従者の女に子供を預け、刺青が描かれた額に触れた。

「この呪いを受け渡すこと…許してくれ、息子よ…」

ほのかな光が指先に宿り、額の紋章が消えた。そっと小さな手のひらに指先を持ってゆくと、柔らかい小さな手は真っ赤な光に包まれた。男は苦しげな表情をし、女に振り返って大きく頷くと、被っていたフードを取ってきた道を戻って走り出した。
女は男が見えなくなると、赤ん坊が包まれた布に顔を埋めて泣いた。

「どうか、あなた様だけはお強く生きてくださいまし」
そして女は赤ん坊を抱えたまま走り出した。
手の中の赤ん坊は、今自分の置かれた環境全てが理解できず、ただ父を呼ぶように泣く。
手の甲に刻まれた光はやがて収まり、彼が十六の誕生日を迎えるその日まで輝くことはなかった。

アルタの赤い狗

アルタは所謂落第生だった。授業態度が悪いとか、素行が悪いわけでもなく、彼には元々才能が皆無に等しくなかった。ものごころつく前から叔父に預けられて育ったアルタは、元貴族のいい家の育

ちで生活に不自由はなかったが、魔法と召喚獣が当たり前のように生活や社会に取り込まれていた世界の中で、一番不得手なものがその魔法と召喚術だった。
生まれてすぐの子供ですら使えるような弱い魔法や、召喚術が使えず、彼はかねてからこの事に苦しんでいた。叔父は家を継がせたいからと、なんとしても召喚術を学んでほしい一心で彼を魔術学校に入学させたが、彼の才能が花開く瞬間が一度も訪れることなく、魔術学校に入って、十年が経とうとしていた。

「おはよう、アルタ」
「ああ、おはよう、ウルリア」

彼は玄関先で出会った友人、ウルリアに笑顔を向けられ、力なく微笑んで返した。教科書を詰め込んだ鞄を側において靴を履き替え始めたウルリアは、やけに元気のないアルタの様子に苦笑した。

「元気出しなよ、実施って言ったって訓練だからさ、できなくったって成績には入らないよ」
「だけどなー、ウルリア。それはいつもじゃない。いずれ成績に関わる成果を求められる日がくるだろう?あー、やるせない、俺、叔父さんになんて顔していればいいんだ」

ウルリアは靴のかかとを叩きながら、下駄箱に額を預けてうなだれたアルタの肩を叩いて、思い出したように鞄を開いた。

「そうだ!僕、お守りを作ってきたんだ、ほら」

ウルリアは鞄から取り出した金メッキのロザリオを差し出して笑顔をみせた。アルタは下駄箱から顔を上げて、ウルリアからロザリオを受け取った。

「これは、召喚の媒体に使うと苦手な人でも低クラスの昆虫ぐらいは呼べるようになる。実施では召喚できるかどうかがまず試されるから、これ、使ったらいいよ」
「…サンキュ、ウルリア。」
「ううん、見て。僕のとお揃いだよ」

ウルリアは首からぶら下げた全く同じ型のロザリオを引っ張り出した。アルタはやや照れくさそうに笑うと、頭を少し掻いて笑った。

「なんか女の子みたいで、恥ずかしいな」
「何言ってるのさ。概製品だと思えばいいでしょ、ほら早速試してみるから教室に急ぐよ」
「お、おい、そんな引っ張んな！」

ウルリアは張り切った様子でアルタの制服を掴んで歩き出した。落ち込んで作業がやたらと遅かったアルタは半分脱ぎかけた靴を下駄箱に放り込んで、靴を取り出した。ウルリアはそんなアルタの様子を見ていてか、知らずか、彼が裸足のまま教室を目指して歩き始めた。

二話

「この世界で召喚できる召喚獣は大きく分かれていて、下から虫類、家畜、妖獣、妖精、霊、神の使い、神獣…」

アルタは結局、ウルリアにまだ寒い時期だというのに裸足で連れまわされ、教室の椅子に座って靴を履き直していた。教科書には色つきで召喚できる物が記載されていたが、彼は授業だけはまともにと受けていたので、ウルリアの初歩的な解説は受け流していた。ウルリアはその中から虫類に大きく丸を教科書に書き込んで、首から下げていたロザリオを取り出した。

「この虫類は数がとても多いから、詠唱時間も短いし、使役に失敗してもまた新しいものを喚べて便利なんだ」

ウルリアはロザリオをアルタの机の中心に置き、その周りを黒いペンで囲んで両手を組んだ。ただペンで囲まれただけの魔方陣はロザリオを媒介として輝き、白い光を生み出した。やがて白い光が消えてゆくのと共に、二人の目の前に黒く大きな羽を持つ蝶が舞い降りた。

「召喚獣は、自分の名を刻んだ物か、自分が召喚したと証明できるものがないと召喚できない。そこ等辺はまあ、授業で習った通りだけど」

「じゃあ俺のやりかたが間違っていたのかな」

「分からないけれど…、ロザリオに名前を刻んで試してみるといいよ。」

アルタはウルリアが召喚した蝶を見上げてため息をついた。生まれてから一度たりとも、召喚に成功したためしがなく、今目の前を舞っているこの蝶ですら、アルタには難関だった。
アルタは大きく息を吸い込んで、渡されたロザリオにペンの先端で軽く傷をつけるように名前を彫った。

「これでいいのか？」
「うん、上出来。レベルの低い召喚物は、使役の義務がない。たとえば僕達には無理だけれど、霊や悪属性の召喚をした場合、何か必ず役割を与えなければ見返りを求められるリスクが伴うんだ」
「まあ…俺には関係のない話だ…」

アルタはロザリオをウルリアが実戦してみせたようにペンで囲んで意識を集中させた。できるだけ召喚する対象を思い浮かべながら、アルタは暫く目を閉じていた。だが魔方陣に変化はなく、ロザリオも輝かない。アルタは諦めたように机に書き込んだ円を指で消した。

「駄目だ…ぜんっぜん何も出てこねえ…」
「ううん、困ったね…」

落胆の表情を見せるアルタに、かける言葉が見つからず、ロザリオを仕舞ったウルリアは、甲高い笑い声に反応して顔を上げた。

「落ちこぼれ二人が、仲良くお遊戯かしら？」

狐のように釣りあがった目は、挑発的な言葉とともに、なじる様に二人を見つめた。アルタは眉を寄せ、つっかかってきた一人の少女と、その背後に立った取り巻きの少年を見上げる。

「ヘティー…。」

「ごめんなさいね、思わず目も当てられないから口を出しちゃったわ」

取り巻きの二人である少年、バーツとライアンがヘティーの言葉に下品な笑い声を上げた。ヘティーは端整な顔を歪ませて口元を手で隠して笑んで、アルタの机の上の物を片手でなぎ払った。

「アンタにはこの学園は似合わないわ。さっさと出て行ったらどうなの、アルタ・マクベイン」

「俺は…十五年間本当の息子のように接してくれた叔父さんにどうにかして恩返ししたい、その為にここに通わせてもらっているんだ！軽々しくそんな事を言うな！」

アルタの机から、ウルリアが作った彼のロザリオ、教科書と筆記用具が大きな音を立てて床へと落ちていった。ウルリアはそれらを拾い上げ、今にもヘティー掴みかかりそうなアルタの手を引いた。

「アルタ！」

「まあ、野蛮。簡単な召喚もできないくせに、笑わせるわね。行くわよ」

ヘティーは嘲笑し、アルタを一瞥すると、背を向けて歩き出した。アルタはまだ怒りが収まらず、ヘティーを呼び止めようとしたが、ウルリアがそれを止めた。

「止めときなって、アルタ。彼女の父親はこの学園に莫大な投資をしていて、この学園は彼女に頭が上がらないんだ。だから付け上がってあんな事を言っているだけさ」

「くそ、俺にもう少し希望があったら…、あんな事、言われず済んだのに…！」

学園に付属した教会の鐘が厳かな音を立てて響き渡る。授業の始まりの合図に使われている鐘の音に、周りの生徒はぞろぞろと着席を始めた。

ウルリアは拾ったアルタのロザリオとペンを返し、自分の教科書を抱えて椅子から立ち上がった。

アルタは不服げにまだ奥の席にツンと澄まして座ったヘティーを睨んでいたが、ウルリアを見上げ、軽く手を振った。

「じゃあ次はお昼休みに」

ウルリアが自分のクラスへと戻っていったのを見つめながら、アルタは手の甲に刻まれた複雑な紋章を見つめて嘆息する。

（こんな飾りの魔方陣を残してくれるなら、他にもっといいもんが無かったのかよ、親父…）

父は生まれてすぐに事故で死んだと聞かされていた。唯一自分が残されたのは、この紋章が刻まれた手の甲と、包まれていた布一枚だったのだという。両親がどんな顔をしていて、どんな生活をしていたか知らない。アルタはせめて、術が使える能力ぐらいは授けていて欲しかったといつも思っていた。

やがて教師が入ってくると、自然に授業は始まった。アルタは先ほどヘティーに落とされたペンをじっと眺めながら、自分が行うことのできない知識を身につけるために机へと向かうのだった。

三話

昼休み。普段ならもう顔を見せてもおかしくはないのだが、まだ訪れる様子がないウルリアに、アルタは時計を見上げて痺れをきらした。まだ課題か何かの途中作業をしているのかもしれないと踏んだアルタは、すぐ隣の教室を覗いてみることにした。

彼とウルリアは前の学年で一緒のクラスとなり、友人となった。落ちこぼれだったアルタを構う生徒など少なく、友人というものが生涯で初めてだったのが、ウルリアだった。ウルリア自身、あまり召喚が得意ではなく、そういった点からも次第に親しくなるきっかけがあった。

アルタは昼を思い思いに過ごす他クラスの様子を伺いながら、ウルリアの席を見遣る。そこに慣れた友人の姿はなく、アルタは近くの生徒に声を掛けた。

「ウルリア…見なかった？」

「ウルリア？彼ならさっき、ディズリー嬢の取り巻きと教室を出て行ったけど…」

「ヘティーと…？」

アルタは妙な胸騒ぎに駆られて教室を飛び出した。ヘティーがアルタとウルリアを目の敵にしてきたのはこれが初めてではない。もしかしたら自分の態度が気に入らず、ウルリアに何かしているんじゃないかと思うと、アルタは不安になった。

教室を出て、階段を降り、ウルリアの姿を捜していたアルタは、ふと階段の窓の下に視線を遣った。

そこにはヘティーが何者かと話している姿あった。壁に押し付けられているのか、話している人物の顔は見えない。アルタは身を乗り出して誰と会話しているのか確認しようと背伸びをした。

（…！ウルリア！）

やはりそこいたのは友人の姿。数度殴られたのか、少し腫らした頬が痛々しく目に映る。

アルタは急いで階段を駆け下りて中庭に向かった。

「ウルリア！」

アルタが駆けつけると、ヘティーは満足そうに笑んでウルリアを離した。彼女の手には曲がったウルリアのロザリオが握られていて、ウルリアは駆けつけてきたアルタを見つめて首を振った。

アルタはウルリアに駆け寄ると、彼をおぶってヘティーを睨みつけた。

「何でこんな事をするんだ！？お前は俺の何がそんなに気に食わない！」

「全てよ。弱くて、能が無くて、財力も、頼るものもない完全なる弱者。私は違う、完全なる強者。それなのにも関わらず、あなたみたいな弱者が一生懸命必死になって強者に挑もうとする姿勢が気に食わない」

ヘティーはブロンドの髪を振り払って口角を上げた。美しい容姿とは相反し、真っ黒な彼女の内側に、アルタは吐き気すら感じて苦い表情をした。背中のウルリアはアルタから離されようと、彼の背中を弱弱しく叩いた。

「アルタ…、彼女、ほんき…だから、逃げ…て」

「もう大丈夫だ、ウルリア」

「弱者は、強者にひざまづく為にあるのよ。そうでしょ？」

アルタは拳を握り締めてヘティーを真っ直ぐと見据えた。彼女は薄く笑みを湛えたまま、自らの手でへし折ったウルリアのロザリオを空に掲げて目を閉じた。地面に描き込まれていた魔法陣がまばゆい光が放たれる。彼女のすぐ側に召喚された二頭のイノシシは、鼻息を荒げて前足を蹴り上げた。

「家畜なんてまだまだ序盤よ？」

さらに彼女は取り巻きの二人にも召喚を促して、イノシシ二頭、妖精が三人召喚され、みなが使役の目的を理解した様子でアルタとウルリアを見つめていた。

「…が、学園で戦闘目的の召喚は…禁止されて…」
「それはここの法でしょう？私には、関係ないもの！」
「アルタ！逃げて！」

アルタは襲い来る召喚獣を見つめて、唇をかみ締めた。もしも自分に彼らに太刀打ちする力があったなら。召喚術が使えたなら。そうしたらウルリアを最初からこんな目に遭わせてしまうこともなかった。アルタは自分の弱さを恨んで目を強く閉じた。
もう目の前まで妖精と、イノシシが迫っていた。アルタはウルリアを庇うように背中を向けて、しゃがみ込んだ。

「力の差を思い知れ！」

ヘティーの叫び声と共に、アルタの手の甲が真っ赤な光を帯びた。
それはほんの刹那の出来事で、彼女たちの眼には留まらなかったが、

アルタはしっかりとその光を目に留めた。神々しく、攻撃的なその赤色の光はやがて、アルタ自身を包み込み、巨大な光を生んで辺りを真っ赤に染め上げた。

『名前を呼んでください』

「な、名前?!お前は一体誰だ!」

『さあ、名前を呼んで。使役して。僕はあなたの剣です』

名前が頭に浮かんできて、アルタは咄嗟に力一杯、その声にすがり叫んだ。

「ウルリアを守ってくれ、リエイ!」

その声に応えるように、雄雄しい犬の遠吠えが中庭に響き渡った。突然攻撃をやめてしまった召喚獣にたじろいだヘティーは、一体何が起きたのか分からず屈んだままのアルタを凝視して、その側に座り込んだ真紅の毛を持つ犬を見つけて息を飲んだ。

「何…あの犬は…!」

その鋭い瞳は一言で表すならば畏怖。とてつもないプレッシャーを与え、美しいしなやかな体を伸ばして三人を威嚇する。真っ赤な毛の間から覗く獰猛な爪が、大きな溝を地面に作っていた。

ヘティーは信じられずただ首を振りながらまだ召喚中だというのに魔法陣から後ずさって犬から離れようと本能が警告を鳴らしているのに気がついた。

召喚されていたイノシシは煙と共に消えうせ、バーツとライアンが召喚した妖精も逃げ出すように姿を消した。

「信じられない、嘘でしょ…あの赤い犬…」

ヘティーは口を両手で覆い、震える声で呟いた。

「神クラスの、召喚獣じゃない…」

真紅の犬、リエイは咆哮を上げて身を低くした。そして怯えるヘティーに向かってその鋭利な爪を振り上げたのだった。

四話

リエイという赤い犬は、爪の先端をあと一ミリでも違えば刺さってしまうほどで前足を止めた。目の前には冷や汗をかいたアルタの姿があった。ヘティーは咄嗟に突き飛ばされたアルタに命を助けられ、へたり込んだまま唖然としてアルタを見つめた。
リエイは爪を隠してすっと体制を直すと、アルタの側に擦り寄った。

「一体何が起きたんだ?」

アルタはヘティーを守る為に落としてしまったウルリアを抱え、リエイを見遣った。名前が頭に瞬時に浮かんだ後は、リエイのあまりに速い動きに目が追いつかなかった。彼がヘティーを守れたのも、幸運だったとしかいい様がない。ヘティーは急いで立ち上がると、アルタを一瞥して走り去った。アルタは何故こんな事をしたのかと問い詰めようと追いかけたが、アルタのブレザーを噛んだリエイがそれを引き止めた。

「お前…」
「これ以上あの者を追うのは無意味です。今はあなた様のご友人を介抱しましょう」
「うおっ、喋った!」

アルタはウルリアを一度降ろし、しゃがみ込んでリエイを見つめた。ウルリアは驚いた様子でリエイを見つめ、交互にアルタへと視線を移した。

「お初にお目にかかります。僕は李叡。前の主であるオーヴァン様から継承され、あなた様に使役されるべく、機会をうかがっており

ました」
「オーヴァン？それは父さんの名前か？」
「はい。あなた様のお父上であらせられます。オーヴァン様は、僕と三つの条約を元に僕がオーヴァン様のお命を頂くまでの間、長期契約をすることを約束いたしました。」
「ちょ、ちょっと待て！」

アルタは立ち上がって首を傾げたリエイを見つめた。頭がうまく整理できず、アルタは大きく深呼吸するとくしゃっ、としわを寄せた表情でリエイに尋ねた。

「いいか、まず…えっと、継承ってどういう事だ？あと、父さんの命を貰うって…何だ？」
「継承というのはそのままの意味でのこと。僕はオーヴァン様との契約を破棄され、あなた様に譲られたのです。ですから、先ほど申し上げました三つの条約をあなた様に守って頂く義務があります」
「おい…って事は、俺、お前に殺されちまうのか？」

リエイは実に人間らしいしぐさでふいっ、と視線を逸らすと、ややあって言いにくそうに告げた。

「そういうことに…なりますね。あなた様の使役が終われば…」
「な、な、なん…、」
「まあ、それに関しては追々交渉いたしましょうか、さて」

アルタはまだいい足りなく、聞き足りず、口を開いて文句の一つでもいってやろうかとしたが、すぐにリエイに阻まれて口を閉じた。

「ご友人がお怪我なされているのですから、僕がお運びいたしましょう。どうぞ背中へ」

アルタは不服で、無理やり割り込んで話題を変えたリエイを信用するべきかと悩んだ。だがあっさりとリエイは鼻先でウルリアの体を抱え、背中に放り込む。アルタはウルリアの怪我の具合がまず大事と判断したのか、そのままリエイに任せておくことにした。
ウルリアは暫く黙っていたが、やがて思い立ったようにアルタに声を掛けた。

「ねえ、アルタ…ちょっと聞きたいんだけど…」
「どうかしたのか？傷が痛むのか？」
「あ、いや、あのさ…さっきから誰と話しているのかなーって」
「…リエイの声が聞こえないのか？」

リエイは頷くように少し頭を下げ、背中におぶったウルリアを見上げた。アルタは自分にしか聞こえないというリエイの声に戸惑う。

「左様でございます。僕の声は契約者であるあなた様にしか聞き取れません」

アルタはウルリアを見遣った。今またリエイに返事をすれば不審がらせてしまうかもしれないと思ったアルタは保健室にウルリアを預けるまで黙っていることにした。リエイもそれを汲み取ったのか、その後は自分から話すことはなかった。

「ごめんね、アルタ…僕が、ヘティーに付いて行っちゃったから

…」

保健室は無人だった。教師は職員室に用があるとのメモを残して部屋を開けていたので、アルタは勝手にベッドと応急処置の道具を借りると、ウルリアの頬の傷を手当てした。
アルコールで湿らせた綿を血が滲んだ傷に持っていくと、大げさなほどウルリアは抵抗をみせ、苦笑する。

「悪い、慣れていなくて」
「う、ううん、こっちこそ」
「…お前、なんでヘティーなんかの口車に乗せられたんだ？何かあったのか？」
「…ほんと、なんにもないよ！ただ、ロザリオを取られちゃって」

アルタは手に張り付く絆創膏をやっきになって剥がしながら、俯いたウルリアを見遣った。ウルリアは何か言いたげに口を動かしていたが、やがて頬に無理やり絆創膏を貼り付けられて話題を変えるのだった。

「そういえば、すごいじゃないかアルタ。どうしてあんなすごい召喚獣が出せること、教えてくれなかったんだい？」
「い、いや、俺も今日初めて知って…俺自身の成果じゃねえし…なんとも言えないな…」
「でも、すごい。名前の契約なんていつの間に覚えたの？」
「名前の…契約？」

アルタは興奮した様子のウルリアに首を傾げた。授業ではまだ聞いたことがない言葉に、ウルリアは喜々としてそれに答えた。

「名前というのはすごい力を持っているのは知っているよね？例えば、ご法度だけど黒魔術では名前で人を縛ったりする術がある。召喚するとき、名前が必要なのはそのためなんだけれど、クラスが高い妖獣とか、霊、神の使いとかは名前を互いに知り、一定の条件の元する高度な召喚術があるんだ」

「頭いてえ…簡単にいうと、名前があればすげえ使役ができる召喚の方法ってことか？」

「そうだね」

アルタはウルリアが腰掛けるベッドの側で寝そべるリエイを一瞥し、目を細めた。ウルリアが言う通りのことは確かにリエイと言っていた事と合致し、リエイは三つの条約があると言っていた。それが何なのかは二人でいる間に話したいのか、声が聞こえるわけでもないのにまだ聞いていない。しかしアルタにとって重要なのは、この召喚に使われた代償が自分の命ということだった。

アルタはそれとなくウルリアに尋ねた。

「なあ、召喚獣が条件を出した上、見返りを求める契約ってあんのか？」

ウルリアは目を見開いて首を振った。

「それは…、禁術だよアルタ」

「きんじゅつ？」

次から次へと新しい言葉が飛び出して、アルタはとうとうベッドに突っ伏してウルリアを見上げた。彼は日ごろの予習の賜物なのだろうが、アルタはそこまで熱心に独学も貫いていなかった為に付いて行けない。

「そういう召喚する者がとてつもない代償を払う召喚は昔禁止されたんだ。そのリスクが大きな召喚は、世界を変える力を持っていると言われているからね」

「世界を…？！」

「そういった召喚をする人は黒魔術で人を呪い殺すよりも簡単に、望んだ未来が手に入る禁術で世界を変えるんだ。つまり、自分が国王に…なるとか…」

アルタは思わず起き上がってまじまじとウルリアの顔を見つめた。まさか自分に継承された力がそんなに強大であるものだと知らなかったアルタは、契約解消の術もいつかは見つかるだろうと気楽に考えていて、ウルリアに教えられた真実に愕然とする。父は自分になんて呪いを残してくれたのかと、紋章が刻まれた手をぎゅっと握り締めた。世界を変える力なんて自分には必要ない。それなりに召喚や魔法が使えればそれでよかったのに。アルタはその先頭が真っ白で、ウルリアの言う言葉が耳からすり抜けていくのを感じた。そして、いつしか自分の命を奪うであろう血のように真っ赤な犬を忌々しげに睨むのだった。

第一章　晴天の霹靂

アルタは今の事柄を整理しだし、口を閉じた。自分がずっと幼かった頃、リエイという召喚獣を預けて消息を断ったオーヴァンという自分の父。そして、その父と契約していた召喚獣リエイは、その父と命と条約を元にとてつもなく大きなことを成し遂げる為に召喚された。そしてそれは達成されたかどうかを置いて、自分に継承され、自分はいつか喚んでもない召喚獣に命を預けなければならない。そして、この一連の召喚は、禁術と呼ばれている。…そこまで整理し、アルタはふと思い出した。

召喚には、名前か、自分が召喚したと証明できるものがなければ召喚することが出来ない。

しかし、あの時ヘティーが持っていたのは、ウルリアの名前が刻まれたロザリオで、それがヘティーの召喚したという証にはならない。それなのにも関わらず、イノシシを召喚してみせたヘティーに、アルタは違和感を感じた。

「なあ、ウルリア…お前あの時…」

アルタは眉間に皺を寄せたまま、ウルリアを見遣った。ウルリアがそれに答えようと振り返った瞬間、いつの間にか側にいたリエイがそれを遮った。

「ご主人、誰かの足音がします。ひとまず僕を見られては色々と面倒なのでは？」

「は…？！ちょっと待っ…」

「行きましょう、彼はここに預けておけば安心なのでしょう？」

アルタはしつこく服を引っ張るリエイをうっとうしげに見つめたが、会話が聞こえないウルリアはのん気にその様子をみて微笑んでいた。

「出たいみたいだね、少し外に行ってきたら？僕はしばらくここにいるよ。昼休みももう終わるし、気にしないでいいよ」

「ったく、ならいいよ。お前も今度からは気をつけろよ！」

「ありがとう、アルタ」

アルタは強引に外へ連れ出そうとするリエイを引き剥がし、のろのろ立ち上がって保健室から出た。

リエイは一足先に保健室から飛び出すと、離れた場所からアルタが来るのを待つことにした。

アルタは戸口まで歩いて行くと、ウルリアに振り返った。

「…ウルリア、今度はちゃんと相談してくれよ…何かあったら、駆けつけるから…」

「うん…もうほんと、大丈夫だから。」

ウルリアはアルタに笑顔を見せた。アルタもその満面の笑みに納得したのか、頷くと保健室を出て行った。ウルリアはアルタが出て行くまで暫くその笑顔でいたが、姿が完全に見えなくなると小さくこぼしてため息をついた。

「ごめん、アルタ…なにもかも、僕のせいだ…」

アルタは救命道具が入った箱の後ろに隠れてこちらを見上げるリエイをうんざりとして見つめた。リエイは犬らしく尻尾を振りながらアルタに駆け寄ると、アルタの服の端を再び噛んだ。

「いや、すみません！では、もう少し安全に話せる場所に移動しましょうか」

「馬鹿を言うな、俺はこれから授業があるんだ。お前と会話している時間はないんだぞ」

「それは…困りました」

「お前、アレ。今までみたいに俺の手に隠れられねえの？」

「それはできません。この姿になった以上、契約のリスタートとして認識されていますので紋章に帰還する理由が必要となります」

「はあ？！」

アルタは頭を抱えた。軽く困ったという間抜け面をした犬よりよっぽど困った状況におかれたアルタは散々言ってやろうと思っていた悪態も飲み込んで出てきたのは長いため息だけだった。

リエイはやや首を傾げて、わん！と元気よく鳴く。

「その理由って何だよ？」

「契約の破棄、契約者の死亡、紋章の描き替えなどがあります」

「じゃあ、その契約破棄っていうのはできないのか？」

「できません」

はっきりと二度目の否定をされたアルタは、しゃがみ込んでリエイの顔を睨んだ。

「おい、どういうことだよ？何で父さんには出来ていて、俺には出来ないんだ？」

「破棄するお力があなた様に残念ながら足りないのです。あなた様のお父様は大召喚師であらせられましたから、その能力をお持ちでしたが、僕の契約は特殊なので、まだ出来ないかと」

アルタは唸り声をあげ、立ち上がると地団駄を踏んで頭を掻き毟った。一言で表すならば混乱状態といった所だろう。

リエイは静かにアルタを見上げたまま、励ますようにもう一度犬らしく吠えた。

「まあ、そうお気を落とされませんよう。僕がいればあなた様は無敵です！」

「はあ、もういい。怒ったって悲しんだって仕方ないもんな…とにかくお前をどうにかしないと…」

「その意気です！」

「…お前、少し黙ってろ」

アルタはリエイを改めて見つめた。体の大きさは人間の子供ほどあった。二本足で立てば、だいたい自分の身長ほどありそうな犬の隠し場所など見当たらない。実際、箱から少しはみ出していた。

アルタは暫く考え込んでいたが、ふとある場所が思い浮かんでリエイに視線を戻した。

「さっき居た中庭、分かるか？」

「はい」

「あこには人が入らないんだ。さっきあれほどの騒ぎを起こしていて誰も来なかったろう？あこの草むらでじっとしていてくれないか」

「それがご命令とあらば」

「じゃあ、それだ、うん、命令」

リエイは畏まったようにお座りすると、風が吹き抜けてゆくような

速さで走り去った。アルタはもう見えなくなったリエイの赤い姿を少し視線で追って、鐘の音を聞き、走り出した。

二話

なんとか授業に間に合ったアルタは、教師が召喚術の実地練習の注意事項を伝える中、上の空だった。何となく手の甲の紋章に視線を遣る。あの一瞬、リエイの姿をそのまま写したような紅の光に包まれた景色が頭に焼き付いて離れない。もしもあの時、ウルリアと早く合流していれば、そもそもヘティーに妙に目をつけられていなければ、自分は才能が無いことを残念に思いながら落第する前に学校を辞めただろう。そして叔父の家を継ぐため、必死に魔法だけはなんとか学んで、家を守って全うな生き方を享受したことだろう。アルタは思いを巡らせ、ため息をついた。

使役する機会を伺って、もう十五年ほどは経っている。平和に暮らしていればリエイは出てこず、安息の最後を迎えられたのだろうか。結局、いつ何が起こるか分からない世の中、事故から守る為に出てきたかもしれない。もっと些細なことで使役されようと出てきたかも。

そう、運命は幼い頃、預けられた瞬間から一ミリだってぶれていないのだ。アルタはそう悟った。

「では…ここで軽い実地のリハーサルをしたいと思う…誰か我こそは、という者、手を挙げなさい」

まだ若い教師は、快活な声で生徒を見渡して尋ねた。だが、小さな囁きが起こっても、誰も手を挙げようとしない。それも想定済みだったのか、誰かを指名しようと教師が品定めしていると、すっ、と細くて人形のような手が天井に向かって突き出された。

教師はその手を挙げた少女に喜んで指名する。

「では、ディズリー。前へ」

アルタは自ら挙手したヘティーを物珍しげに眺めた。出しゃばりのヘティーは、自分の召喚技術を誇っていた為、不審にも思わなかったが、アルタは彼女がしっかりこっちを見つめているのに気が付いた。そして挙げていた手を落として指を突き出したヘティーは、アルタを指して教師に振り替えった。

「…彼を、推薦します」

「なっ」

「…ディズリー、その、マクベインはよそう。彼は召喚術に不得手だ。折角だからディズリー、君が…」

「いいえ、私、見たんです。彼が召喚しているところを」

教室がざわめき、アルタは痛いほどの視線を感じて俯いた。アルタが落ちこぼれであることは教室にいる全員といっていいほどの面子が知っている。最悪の事態に、どうしていいのか分からず、ただ教師が別な生徒を指名してくれないかと祈った。

「…そうか。そんなに言うなら彼に頼もう。すまないがマクベイン、前に出てくれないか」

嘲笑が小さくアルタの周りを取り囲んだ。アルタは唇をかみ締め、席を立ち上がると階段を降りて教壇に上がった。目の前に立ちふさがる黒板がいやに大きく感じられる。これはある種見せしめか何かだとアルタははやく席に戻りたくて仕方が無かった。

教師は心配そうにアルタを見つめ、励ますように背中を叩く。

「無理しなくていい、昆虫でいいから召喚してみせなさい。無理だ

と思ったら言いなさい」

「…はい」

アルタはやや振り返り、じっと自分を見つめるヘティーを睨んだ。何がそんなに気に食わないのか、今日は彼女に散々振り回され、アルタはいよいよ疲労感を覚え始める。

そして震えた手で黒板にロザリオを押し付けると、その周りをチョークで描いた円で囲んだ。

意識を集中させる。具体的に、召喚するというのはどんな感覚であるのか、アルタはまだ知らなかった為、いつも召喚したいものを考えて喚びだそうとしていた。今回も同じように、ウルリアが召喚してみせた漆黒の蝶を思い浮かべて息を吸い込んだ。

円が僅かに光った。アルタは目を見開き、今まで訪れたことのない変化に喜んだ。

だがすぐにそれはかき消され、ロザリオを押さえつけていた手が急激に痛み、アルタはロザリオを握り締めた。

「な…これはどうしたことだ…！？」

教師が焦った表情を見せるなか、簡易な魔法陣は目を開けていられないほど光を放ち、右手の紋章も赤く滲んだ血のように輝きだした。アルタはうめき声をあげ、手を離そうとするが、光が生み出す強大な力がそれを押さえ込んで手が離れない。教師はアルタの手に自身の手を重ねて召喚を解消する呪文を唱え始めた。

だがその呪文に反応し、手がはねつけられるように離れ、アルタは数メートル飛ばされてその場に倒れこんだ。

（なんだこの痛み…！？手が自分のものじゃないみたいだ…！）

カラン、と残ったロザリオが見る影もなくひしゃげて床に落下し、尻餅をついた教師も唖然としてアルタを見遣った。

「…ひとまず、彼を保健室に連れてゆく、授業は自習とする」

教師、ルーペルトはアルタの肩を抱えて歩き出した。ヘティーは不満げな表情で、連れて行かれるアルタを見つめた。

三話

アルタは保健室で手当てを受けながら、複雑そうに紋章を見つめて黙りこくったルーペルトを見遣った。なんと声を掛けるべきか悩んでいるのか、もう掛ける言葉はあるが躊躇っているのか。手当てが終わったあともなにやら落ち着かないルーペルトに、アルタはため息をついてアルタから声を掛けることにした。

「あの、すみません、授業滅茶苦茶にしちゃって」

「い、いや、いいんだ。私こそ、力が及ばなくて…」

最後は聞こえないほど言葉を濁すルーペルトに、アルタは僅かながら動揺した。自分は生徒で、詳しく召喚術について知っているわけでもない。もしかしたら自分が禁術を与えられたことに気づかれているのかもしれないと思うと気が気でなかった。

「…マクベイン、私は君が召喚術が不得手だと知っていながら、指名し、こんな事故を起こしてしまったことを恥じている…だが、もし君に何か事故になるような事に心当たりがあったら教えて欲しい」

アルタは真っ直ぐな視線を送ってくるルーペルトから、そっと視線を逸らした。

そもそも禁術であることで、自分は罰せられてしまわないのか不安で、自分が望んでやったことではないと信じて貰えるかも分からないまま、こんなに大事な事を話していいのか躊躇する。

それに、召喚に到るまでの経緯を話せば、完全にヘティーが悪いとしても彼女が糾弾されてしまうのも忍びなかった。アルタはふっと

笑顔をみせ、首を振った。

「いいえ、俺には全然」

「そうか、すまない、そうだな。では教室に戻るか、立てるか、マクベイン？」

「大丈夫ですって、先生、ありがとうございました」

アルタは軽くお辞儀をし、保健室を足早に去った。ふとベッドに視線を遣ったが、ウルリアの姿がないことに、アルタはどこか安堵していた。

ルーペルトは考えこむように椅子に体を預け、天井を見つめた。

「まさかマクベインに限って…な…」

アルタは保健室を出てすぐ、廊下の門から鼻先を突き出した赤い犬の姿を見つけ、急いで駆け寄った。幸いこの時間は生徒は授業を受けているので、廊下には誰も居なかったが、保健室にはルーペルトが居る。アルタはすぐに鼻を押しやってリエイを見下ろした。

「馬鹿、何してんだ！隠れてろって命令しただろ！」

「はい、いいえ、その」

「何だよ！はっきりしないな」

「抑止反応を確認して…つい、ご主人が心配になって」

「はっ？よくし…？」

リエイは頷くように頭をもたげ、アルタを見つめた。

「実は僕の契約には、他の召喚をしてはならない。という契約が三つのうちの一つなんです」
「な、何だよそれ…じゃあ、俺が召喚使えなかったのは？」
「はい、僕の力と契約の実効です。」
「で、でも今日はちょっと違ったぞ、もう少しで出来ちゃいそうだったけど…」
「それは、契約がリスタートされたからです」

アルタはまた長そうな話にうんざりとしてリエイと廊下を交互に見遣ると、リエイに合わせてしゃがみ込んでその大きな耳にそっと囁く。

「ともかく少し中庭に行こう、授業が終わって誰か来る」
「了解しました」

リエイは先に走り、アルタは少し間を置いてから走り出した。帰宅まであと一時間。はやく帰ってこの犬をどうにかしなければと、アルタの頭はフル回転しながら中庭を目指した。

四話

「契約がリスタートされ、僕の完全なる契約下となった瞬間、授業の間離れていた僕の意思のほんの少しの緩みに、召喚が可能になりました」

アルタは周囲を落ち着き泣く確認すると、芝生が生えた地面に座り込んでリエイを見つめた。赤い毛は少し触るとごわごわしていたが、心地よく、アルタは自分が満足するまで横腹の毛を撫でていた。リエイはもちろんその間も話していたが、腹を出したそうにそわそわしている。

「そして、契約の巡行と、召喚の遂行が反応を起こしあったのが、抑止反応。つまり、互いに力が交差して、抑え切ろうとした僕の力の爆発によってあなた様は怪我をなさいました」

「つ、つまり、あの手によぎった痛みはお前の力？」

「すみません！僕にも契約上どうにもできませんで！」

「危うく死にかけたぞ…」

あの痛みを思い出して腹が立ったのか、撫でるのを途端にやめてしまったアルタに、リエイは少ししょげかえって続けた。

「そう、三つの条約についてのご説明がまだでしたね」

リエイは急にキリッとした面持ちになり、アルタに向きあった。アルタは一番引っかかっていた言葉をようやく聞けるとあって、彼も真面目に体制を整えてリエイを見つめた。

「僕がオーヴァン様に言い渡した条約は三つ。一つは先ほど申し上げましたように、他の召喚をしないこと。これは嫌でも守らされます。そして二つ目は他者に僕の能力を譲る場合に関して、僕の条件を飲むこと。三つ目は神の試練に参加すること」
「…二つ目と三つ目、一体何だ？」
「まず、二つ目はもう実行され、守られていますご安心を」
「い、いや、そうじゃなくて、父さんは何の条件を飲んだんだ？」

リエイはわん！と鳴くと素直に答えた。

「僕は誇り高き神獣。そう易々とどんな人間にでも譲られて従うわけではありません。ちなみにさっきの女は無理ですね！はい！ご主人は選ばれるべくして選ばれたご主人です」
「そ、そうか。」

何だか照れくさいのか、アルタは視線を移して頭を掻いた。

「それで、神の試練…って何だ？」
「これは、どうしても叶えて欲しいことなのですが…」

授業が終わった鐘が鳴り響いた、一斉に生徒のざわめきが広がってゆき、アルタは階段がある小窓を見つめてリエイの頭を押さえて屈んだ。リエイは話している途中だったからか、もごもごと鼻息を立てていたが、そのまま茂みに隠されてようやく顔を上げた。

「見られたらまずいからな、すまん、続けてくれ」
「はい、是非とも」

全ては、四つに分けられている世界というのはご存知でしょうか？まず、当たり前に過ごしているこの魔法と科学、召喚術が反映した世界は神が創造された世界、人間界です。そして、召喚獣でもレベルが低い動植物が生息する原生世界、そしてそれよりランクが上がる霊や妖獣、神の使いである悪魔などが生息した冥府界、そして尤もレベルが高い神獣や神の使いが生息する天界の四つです。

魔法は、与えられたものです。科学と召喚術は生み出された人間たちのものです。

召喚術は他の世界からよりよい生活を営む為に、利害を共にしてなされる契約です。

しかし、この召喚術により、世界の均衡が崩れつつあります。

それは元々いた人間が、召喚したまま朽ち、召喚された他の世界の者が還れなくなるという現象が増えたからです。

ここまではいいですか？あくびしないで下さい。

そして、神は考えました。人が神に近づきすぎたことに気づかれたのです。神は魔法と、召喚術の優れた尤も人間らしくない人物を、人間界に置いておいてはいけないと判断され、ふるいにかけ、その人間らしくない人物を天界に引き入れる。そして魔法や召喚術を、人の子から奪い去り、均衡を戻して世界をリセットしようとお考えです。

嫌な予感がします？はい、すみません。余計なことは言いません。

そのふるいこそ、神の試練という名で呼ばれた大召喚師を生み出す大会なのです。

「ちょっと待て」

「はい」

アルタは長々つらつらと話していたリエイの口を押さえて、眉根を寄せた。

「俺にそれに参加しろと？」
「はい」
「お前しか召喚できなのに？」
「はい」
「魔法も使えないのに？」
「はい、それに関しては条約はないのであなた様の腕次第ですね」
「そして俺に天界へ来いと…言っているのか？」
「できれば、そうですね！」

アルタは頭を抱えて唸った。リエイはアルタのその大げさなリアクションに慣れてきたのか、わん、と吠えて彼の頬を舐めた。

「ですが心配入れません！僕さえいれば百人力です！」
「…もういい。遅れるから俺は教室に帰る…」

アルタはふらふらと立ち上がると中庭の出口へ向かって歩き出した。リエイはわん！ともう一度鳴き、元気がないアルタを呼び止める。

「ご主人！三つ目の契約は参加するだけで構いません。そう気を落とさないで下さい！」
「あーもう分かったから話かけてくれるな。頭を整理したい。帰り迎えに行くからじっとしてろよ」
「はい！」

アルタは尻尾が千切れんばかりに振られたリエイを見つめて、肩を

落として歩き出した。
前途多難。そんな言葉をかみ締めながら…。

五話

アルタはあまりにも漠然としたリエイの話にまだ心と頭の整理が追いつかなかった。父は、何故リエイとの契約を打ち切って自分に押し付けたのか、分からなかった。契約の条項にある、自分の死が怖くなったから?それで可愛くもない子供を叔父に預けたりするのだろうか。アルタはあれこれ考えるのをやめ、教室に辿り着くとドアを開いた。

まだ休み時間の内に帰ってきたから、少し席で落ち着いて座ってから頭を整理しようと思った。

そして顔を上げた瞬間、アルタは自分の周りに好奇な目で見つめるクラスメイトに気が付いて少したじろいで後ずさった。

「アルタ、大丈夫かよ!?」

「さっきの怪我、なんともないの?」

今まで話しかけられたことがない人物までアルタに親しげに声を掛け、皆同じように目の奥底では、あの時何があったのか、詳細に教えてくれと物語っていた。アルタはそんなクラスメイトにうんざりしたものの、薄く笑って手を振った。

「ああ、大丈夫だよ。気にしないでくれ」

アルタの受け流し方が気に食わなかったのか、大丈夫そうでよかった。と声を掛けてクラスメイトは散ってゆく。アルタはため息をつき、ふと視線を感じた先を見遣って顔をしかめた。

(ヘティー、一体何が目的だったんだ?)

こちらを疑わしげな視線で見つめたヘティーは、アルタと視線が交わるとすぐに視線を逸らした。あの時、リエイの姿をはっきり見ていたヘティーと取り巻きの二人なら、自分がしでかしたことをぼやかしてリエイの存在を明るみにさせたと思っていたが、あのクラスメイト達の反応からして、それはないだろうとアルタは直感した。もしかしたら自分がリエイを召喚させたことを面白く思っていないだけかもしれない。そう考えると幾分か気が軽い。アルタもヘティーから視線を外すと、置くの自分の席に腰掛けて深く息を吐き出すのだった。

放課後。生徒が各々帰宅準備を始める中、アルタはウルリアにこのことを相談しようと隣の教室へと赴いていた。しかし保健室に姿がなかったのに、ウルリアの姿は教室にはなく、アルタは少し不安を感じてウルリアの教室を後にした。もしかしたら先ほどの報復をまたヘティーが企てているのではと思うとウルリアが心配でたまらなかった。あんなに怪我を負ったのにまた召喚獣での違法な戦闘を始めていたら、ウルリアはあれだけの怪我では済まないだろう。アルタは色々なところへ走り回って、なるべく人が居ない場所を入念に調べたが、ウルリアの姿がない。念の為、上履きがあるか確認しようと玄関口を訪れたとき、ようやくその姿を確認してアルタは安堵した。

「ウルリア！」

ウルリアは肩を跳ねてこちらを見遣った。それはまるで怯えたようでもあったが、アルタは気づかず、嬉しそうにウルリアに駆け寄っ

た。

「探したんだぞ、無事でよかった。なあこれから時間はあるか？少し話したいことが…」
「ご、ごめんアルタ。これから用事があって…また…今度、」
「ああ、そうか。分かったよ。怪我、大事にしろよ」
「う、うん」

アルタは元気がないウルリアを励まそうと、背中を叩いた。だがその瞬間、凄まじい力がで手が跳ねつけられ、アルタは驚いて数歩後ずさってウルリアを見つめた。ウルリアはハッとしたようにうろたえると、アルタに駆け寄ってその顔を覗き込む。

「大丈夫!?」
「あ、ああ…平気…お前こそ大丈夫か？」
「うん、ごめん、何だっただろうね、今の？…とにかくもう帰らなきゃ、叔父さんによろしく。じゃあ」
「おう、またな」

アルタは笑顔で手を振ったウルリアを見送り、自分の手を見下ろした。あの痛みは既に見覚えがあって、先ほど体験したもの。アルタは震える包帯が巻かれた手をぎゅっと握り締めて険しい表情を取る。

「一体…どういうことだ…さっきの痛みは…」

六話

「抑止反応ですね」

アルタは目の前に大人しく座ったリエイの素早い返事に顔をしかめた。先ほど、ウルリアに触れた瞬間訪れた右手の痛み。その原因を示唆してみれば、リエイは疑いようのない事実だとはっきり返した。勿論、この返答は何となく予想済みだったが、となれば疑問が転がり出た。

先ほどリエイが話した事によれば、抑止反応とは元から召喚済みの召喚獣が、他に召喚されないよう力を行使する時に暴発することを言うのだと聞いた。しかし先ほど触れたのは彼が作ったロザリオでもなく、彼自身、人間に触れて起こった現象。アルタは納得がいかなかった。

「どういう事だよ？俺はただ、ウルリアの背中を叩いただけだぞ？」

「僕にも分かりません…一体何があったのか…」

「お前がわざとやったとは言わない。だけど納得がいかねえ…、何か思い当たることはないのか？」

「いえ…特には…」

アルタはため息一つ、立ち上がると芝生に放っていた鞄を抱えてリエイに振り返った。

「…まあ、いい。ウルリアが怪我したわけじゃねえし、ともかく帰ってお前をどうにかする方法を考える。付いてこいよ」

「は、はい、ご主人！」

リエイはアルタにならって自身も起き上がると後ろから追いかけた。アルタはリエイがちゃんと背後にいることを確認して、歩き出した。

空は赤く日が落ちてゆく様が見えた。魔灯がぼんやりと独りでに灯り始め、いよいよ夜が近づいていることに気が付いた。アルタはもう一度振り返って、あの空よりも情熱的な赤色の毛を持った犬を見つめた。父のことなら、叔父、シモンに問い詰めてみる必要があるとアルタは思った。

ただ、このアルタの叔父は一筋縄でいくような男ではなかった。帰る足取りも、気も重たく。アルタはやや遠回りをしながら家路へと急ぐのであった。

アルタは家に着くと、鞄をそのままに執筆活動する叔父の背中を見つけて大きく深呼吸した。扉が開く音に気づいたのか、羽ペンを鳴らしていたシモンは明るい声で振り向かないままアルタに声を掛けた。

「おかえり、アルタ」

「…ただいま、シモン」

流れるようにペンが音を立ててゆく様を覗き込み、叔父の横顔を見遣った。大きな黒縁の眼鏡が魔灯に照らされて青白く光っていて、その表情は読み取れない。どう話したものかと黙って立ち尽くしていれば、ペンを机に置いてシモンはアルタに振り返った。

「どうしたんだい、黙って立ち尽くして」

シモンはかけていた眼鏡を取り外し、笑みを見せた。その笑顔は見知らぬ女性でもすぐに見惚れてしまいそうな整った笑顔で、勿論顔の造りに関しては言わずもがな。クリーム色の明るい髪がさらりと揺れ、先ほどまで笑顔だったシモンの表情は一変して硬くなった。

「それは…兄さんの召喚獣じゃないか」

「あ、えっとその…、」

「何かあったようだね、アルタ」

シモンは動揺するアルタの様子で何かあったことを即座に見抜き、作業していた机から離れてリエイに近寄り、アルタの顔を見つめた。アルタは勘が鋭く、何に関しても騙し隠せない自身の叔父に感服しながら、リエイが出てくるまでの経緯を話した。

「なるほど…でもアルタとウルリアが無事でよかった。そうでなければ、私は兄さんに合わせる顔がないからね」

「シモン、聞いていいか？」

「ああ、どうぞ。私が答えられる範囲なら答えよう」

「その、父さんのことだけど」

「待った」

まだ最後まで質問を言い切る前に、シモンはアルタの言葉を遮った。

「兄さんに関しては何も言うことが出来ない」

「…またそれ？どうして肉親の情報を、何一つとして教えてくれないんだよ！俺に関係ない話じゃないだろう！」

「悪いが、話したくなくて兄さんに関する話を拒絶しているわけじゃない。話せない理由がある。勿論これも話せない」

「はあ、そう言うとは思っていたよ」

アルタはソファーに身を預けてのけぞった。視界が反転し、自分と血縁関係があるとは思えないほど美しい叔父の逆さまになった顔が、申し訳なさそうにゆがめられていた。アルタは非は自分にあると思ったのか、それ以上言及する気にはなれず、代わりにリエイへと視線を預けた。
リエイはシモンの存在を認識しているのか、嬉しそうに尻尾を振っている。アルタは呆れてリエイから視線を外した。

「ところでアルタ。女の子が男の子にキスをしたくなる瞬間って、何だと思う?」

唐突に振られた話に、アルタは返事のしようがなく、少し体を起こすとシモンを見やった。
彼は先ほどの表情はどこへやら。子供のような純粋な瞳でアルタを見つめていたが、聞いている話は実に下世話であった。彼は官能小説家なので仕方ないといえば仕方ないのだが。
メモを片手に返答を待つシモンを押しのけて、アルタは床に散らばったジュースの瓶を拾い上げ、面倒そうに回答する。

「知るわけがないだろう、だいたい俺は男なんだから」
「何を言っているんだい、想像する幅は私より広いはずだろう?学校で見るだろう?ふっくらした少女の可憐でなまめかしい姿を…」
「見るか!そうそうそんなこと起きないだろ!お前はいい加減そのいかがわしい本を書くのをやめろ!」

シモンは残念そうに微笑むをと、メモに走り書きをした。

「女の子はすこし勝気でキスは躊躇われる…と」
「…サンプルがないからって俺をモデルにするな…」

彼は容姿ばかり優れていたが、中身がてんで駄目で女性といい付き合いをしたことがなかった。そのせいもあってかシモンの官能小説は妙に売れていて、アルタも生活に困らないがこの性格にはアルタもほとほと呆れていたのだ。
アルタは彼がだらしなく散らかした紙を丸めたゴミや飲食した空を一通り掃除すると、自分の部屋へと戻ろうとドアに手をかけた。
リエイを撫でていたシモンはアルタを呼び止めた。

「さっきのことだけど、一つ忠告しておく」
「な、何だよ？」
「兄さんのことを調べてはいけないよ。彼はそれだけ危ないことに関わっていたということを、この子を見れば分かったろう？私は、元々魔法商業に携わるマクベイン家を継いで欲しいという気もあって君を預かったが、それだけではなくて、私は本当に君を息子のように思っているのだからね」
「…何も教えてくれないのに、そんな事を言うのは…間違ってるぜ、シモン」

アルタは部屋をでる間際、リエイを呼んで振り返り、リエイが部屋を出たのを確認して自身も部屋を出た。少し片付いたリビングを見渡して、シモンは険しい表情で手に持っていたメモ用紙を握り締めた。術者の不安定な心を写して、ぼんやりと青白い光を灯した魔灯が揺れた。
シモンは書きかけの原稿用紙をずらして、その下に隠しておいた魔法陣を見遣った。

「そろそろあの子も、自分の道を歩むべき時がきているのかな…」

七話

自室に戻ったアルタは、部屋の戸を乱暴に閉めてベッドに雪崩れ込んだ。うつぶせになって一向に動かないアルタの姿に、リエイは言葉を探しながらアルタの部屋を見渡した。思春期の若い男児の部屋とは思えないほど整理された小奇麗な部屋には、ぎっしり魔導書が詰められた本棚とその隣の机。そして一台のシングルベッドという実にシンプルな構成だった。

アルタはうーうーと唸るのをやめ、勢いよく起き上がるとリエイを睨みつけた。

「なあ！父さんがしていたことって一体何だ？そんなにやばいことしてたのか？」

「えっと…オーヴァン様はご立派な方でした。僕は、あの方に力の悪用をされたことはありません。オーヴァン様の為、その事に関しては信じて下さい。ただ…、」

「ただ？」

「そうですね…時代なども悪かったといいますか…とにかく、僕からオーヴァン様に関して話すことはできません」

「なんだよ！シモンといい、お前といい！もういいよ、俺が真実ってやつを浮き彫りにしてやる」

リエイはすっかりへそを曲げてしまったアルタに、強く詮索することを否定することができなかった。彼が知りたいのはあくまで自分の両親はどんな人物だったのか。という一点で、きっとシモンもいかにオーヴァンが素晴らしい人物であったか伝えたい気持ちはあるだろう。しかし契約したときにリエイはオーヴァンはどれぐらいの覚悟を持って召喚したのかを知っていたため、軽々とその息子を危

険に晒す真似には到れなかった。
例え、契約の最後には、その命を頂戴する形になろうとも…。

「そういえば、シモンとは会ったことがあるんだな。お前」
「はい。オーヴァン様と共に過ごしていた頃、お会いしたことがありました。独特の感覚の持ち主ですが、とても清らかな方だと存知ます」
「…清らか…あの変態が？」
「そういうのは動物的欲求範囲です。僕が言っているのは、心根がしっかりされた方、という意味です」

アルタは少し笑ってリエイの頭を撫でる。

「俺さ、お前にまだ言ってなかったけど、あの時お前が助けてくれて、本当は感謝してたんだぜ？でなけりゃ俺なんてすぐ病院行き。殺されはしなかっただろうけど、ウルリアだってもっと怪我してだろうし…色々あったが、俺も少しは決心ついた」

アルタは立ち上がって大きく伸びをするとぐっと両手で拳を握って気合を入れたように清清しい笑顔をリエイへと向けた。

「そんで、あの時はありがとう、リエイ。俺、父さんのこと、やっぱり知りたいし…お前が言ってたその大会、乗ってやってもいい」
「ご主人…！」
「ただ、一つ教えてくれないか。何故父さんが俺にお前を預けたのか…」

リエイは静かに数秒目を閉じてアルタをまっすぐ見つめた。そして長い間を置いて、恐る恐る、といった風に告げる。

「オーヴァン様はお命を狙われておいででした。彼は、あなた様にその手が伸びた時、ご自身で身を守れるように、僕を預け…そして…お亡くなりになりました」

アルタは少なからずショックを受け、リエイを見つめた。リエイはアルタの衝撃を受けた顔に動揺しながらも、震えた声で続けた。

「実は…あなた様を脅かそうとする脅威は、今だ去っておりません」
「な…？どういうこと…だよ？」
「あなた様のお父上のお命を狙った者は今、あなた様を狙っておいでなのです」
「なんだよ…それ…！」

アルタは思わずよろめき、本棚と肘が接触し、本棚から魔導書があふれ出た。リエイは苦渋の表情を浮かべ、頭を下げた。

「その為、僕は全力を尽くし、あなた様をお守りいたします。」

傅くように頭を垂れたままのリエイに、アルタは首を振った。そして今まで考えたことのなかった事を強く思う。

（父さんは…、俺は、一体…何者なんだ…？）

第二章　ウルリアの失踪

アルタは黙ったリエイに、少し腹を立てた。聞いたのは自分だが、弁解も、説明も、釈明もなく。全てこれは現実で、受け入れろと言わんばかりのその姿に腹が立ったのだ。アルタは落としてしまった魔導書をのろのろと拾い上げる。中の紙が曲がってしまったその大切な魔導書の全てを元に戻すと、アルタは息をついてその場に座り込んだ。

突然召喚してしまった父の召喚獣。母も、父も、その顔と正体さえ知らず耐え抜いていた十六年という長い年月。それがリエイの存在で、緩みつつあるのをアルタは感じていた。もうこれ以上は耐えられない。心が折れてしまいそうだった。召喚の最終条項に自らの命を引き換えておいて、他の奴から救われたってどうにもなるはずがない。結局は使役が終われば、いつとも知れない死が訪れるのだ。

「ご主人…」

「…悪いけど…出て行ってくれ…少し、心を落ち着けたいんだ…ちゃんとお前の言うことを聞くし、父さんについて必要以上に詮索はしない。今分かったよ…」

「…はい…では、落ち着いたら呼んでください…すぐに駆けつけますから…」

リエイは身を乗り出してドアノブを前足で押しやり、ドアを開いた。アルタはベッドに再び倒れこむと、見慣れた天井を見上げて、ただ真っ白になってゆく思考を次第に止めていった。

リエイは後ろ髪引かれるような思いで一度振り返り、残念そうに部

屋を出た。

「やあ、その顔じゃ…アルタに追い出されたかな」

いかがわしい小説を書きながら、シモンは振り向きもせず、リエイが入室したことを悟ったのか開口一番そう述べた。リエイはそっとシモンの足元に近寄ると、鼻先をシモンのすね辺りにこすり付けて甘えたようなしぐさを見せた。シモンは執筆する手を止め、眼鏡越しの優しい瞳でリエイを見下ろした。

「余計なことを言ってしまったんだろう、どうせ。私は賛成しかねるが…まあ、これで幾分かアルタの頭も冷えただろうね」

シモンは立ち上がり、リビングに直結したキッチンへと向かい、食材を保管してある棚を開きながら燻製にされた肉を見つけ、それを裂いてリエイへと渡した。

リエイはお辞儀をし、その裂かれた肉をくわえるとシモンを見上げた。再びジュースの瓶を片手に戻ってきたシモンは、豪快に大きな燻製の肉にかぶりつくと瓶を机へと転がす。

リエイはシモンが肉を食べるのと同時に肉をついばみ始めた。

「リエイ…だったね。アルタをよろしく頼むよ…あの男がアルタを見つける前に…」

リエイはわん！と返事をし、肉を口に頬張った。彼は召喚獣のため、食物を必要としない体だったが折角出されたものと、肉をたいらげる。シモンは数日洗っていないくすんだマグカップにジュースを注ぎ入れてそれを一気に飲み干す。息を吸い込んで大きく吐き出され

た甘ったるい臭いがする息がリエイの鼻元を通り過ぎた。シモンは酔ったように大きく項垂れると小さな声で呟いた。

「クロード・バスキンズ…」

リエイは素早くシモンを一瞥し、シモンはハッとしたように首を振った。

「そうだ、そろそろ夕飯を作ってやらないと…」

シモンは使ったマグと肉に巻きついていた骨を回収すると、またキッチンへと姿を消した。

リエイは最後にシモンが吐き出した人物の名前に身を震わせた。

数十年前、自分に名前を与えた、かつての主人の名前に……。

二話

アルタは、自分が夢を見ていることを悟っていた。ふわふわと安定した感覚に、視界は自分目線に広がっている。ただの空間で何もなく、世界の大半が黒かった。夢だ。即座に理解した。

そしてその空間にぽつん、と一人の少年が座っている。背を向いているので顔もよく見えないが、この暗い中とても明るいその髪色が目を引いた。

燃えるような真っ赤な赤毛。その美しい赤毛はぶらりと三つに編みこまれて背中に垂れていた。そして異国の衣装を身に纏い、誰かを待っているかのようにただ上を見上げている。

声が出なかった。恐らく自分はこの世界の主観者でありながら傍観者で、イレギュラーな存在であることもすぐに悟った。その証拠に体は動かず、ただ目だけがその様を追っている。

少年はやがて立ち上がって、誰もいない空間と話を始めた。それはきっと誰かがいるのだろうが、イレギュラーであるアルタには話し相手が見えない。少年だけが、この世界の全てだった。

やがて話していた相手と口論となったのか、アクションが大きくなり、少年は突き飛ばされたようにその場に倒れこんだ。まるでパントマイムのような場面が繰り広げられ、少年は誰かを引き止めるように手を伸ばした。そして、その誰かが去ってしまったのか、地面に突っ伏した少年は悔しげな動作でそのままうずくまっていた。

アルタが声を掛けた。何故かこの時ばかりは舞台に上がることを許され、それは明確な声となって少年に届く。が、言った側からアルタは何を発したのか忘れてしまった。何故ならこれが全て夢だから

だ。
そして少年が振り返った。

「ご主人！」

アルタは急に大きな声を掛けられて跳ね起きた。お腹には自分の体重半分はあろう大きな犬、リエイが占拠し、その苦しさもあってか胸が異様にドキドキと高鳴って収まらない。アルタは今見たことが全て夢であったことを再度確認して、リエイを押しのけた。

「…重い！」

どうやらあのまま、心の整理とやらをする前に疲労感から眠ってしまったようでリエイはそんなアルタを心配そうに見つめていたが、すぐに腹から退いてベッドの下でお座りをして待つことにした。
アルタは跳ねた髪を撫で付け、皺が広がった服を伸ばすと、わざわざ部屋までやってきたリエイを見つめて尋ねる。

「何か用か？」
「はい、ご夕食の準備が整ったようです。リビングへどうぞ」
「…ああ、分かったよ」

アルタは起き上がり、まだ覚めきらない頭を掻いてぼうっとしていたが、リエイの申し訳なさげな視線を感じて面倒そうに尋ねる。

「何だよ？」
「…いえ、あの、まだ怒っていらっしゃいますか？」

アルタは少し驚いたような表情になり、ふっと微笑んでリエイの頭を撫でた。

「いや、ごめん。俺こそ八つ当たりして悪かったよ…、今行くから先に行っておいてくれ」

「分かりました！」

リエイは機嫌が直ったアルタの姿に喜んで、走ってゆく。アルタは着替えようと襟元を指先で広げた瞬間、包帯が巻かれていた右手に違和感を感じてその手を止めた。

痛みでもなく、かゆさでもない。妙な違和感。そっと包帯を解いて確認したアルタは、紋章を見つめて息を飲んだ。

円で囲まれた紋章に今までは奇怪な模様と魔法に使われる古代の文字が刻まれていた。だがその紋章からするすると蔦が伸びてゆくように、何もしていないのに紋章書き換えられていた。蔦のように広がった黒い線は、ほんの小さな古代文字を刻んでいた。アルタは古代文字に教養がなかったが、不思議とその蔦の部分の文字が頭に流れこんだ。

「我を讃えよ…神は既に過去の遺物？」

アルタはその文字に眉根を寄せ、下の隅に付け足されたイニシャルに気がついて視線を移した。

「C・B？何なんだ…これ…」

三話

夕飯の席につきながら、アルタはもう一度巻きなおした包帯の下の紋章を見遣った。
黙々と自分が作った料理を口に運ぶシモンと、餌を与えられて静かに食べるリエイの姿。
このことを話すべきか迷い、アルタの食事は一向に進まなかった。
シモンはやや視線をあげ、サラダをかき回すアルタを見つめて窘めるように左手を叩いた。

「食べ物をそんな風にしてはいけないよ」
「ご、ごめ…」
「何か考えごとかい？」

シモンはやはり鋭かった。瞬時にアルタが何故食事を進めないのか理由をいくつか考え、最適な言葉を選んだのだろう。アルタは当然ながら心に思い当たる節があったので、少し黙ったが、
リエイとシモン、二人の視線を感じ、首を振って笑んだ。

「…なんでもない。少し眠いなって思っただけだ」
「そう。なら今日は早く寝るといい」
「う、うん…そうする」

何故そう思ったのかは分からないが、アルタはまだこの話はしないほうがいいと思った。それに今日は特別様々なことが起こり、このことでまた何か掘り返すのも面倒だと感じる。フォークできざみ過ぎてしなれたレタスを口に運んで、アルタは考えていた面倒な今日の出来事を追いやってゆくことにしたのだった。

翌日。学園へと向かう為身支度を始めていたアルタは、シモンに呼ばれて彼の書斎へと訪れた。まだ緩んだままのネクタイをきゅっ、と上げつつ、片手でドアノブをひねる。今日が締め切りなのか、徹夜して机に突っ伏したシモンは、弱弱しく彼にソファーを勧めた。

「…座りなよ。すまないけど私はこのままで話そう」

振り向かないシモンの疲れはアルタも十分理解していた為、それに関しては何も言わなかった。

シモンはばたばたと手を大げさに動かしながら見もせずに引き出しを漁り、手に掴んだ感触の物を確かめながら何か探している。アルタは彼の真上にある時計をちらちら気にしながらその様子を待っていた。

「ああ、あった」

ずるりと引き出しから引きずりだした皮の袋。もう随分年期が込められていていい色を出していた。シモンはその細長い皮袋に片手を突っ込んで探り、中から随分太いベルトのようなものを引きずり出してアルタに差し出した。

「これは兄さんが遺した、君の召喚獣の拘束具だよ」

「拘束具？」

「重く考えなくていい。つまり、召喚獣の能力を制限する物だ。これをしていれば他の人にはそうそう見つかることはない。彼は一度召喚してから帰還するまではずっと一緒だからね。役立つだろうと

思って」

黒い動物の皮のベルト、いや首輪は、真ん中に翡翠色に輝く魔石が埋め込んであった。魔石は魔力がもともと篭った石で、姿を見えなくさせるには少し豪華過ぎるほどの高値で取引されている。上品で美しいその首輪にい暫く見惚れていたアルタは、シモンを見上げて、戸惑う。

「こんな高そうなの、俺に渡していいのかよ？」
「何を言っているんだ、それは君のものだよアルタ」
「そうか、ありがとう、大事にするよ」

アルタはシモンに礼を述べて部屋を出た。長話をしていたせいで遅れそうになったアルタは、リエイが待つ自室へと駆けた。リエイは焦った様子のアルタを尻目に大きなあくびをしてベッドの下でアルタを見上げた。

「あ、お帰りなさいご主人」
「早速だけどリエイ、これ、つけてもいいか？」

リエイは少し目を丸くし、渋ったような声を上げた。

「そ、それは拘束具…まさかご主人…僕にそんな物騒なものをつけようと…」
「悪いけどお前を置いておくわけにもいかないだろう？これさえあれば学園内を自由に歩けるんだし、我慢しろよ」
「ご、ご無体な…！」

リエイの抵抗虚しく、暴れるリエイを押さえ込んで拘束具を巻きつけようと首元に触れる。だがアルタがベルトを締めるより簡単に独

りでに巻きついて、中心の魔石は輝きを放つ。それが魔石が持つ魔法の力だと知り、アルタは感嘆の声を上げた。

「おおっ、勝手に巻きついたぞ」
「ううっ、体が急激に重くなってきました…」
「悪いな、リエイ。家に帰ったら外してやるから」
「…そうして頂けるとうれしいです…」

そうこうしている内に時間は登校時間をとっくにむかえ、時間を見て驚いたアルタは急いで鞄をひったくり、リエイと共に家を飛び出した。鞄はいつもより多く詰まった教科書が邪魔をして重く、先ほどの拘束具のせいでリエイの足も遅い。遅刻を覚悟しながら家のすぐ側の坂道を下って、アルタは学園を目指した。

四話

アルタが学園の校門前にたどり着いた瞬間には、教会の鐘が予鈴を響かせていた。アルタは吸い込んだ息で痛んだ肺付近を押さえながら、浅く繰り返される息を整えてうんざりとした表情をみせた。

このアルタが通う学園は、生徒の授業外評価をポイント制で行い、遅刻は勿論減点対象だった。これが溜まれば奉仕活動と、山のように同じ事を書かされる反省文が待っている。

アルタはもう諦め始めたのか、のろのろとここまで酷使した足を引きずり歩き出した。

最近運が無い。そう思いながら。

ふと、横を過ぎ去ってゆく生徒に気がついてアルタは俯いていた頭を上げて、遅刻仲間であろう少年を見上げた。必死になって駆けていった少年は、どういうことか何もない場所で盛大に転んでアルタの目の前に倒れこんだ。どうやら自分のスラックスの裾に足を巻き込んだようで、すりむいたおでこが痛々しい。

アルタは歩いていた為、転がってきた少年を思わず蹴ってしまいそうになって立ち止まる。

少年は放心状態、といった風に仰向けで空を見つめていた。

「お、おい。大丈夫か？」

少年―といってもアルタほどの年だと思われるが―はアルタの存在にようやく気づいたのか、赤面した顔で立ち上がると、体中の砂埃を叩いてアルタに向き合う。ぴん、と跳ねた両側の癖っ毛が特徴的な少年だった。

「ああ、あのっ、ここはクレシール魔術学園で合ってますか？」
「そうだけど…転校生か？」
「は、はい。そうです！今回魔術・召喚クラス第１０学年に転校してまいりましたシータ・エーベルリンといいます！」

アルタはいきなり自己紹介をし、礼儀正しくお辞儀をしたシータに戸惑い、自分もするべきかと悩んだ。しかし、シータはそのままお辞儀から体を起こすと機械のようなぎこちない動きで踵を返し、再び走り出した。アルタは彼が怪我をしている為、呼び止めたが、転校早々遅刻して混乱しているのか彼は振り返らずそのまま走り去っていった。
アルタは何だか不思議なシータの姿に笑んで、彼を見習い、走り出すのだった。

アルタは案の定、三点減点という痛手を負って教室に一限目は入室さえさせてもらえず、職員室で反省文を書いていた。今回は一枚で済んだものの、遅刻して申しわけありませんでした。自覚が足りませんでした。…から一向に進まない。アルタの監視を果せつかされた化学の教師、マイリーは困ったようにおろおろと職員室を見渡していた。

「マクベインくん…最後の行まで書かないと駄目よ…そうじゃないと先生が怒られちゃうから…」

子犬のような大きな瞳に、可憐な姿。男子生徒に尤も人気が高い女教師として有名なマイリーを前にしても、アルタは気が乗らない。側にしっかりと待機するリエイも退屈そうに尻尾を上げ下げしてア

ルタを見上げていた。
アルタは申し訳ないことと、どうして遅刻をしてしまうのかという自分の批判を引き伸ばして書きながら、職員室を見渡す。遅刻仲間のシータはもう教室に合流できたのだろうか。また会ったら話がしたい。そう思った。

「余所見しないで、いいから紙を見つめて」

甘いマイリーの声で我に返ったアルタは、言われた通り紙を見つめる。
少し気になったが、何だか職員室の雰囲気が変だ。妙にそわそわとしていて、それでいて不穏さを感じた。そして何より、担任ではなく、自分と何の関係もないマイリーが監督をしているのもなんだか不自然だった。他の教師は忙しいが、マイリーがたまたまあいていた。そんな風だ。

だが実施試験も近かった為、こんな雰囲気なのだろうと片付けてアルタは反省文を提出し、教室に戻った。
教室では一時間いなかったアルタのことでもちきりだったのか、アルタが入った瞬間、しん、と教室が冷え切り、アルタは顔をしかめる。たった一時間遅刻したぐらいでこんな冷たい視線を浴びせられたのは始めてだった。アルタは動揺して、クラスメイトを見つめた。

何かが異様であることは分かるのだが、その原因が何か分からない。不気味だとすら感じる。アルタは突き刺さるような視線を浴びながら、自分の座席へと移動し、階段をのぼる。するとすれ違った生徒からこんな言葉を突きつけられた。

「人殺し」

アルタは目を見開いてその場に縫い付けられた。何の話だ?アルタが振り返る。
冷酷な多数の両目がアルタを注視し、アルタはいたたまれなさから手のひらに汗が滲んでゆくのを感じた。

「何の話だ…?」

誰も答えない。アルタのすぐ側にいたリエイは唸り声を上げてクラスメイトを威嚇する。
ぽつん、とどこからともなく返事が遅れて返ってきた。

「しらばっくれやがって…ダックフォーズ、お前が殺したんだろ?」

ダックフォーズ。その聞きなれた苗字にアルタは眉根を寄せる。ダックフォーズというのは、ウルリアの性だ。殺した?誰が?俺が?
アルタは全く何を言っているのか分からず、ただ立ち尽くす。
すると椅子の音をわざと高く鳴らしたヘティーが、ううん、と咳払いするとアルタを見下ろした。

「彼、行方不明なんですって。アンタ、最後に会っていたんですってね」

アルタは耳を疑った。ウルリアが行方不明?この痛いほどの視線は、仲が良かった自分が何らかの関連があると疑われているから。そう理解した途端には、アルタは荷物を放り出して隣のクラスに駆け込んでいた。あの日。保健室から出て最後に会ったウルリアはどこかいつもと違った。
何かあったら相談して欲しいと言ったそばからこんなことになるなんて。そうアルタは自分の無力さを悔やんだ。何か事故や事件に巻き込まれていたら。いっそ今聞いたことが全て悪い冗談であって欲

しいと願うアルタは、隣のクラスの教室を開け放った。

もちろん、そこにあったのは望んだ現実ではなかったのだが…。

五話

アルタはその後、担任でもあるルーペルトに呼び出されて職員室へと再び訪れていた。
職員室に向かうまで、ウルリアの所在を確認する為に彼のクラスまで訪れたことから、アルタは教室以外でも冷たい視線で見つめられ、いたたまれない気持ちになった。何故親友であった自分が、ウルリアの失踪に噛んでいなくてはならないのか。アルタは悔しかった。

「マクベイン…！すまない、じゃあ、別室に行こう」

ルーペルトはアルタの姿を確認し、席を立った。心なしか、職員までもが自分を注視している気がし、アルタは落ちつかなかった。とうとう今まで細く保ってきた学園での居場所が、消えうせたのだ。ウルリアという存在は勿論、この騒動ですっかりアルタは悪人として認識されてしまった。
昨日父のことを聞いたときほどの衝撃が、アルタを襲う。
リエイは不安そうにアルタの顔を見つめていた。

職員室から直結して、職員が宿直するときに使う小部屋があった。中には質素なベッドが置いてあり、その側に小さなテーブルが一つと、椅子。それだけでこの部屋はもう満杯だった。ルーペルトは椅子にアルタを座らせ、自身はローブの裾を掴んでベッドに腰掛ける。向かい合うとアルタはつい、目を逸らしてしまった。

「…私達は、君を疑っているわけではない。分かるね」
「…はい」
「ただ、最後に彼と会ったときのことを詳しく教えてほしい…正直に、ね」

アルタは側にうずくまったリエイを一瞥する。彼と最後に出会ったことを赤裸々に話すとすれば、まずこの犬から遡らなければならない。あの時感じたのは紛れも無い抑止反応で、それを抑えて話せばなんてことない別れ際に過ぎない。少し様子がおかしかったが、それも一緒に帰れないと言っただけ。そんなことを不自然だったというには大げさすぎだろう。アルタはそう思った。
リエイはアルタにそっと語りかけた。

「ご主人…ご友人のことを考えるならば、僕のことも話しておいてはいかがでしょうか?」
(で、でも…)
「相手は教師でいらっしゃいます。よほどの人でないなら話しても秘密は守っていただけるのでは?」

アルタはルーペルトを見つめた。彼は身寄りがないウルリアを預かって面倒をみていたという。心の底から心配なのだろう。顔色は悪く、眠れていないのが伺えた。アルタは静かに頷いて、リエイの首輪を外した。

「先生、約束して下さい。このことは、誰にも極力話さないと…」

初め、何も無い空間でパントマイムのように手を動かすアルタを不審がって見つめていたルーペルトも、首輪が外れた途端にベッドからのけぞるようにして驚きを見せた。リエイは、とてつもない神気を纏っていて、彼の姿が見えた途端、ルーペルトにはプレッシャー

すら感じられて思わずのけぞったのだ。
少し言葉が出ない様子のルーペルトに、アルタは改めてリエイの凄さを感じた。
ルーペルトはややあってやっと落ち着いたのか、リエイに釘付けになりながらもふっと笑みを見せた。

「何となく…君が力を持っていることを感じていたんだ…まさかこれほどまでとは思わなかったけれど…やはりあのときの事故は抑止反応か」

アルタはリエイの口以外から抑止反応という言葉が出て、少し驚いた。思い起こせば彼は優秀な召喚師で教師なのだから当然だと理解に到る。触れることすら躊躇われるのか、距離を取ってリエイを見つめたルーペルトは、アルタに視線を戻した。

「これは、君が召喚したのかね」
「…俺は、全然記憶にも無いので、本当かはよく知りませんが…父さんが俺に預けた召喚獣で…つい昨日うっかり出てきちゃって…」
「はは…うっかり出たというレベルの召喚獣ではないな…。」
「…それで、その…ウルリアのことなんですが…」

アルタはリエイの拘束具を握り締めて俯いた。彼はウルリアを息子だとも思うほど学園に入学してからは大切にウルリアを育ててきた親代わり。もしかしたらまた批難されてしまうのでは、と思うとアルタの言葉は続かない。だがそんな心境を汲み取ってくれたのか、ルーペルトはそっとアルタの手を取った。

「マクベイン。君を責めようだなんて思っていない。このことは誰のせいでもないんだ。もしかしたらクラスでいいことがなかったのかもしれないが、私を信じてくれ。」

アルタは頷いた。温かく大きな手のひらが安心感を生んだ。もし信用ならない人なら、リエイがあんな事を言ったりしないだろう。アルタは覚悟を決めた。

「昨日、帰るときにウルリアに会いました。リエイ…召喚獣のことを相談したかったんです。そしたらアイツは用事があるからって帰るって言うんで、軽く挨拶程度に背中を叩いたときに…、抑止反応が…出て…」

ルーペルトは表情をこわばらせた。何かいけないことを言ったのだろうか。不安がるアルタに、ルーペルトは昨日自分が巻いた包帯を見つめておもむろに手を取る。アルタが戸惑っていると、ルーペルトは包帯を解いてアルタの腕を確認した。

「…なっ…?!」

アルタは、一日ぶりに見た自身の手に鳥肌を立たせた。指先から爪をかいくぐって手首の付近まで。アルタが見た時よりも何倍もの蔦がアルタの右手を覆っている。そして、手の甲の魔法陣には」、真っ黒な刺青が生まれていた。それは幾重にも重なった薔薇の花。まるで蔦、いや茨が開花してそうさせたように。

ルーペルトは苦い表情を浮かべて、アルタを見上げる。そして信じられない一言を呟いた。

「…ダックフォーズはもう帰ってこない…」

「な、何故ですか?!」

ルーペルトはやんわりと彼に自分の手の甲が見えるようにかざして、指先を突きつけた。

「この薔薇は黒魔術で植えつけられた君への呪い。」

アルタは目を見開く。何だって？呪い？既にリエイという存在がいるのに？様々な疑問が生まれたが、次の彼の言葉でそれはしゃぼん玉のように弾けた。

「中心の名前は、ウルリア・ダックフォーズ」

ルーペルトはぎゅっと悔しそうにアルタの右手を握ると、かすれた声で告げた。

「彼は黒魔術に堕ちて咎人となったんだ…」

アルタはどこか、苦悶するルーペルトを傍観している自分に気がついた。まるで話が飛んでいて、自分に向けられた話だとは思えない。突然出てきた召喚獣に父の死の真相。おまけに紋章には呪いで、友人は犯罪者と成り果てたと聞かされた。これが現実であるはずが無い。頭の中のオーバーヒートが、火花を散らしているようだった。アルタはそのまま、椅子と共に倒れこむと気絶してしまった。

五話（後書き）

あれ、ウルリアを裏切らせるつもりはなかったのに…私は友人裏切り設定がとても好きなのか…！？

第三章　予選

誰かが呼んでいた。とても心地よい声。頭を撫でてくる温かさ。きっと、母親がいたならこんな風だ。アルタは思った。艶やかな髪の一房が自分の頬を撫でる。くすぐったさに目を細めれば、柔らかい笑みが視界も優しく包む。誰なのかは分からない。でもこれがしっくりくるだろうと、アルタは穏やかな声で、母さん。と呼んだ。

「ご主人！」

アルタは腹の重みに唸り、デジャヴを感じながら圧し掛かるリエイを押して起き上がった。清潔な室内は、滅多にお世話になったことがない保健室の個室。見渡すと薬品の臭いが鼻を突きぬけ、さきほどのこともまた明確な夢であったことを悟った。ふと視界を移せば、いつから居たのかも分からないが舟をこいでいたルーペルトが居る。ハッと目を覚ましてアルタを見つめた。

「マクベイン！」

ルーペルトは思わずアルタの肩を掴んで、アルタが無事であるかを確認する。力の強さに痛みを訴えれば、ルーペルトはすぐに手を離した。

「す、すまない…。君が気絶した為、私も動揺してしまった…酷なことを言った…申し訳なかった」

「いえ…」

少し静寂があって、アルタは新しい包帯を巻かれた右手を見遣った。一体何が起こったのか分からない。ウルリアには自分に対する不満があったのだろうか。一度に色んなことがあったおかげか、もうアルタの頭は冷静さを取り戻してこのことを整理しようとしていた。ルーペルトはアルタに釣られて右手を見つめた。

「少し消えかかっていたが…紋章の端にイニシャルがあったな…知っていたか？」

アルタはややきまりが悪そうにリエイを一瞥し、頷く。リエイは肩をすくめたようにため息を漏らしてうずくまった。

「これは…呪いとは関連していないみたいだが、強い力を感じた…用心しなさい」

「あの、俺、どうなっちゃうんですか？」

ルーペルトは途端目を逸らして今度はこちらがきまりが悪いと言わんばかりに眉を下げる。

「…死に…到るだろうな」

予測していた答えと合致し、アルタは深くため息を吐いた。これでは誰に狙われているのか既にどうでもいいとすら思える。どの道にも色濃く死が待っているという運命に、アルタはうんざりとした。命がいくつあっても足りないというのは正にこの事に違いない。

「用心する間もないですね。」

「しかし希望がないというわけでもない。呪いは打ち消す方法があ

るんだ」
「そうなんですか？」
「ここは魔術学園だからな。エキスパートが揃っている。呪術に、コルネリアという教師がいるんだが…彼女は少し変わっていてな…」
ルーペルトはそのコルネリアという人物を思い浮かべているのか、苦笑してみせる。ますますどんな女性なのかきになる反応だったが、彼は彼女の人柄については一切触れなかった。
「呪術の授業は君の専攻ではないから、会う機会もないだろう。元々彼女は雇われでね、月に数度しか訪れない」
「えっ、じゃあ聞けないじゃないですか！」
「しかし、今度の実施試験には、彼女も出るそうだ。安心していい。腕は確かだからな」
ルーペルトは立ち上がり、個室に備え付けられている電話の側へ寄ってメモ用紙を取り出した。そこに自分のサインと、アルクが彼女の教室に立ち入れるように許可するような文を一言添えてアルタに渡した。
「明日学園に戻るそうだ。訪れなさい。場所は第五魔術訓練ホールから階段を上がった先だ」
「分かりました」
アルタはベッドから起き上がってリエイを見下ろした。気絶した際、ルーペルトがつけたのだろう首輪が彼の首にしっかり巻かれている。巻いてからは見えないのか、ルーペルトは一度も床を見下ろさなかった。
アルタはルーペルトに礼を述べて、個室を出る。
誰もいなくなった個室で、ルーペルトは深く項垂れ、自分の非力さ

を恨んだ。そして教え子であるウルリアが咎堕ちしてしまったのを悔やんだ。

「咎堕ちするほど…一体何がお前を…」

あの右手の黒々とした様子は、リエイと会ったとき異常の戦慄が背中に走った。憎悪で包まれたあの茨たちに刻まれた文字を読み取っていたルーペルトは、本人に告げることが出来ず、たった一人になってようやくかみ締めるようにつぶやいた。

「神を許さない…暁の刃に復讐を……。暁の…」

思い出したのは燃えるような真紅の毛。全てが焼け付くような紅蓮の姿。

ルーペルトは少し考え込んで眉根を寄せた。

「ベルフェゴールの、狗…」

二話

帰宅したアルタは、シモンに見つかる前に自室に閉じこもり、大きくため息を吐き出した。
そして扉を閉めてすぐにへたり込むと心配そうな表情でアルタを見つめていた。アルタはそんなリエイの顔を真っ直ぐ見つめて、自嘲するように笑ってみせた。

「なあ、リエイ。俺が今何考えているか分かるか？」
「いえ…存じ上げません」
「…いっそ、面倒だからこの命くれてやるよって、一瞬思ったよ」
「…ご主人…自暴自棄になってはいけませんよ…」
「わーってるっての。一瞬だよ、いっしゅん！」

アルタはそのまま背中をドアに預けてずるずると倒れこんだ。埃っぽい床が鼻を刺激してむずむずとした。視界はぼんやりとしていて、体はどうしてかだるかった。
ウルリアはこんなことする人間じゃないはずだ。そう言う自分と、ウルリアはついに自分を捨てたんだ。と言う自分とが小競り合いを起こしている。それは暫く止みそうにもなかった。
アルタはゆっくりと起き上がり、鞄を開いて真っ逆さまに振る。中から教科書と自主勉強用に買った魔導書が雪崩れ込んできた。アルタはそこから一冊の本を取り出した。

「心を落ち着けたいとき、俺はいつもこれを読むんだ」
「聖書…ですか」
「ああ。だけど中身は違う」

アルタは聖書、と書かれた質素な作りの本を裏返してカバーをめくった。カバーの下から取り出されたのは綺麗な字で日記、と書かれた皮張りのノートだった。
リエイは人間の文字が読めないため首を傾げてその厚い日記帳を見遣る。アルタはぺらぺらとめくりながら分からない様子のリエイに説明を加えた。

「シモンがくれたんだ。父さんの日記…らしい。最初は事故だって言われてたから真剣に読んだこともないし、文字は古代文字だからよく分からない」
「日記…。今までのことを記した記録ですね。」
「多分シモンも分からないだろうからって、渡してくれたんだと思う。今でも読めない…けど」

アルタは日記をじっと食い入るように見つめて唾を飲み込んだ。

「今ではちょっと分かるんだ。数文字が片言に読める…」
「……それは、本当ですか?」
「ああ、前にお前には言ってなかったけど、最初に手に異常があった時読めたんだ」

リエイは困ったように唸っていたが、アルタはすぐに日記から顔を上げて、先ほどより明るい笑顔でリエイを見つめた。

「おいおい、大丈夫だって。読めても数文字って言ったろ。意味なんて分かんないって」
「そ、それなら安心致しました…」
「これが読めて父さんが思っていたこと全部知れたってフェアじゃないだろ」

アルタは日記を閉じて目を閉じた。父が書き記し、父が生きていたという証に触れるだけで、すこし心が和らいだ気がした。アルタは立ち上がり、シモンの部屋を目指す。

「俺、シモンに話してくる」
「ご主人…」
「悪いけど、お前はここにいてくれ。すぐ戻るから」

アルタはルーペルトが頑丈に巻いた包帯を解いてドアを開いてリエイに振りかえった。
気絶してしまったときは、もう立ち直れないのでは。と心配していたリエイは、そのしっかりとしたアルタの表情を見て、安心する。

（オーヴァン様…あなた様のご子息はご立派であらせられますよ）

彼の強さに関心しながら、リエイは窓の外を見遣った。
十五年前。アルタに引き渡される数時間前のこと。リエイはあの瞬間覚悟を決めて力強く頷いたオーヴァンの姿と今のアルタが重なって見えたのを感じた。
自分が信じた二人目の主人は間違っていなかったのだ。そう思ってリエイは身を低くし、アルタの帰りを待つべくドアをずっと見つめるのだった。

三話

アルタは、部屋に入ってすぐ、今までは転がっていたのがジュース瓶だったのが、今回は酒瓶に変わっていたのを見つけ、大きくため息をついた。どうやら落としてしまったらしい。自棄になって飲んだのが目に浮かんだ。そして足元にはその酒瓶と共に原稿用紙が散らばっているのが何よりの証拠だった。アルタは適当にそれを拾い、とんとんと向きを揃えて汚い机に置く。

肝心のシモンといえば、すっかり酔いつぶれて大事な話どころではなさそうだった。

「シモン」

返事はない。寝ているようではないが、返事をする気力もないようだった。編集者が座っていたのであろう一部だけ丸く片付いた場所に座り込んで、アルタは再び声を掛けた。

「シモン！おい、シモン！」

「うー、うるさい…ごめん、怒鳴らないで頭が痛い…」

「ったく」

アルタは立ち上がり、水を取りにキッチンへ向かう。シモンがああなるのは珍しいことではないので、アルタの対応も様になってきた。シモンがよく使うグラスを丁寧に洗って、アルタはどう切り出すべきかと思案した。突然酔いつぶれた男へ友人に呪詛を植え付けられたなど話しても忘れられて適当な返事をされるのでは？そう思うと長くかかると思い、アルタはうんざりとしてグラスに注いでいた水

を止めた。

部屋に戻ると、今度は熟睡した様子のシモンにため息すら出ない。水を机に置いて、実力行使と、アルタはシモンの肩を揺さ振った。

「おい、この酔っ払い！起きろって！」

「やめて…耳元では…ううっ、頭が痛い」

咄嗟にシモンは、アルタを突き飛ばした。体が不調だったアルタは、そのままよろめき、シモンの机に手をついた。その拍子に水が盛大にこぼれ、グラスが潔く飛び降りて四辺へ散らばる。

「あ！」

アルタは原稿だけでも守ろうと手を伸ばし、水が迫り来る机へ身を乗り出してなんとか原稿を掴み取る。だが、そのとき、体を支える為についた右手が長年シモンが隠していた魔法陣に触れ、壮絶な痛みと電撃のうような鋭い何かがアルタの中へと駆け巡った。

アルタが硬直し、小さな悲鳴を上げたのを感じ、今まで伏せっていたとは思えないほど素早く起き上がったシモンは、紫の光に包まれたアルタに急いで駆け寄った。

「しまった…！アルタ、手を離せ！手を離すんだ！」

三度目に体に走った衝撃。抑止反応ともう一つは違う何か。

アルタは体がうまくシモンのいう事を聞けず、ただ立ち尽くす。シモンは何とかこの効果を打ち消そうと呪文を唱え始めた。

『きて』

声がした。

アルタは頭に駆け巡る大量の情報に捕らわれながら、しっかりとその弱弱しい声を聞き届けた。

『ここに、きて』

バチッ、とスパークしたような激しい音と共に、アルタの手は離れ、彼は気絶もせずただ驚いたようにのけぞって尻餅をついた。シモンは狼狽してアルタの怪我を見つめ、更に怪我とは反対の原稿を握り締めた右手を見つめて息を飲む。

アルタはようやく搾り出したかすれる声でシモンを見つめて告げる。

「今の魔法陣は…俺が生まれたときの…記憶」

シモンは目を逸らして答えない。

体に流れ込んできた電撃のように鋭く走った膨大な情報。それらは全て記憶だったことに気がついた。まるで今までみた夢を一度に頭に叩きつけられるかのような衝撃。

煙をあげた机を見つめて、アルタはシモンの服の裾を掴んで涙を流した。

「俺が辛いとき父さんの日記を見てるように…シモンは俺が生まれたことを…、見ていてくれたのか」

今流れてきた全ての記憶は笑顔と、至福に包まれていた。机に描かれた魔法陣に触れ、少しづつ見たい記憶に触れながら執筆する叔父、

シモンの姿が目に浮かぶようだった。アルタはわんわんと子供のように泣きながら、シモンの服にすがりついた。

「俺、死にたくない…死にたくないよ…」

純粋な、まだ十六の少年の願い。シモンは苦渋の表情を浮かべ、彼の肩を撫でた。

辛い事が連なり、彼の心は限界だったのかもしれない。強がっていても、これが彼の本来あるべき姿だった。何もしてやれないことを分かっていたシモンは唇をかみ締める。

兄が譲った最強の召喚獣。その代償はあまりにも大きかった。

四話

落ち着いたのか、涙で腫れた目を洗ってアルタは改めてシモンと向き合っていた。シモンは鈍ってゆく感覚を取り戻そうと、肘あたりを自らつねって眠くなるのを耐えている様子だった。
アルタは手を見つめて、ため息をついた。

「ウルリアが何を考えていたのか。それを共有してあげられていたら、俺は死なずにすんだのかな」
「…まだ、諦めてはいけない。私も呪術というのには教養がないから解いてあげたくてもできなくて、すまないね、アルタ」
「なあ、この呪いで死ぬのはいつなんだ?」
「その中心の花びらが全て散ったら…死んでしまうだろうね」

なんともロマンチックな…とアルタは冷ややかに思った。薔薇が散る頃、自分の命も同等に散るとういのはまるでおとぎ話のようで、全く現実味がない。いつでも一緒にいた以上、手を下すチャンスはいつだってあっただろうに。アルタは考えるのをやめて首を振る。シモンはアルタの手から視線を逸らし、彼が抱きしめていた原稿を見つめてふっと笑んだ。

「それは…もう必要ないのに」
「…そう、だろうとは思ったけど…来週は取りに来るかもしれないだろ。今週の掲載を休んでさ」
「…どうかね」

アルタは原稿用紙をシモンに返し、何を言うべきかと迷った。
実はもう学校に行きたくない。その代わりに働いて魔法商業を任せ

て貰えるまで勉強する。そう言いたかった。だがそれは十年間学費を払っていたシモンを裏切るのではないかと思いとどまる。学校に行きたくないのはあくまで私情なのだ。アルタが黙っていると、シモンは静かに牽制した。

「学園は、通わなくては駄目だよ」

アルタは返事に詰まってシモンを見上げる。
シモンはゆるく笑って原稿用紙を床において、アルタの肩をたたいた。

「今は、ウルリアがこんなことになって、辛いのは確かに分かるよ。でもそれじゃあ解決にならない。僕はそんな意思の弱い子に、家を渡すわけにはいかないからね」
「分かって…いるけど」
「大丈夫、アルタ。君はいい子だ。きっと君のよさを分かってくれる唯一無二の親友が現れるはずだ」

アルタは軽く頷いて、視線を下げたまま、告げた。

「すごいな…シモンは。俺の心を読んじゃうんだからさ」
「まあ、叔父としては当然、かな」

アルタは笑んだ。
心にはまだ、引っかかることがいくつもあった。
何故父は命を狙われていて、この自分の命まで狙われるのか。ウルリアが自分を始末したい本当の理由と彼の所在。そして、叔父や、リエイが揃って何故叔父の真相を隠しているのか。
アルタは拳を握った。勿論これで負けてやるような軟な気持ちで生きていない。父と母が居なかった十六年。その真相を自らの手で暴

く為、アルタは立ち上がり、見上げたシモンに先ほどより元気な笑顔をみせた。

「俺、言っておくけど。父さんや母さんのこと、知りたいから。調べる」

「…アルタ」

「けど、シモンには迷惑かけねえし、俺も死んでやるつもりはない」

シモンは不安げな表情を見せていたが、やがて頷いた。

「うん、それでこそ兄さんの子供だね。けれど私は忠告はした。二度はないからね、用心しなさい」

アルタもそれに力強く頷いて踵を返し、退室した。

リエイはアルタが帰ってきたのを確認して立ち上がった。アルタはリエイに見向きもせず、一直線に机へと向かうと、先ほど自分がばら撒いた教科書を引っつかんでノートを適当に開いた。何があったのか長い間姿が見えなかった主人をそれなりに心配していたリエイは拍子抜けして言葉を掛けるタイミングを失い、少しおどおどと部屋を見渡してアルタを見つめた。

「あの、ご主人？」

「わりぃ、時間ないんだ。明日実地試験なんだよ。召喚の。お前を召喚することになるから高等召喚術をおさらいしておきたくて」

「その、実施試験について、実はお話があって…」

アルタはインクがボタ落ちしたノートを見つめ、面倒そうにリエイへと振り返る。申し訳なさそうな情けない表情を浮かべたリエイは、アルタの側に近づいて床に座る。

「前に、神の試練への参加を促していたのを覚えていらっしゃいますか？」

「ああ、天界に招待できるほどの召喚師や魔法使いを選ぶとかいう…」

「あの、予選があなた様がお通いになっている学園で秘密裏に開催されます」

「何だって？」

アルタは顔をしかめた。そこまで大規模な大会ならば、学生とわずその存在を知り、自分の能力を信じた者が現れるのだろう。となれば学生と呼ぶにふさわしくない年齢の数十名が集まれば、不自然ではないかとアルタは想像し、リエイを見つめる。

リエイも言いたいことが分かったのか、更に続けた。

「秘密裏といってもごく一部に開催されることを知っている生徒もいるでしょう。僕はこの大会についてはオーヴァン様に予め聞いておいたのでそのことを伝えたく思います。また長い話になるのですが」

「はあ、まあいいよ。父さんの遺言なら仕方ねえよな。参加するぐらいなら俺にも出来そうだし」

「では」

五話

予選は、三会場で催されるようです。まずあなた様が通われる学園、そして魔術訓練場という軍の施設、召喚を取り仕切る教団保有の施設、アンゴラ大聖堂の三つです。その内、あなた様がお通いになっている学園は、実はあなた様の学年は皆強制参加方式で実力を問われます。ふるい落とされた者はその存在も知ることなくこの後また学園生活を勤しみ、卒業しますが、能力を買われた者は即刻で停学となります。その為、実施試験で成績が厳しくされるのはその為で、表向きは劣等生で停学。ということにされるそうです。まあ、僕には何のことかよくわかりません。

それで、停学になった者は呼び出しをされ、残りの学園生活を楽しむか、大会に参加するかを問われます。これはまだ予選です。よほどの力の持ち主でなければ強制はされません。

それから大会が着々と進んでゆきますが、その後半戦では、相手と戦う必要がでます。僕は自立で戦うので問題はありません。

最終的には神が直々にその力を測られます。そうして合格すれば晴れて天上人というわけですね。
毎回説明が長くて申し訳ありません！はい！

「戦うって…！？」
「先ほど申しました、召喚を取り仕切る組織をウーラノス教団といいますが、彼らが立ちはだかるのこともあります。僕は戦闘に特化

した召喚獣ですので、ご安心下さい。」
「…不安だが…すぐ負ければ終わりなんだよな、それならいいよ」
「お言葉ですが、僕は重大なことを伝え漏れていました」
「…な、何だよ?」

リエイは真っ直ぐとアルタを見つめ、じれったくなるほど間を置いて答えた。

「この大会には、十中八九…あなた様のお命を狙い、オーヴァン様を陥れた男が参加いたします」
「何だと?!」

アルタは思わず立ち上がり、言いにくそうに言葉を濁すリエイへとしゃがみ込んでよく聞き取れるように耳をそば立てる。リエイは苦しげな表情をして、

「その…ご主人のご友人も…参加されるのでは…?」

アルタは信じられなかった。
だが成功すれば、天界へと招待されるという眉唾もののこの大会には確かに黒い影を感じた。乗り気ではなく、すぐ学園生活を享受しようとしていたアルタは、改めて己が命運を思い知り、絶句して立ち尽くした。リエイは静かに尾を揺らして頭を垂れる。

「僭越ながら僕が、あなた様の剣となり、戦いましょう」

彼の条約に何故こんなことを約束させていたのかようやくアルタは知った。最初からこの大会に参加するその男を追っていたのはリエイで、自分はそれに抗いようもなく様々な事柄とともに巻き込まれたことを。アルタは怒りと、混乱、どこか悲しみを感じて震える唇

で一言尋ねた。

「その男の…名前は…？」

リエイは戸惑いながら返した。

「クロード・バスキンズ…」

「クロード…？」

頭によぎったイニシャル。アルタは右手をもう一度見つめて息を吐き出した。

「そいつが…俺を…！」

嫌な予感がすぐ背中を撫でているようだった。

予測不能な自分の未来に、アルタは深く嘆息する。呪われた血に流れ込んだその男の名前は、しっかりと頭にしがみついて離れることはなかった。

六話

翌日。朝に弱く、昨日は泥酔状態だったシモンはキッチンに姿を現さなかった。アルタは自分の弁当を作りながら、今朝放り込まれた新聞を珍しく熱心に見つめていた。一面は勿論、記事の端まで目を通したが、そこまで大々的に行われる大会だというのに一切新聞には載っていない。しいて書いてあることといえば、召喚組織とリエイが言っていたウーラノス教団が教会の寄付を募っている広告が大きく出されている程度。アルタは改めてその広告を見つめた。

ウーラノス教団。召喚を行うにあたって、召喚師は必ずこの教会の申請を元に行わなければならない。特例として、アルタが通う学園の生徒は召喚師予備生として召喚が許されている。

一般的に仕事や私生活のため召喚する時は申請の義務があった。

アルタは直接関係が無かった為、いちいち頭に置いていなかった組織だが、

この組織には対に、魔法、科学を取り仕切る組織が分岐していて、それぞれに名前がある。

魔法組織はエーオース、科学をオネイロスといった。

アルタは幸せそうに微笑む少女のイラストが描かれたその広告から顔を上げて時計を見つめた。

少し時間がある。流石に二度も遅刻は出来ないため、早々に準備をしていたアルタは重いため息を吐いて弁当を鞄に突っ込んだ。

アルタは気が重かった。ウルリアの失踪に関して、咎堕ちしてしまったなどとは公表できないであろう学園は、彼は見つかって、学園

に居られない事情から転校。という形を取るのだろうとアルタは考えた。それを言うのは誰でもない、世話をしてきたルーペルトで、この事に疑問を感じない生徒などいないだろう。

咎堕ち。自らの手の甲を見つめてアルタはウルリアを思った。黒魔術は人を攻撃することを目的とした禁術の内の一つ。これを操るものは何か大きなものを代償として人を呪い、そして殺す。呪術は一部合法化しているが、立派な黒魔術の一つだ。

「ご主人、ご準備はよろしいですか？」

ふと足元で座って待機していたリエイに声を掛けられて、アルタはハッとしてもう一度時計を見つめる。調度家を出ようと思っていた時間に差し掛かっていた。アルタはやんわりと笑んでリエイに礼を告げ、鞄を取った。

「いってらっしゃい」

低いしゃがれた声が掛けられる。
アルタは振り返っていつもの輝きを失った美しい叔父を見つめ、再び笑顔となった。

「いってきます」

胸の内は悲しみと、学園で待っているであろう苦難を考えて澱んでいた。それでもアルタのそのときの笑顔は作り物ではなく、自らの強い意志、そして大切な家族に向けられていたため本来彼が持った明るさで包まれていた。
アルタはリエイに一声かけ、玄関へ駆け出す。

そして見送るシモンに手を振り、ドアを開くのだった。

奇異な目で見られることを覚悟していたアルタは、意外にも何の反応もない生徒の反応に、少し驚いていた。どうやら今日行われる試験で、他人のことはどうでもいいのか、皆がふせんだらけの参考書をめくっては黙って歩いてゆくか、何か呟きながら過ぎ去ってゆく。

アルタもようやく今日という日をかみ締め、校舎を見上げた。きっとあの参考書をめくっていた人の中には、この試験の本当の重要さを知っている人が何人もいるはず。最初条約を出されたときは、なんて下らない大会だと思っていたアルタも、今は意気込みが違う。これが父の死と、自分の辿る道の命運を知る試験。気は抜けなかった。

と、そんなアルタの背中に、トン、と軽い衝撃がぶつかり、アルタは少し前のめりになって振り返った。

厚い眼鏡に両側に跳ねた髪が印象的な少年、アルタは一度会ったその少年に気づいて足を止めた。

「えっと…、シータ？」

シータは眼鏡が教科書にくっつくほど寄せていた顔を上げ、アルタを見つめた。

最初は誰か分からなかったのか首を傾げていたが、自分がぶつかったことと、彼を思い出して声を高くして上げた。

「あ、ああ！この前の！」

「そう、俺アルタってんだ。アルタ・マクベイン。この前は自己紹介できなかったけど」

「どうも、この前と今日は済みません、その、あんまり前を見ていなくて」

アルタはシータが食い入るように見つめていた教科書を一瞥し、苦笑しながらそうだね。と答えた。

シータはへらへらと笑っていたが、やがてアルタの足元にわずかに視線を落とし、笑んだ。

「綺麗な犬ですね」

「…えっ？」

アルタはリエイを素早く見つめた。彼の首にはしっかりと今日も巻きつけた拘束具が絞まっていた。

このお蔭で見えなかったことは、魔力が高い教師であるルーペルトで実証済みで、見えるはずがない。アルタは少しあたりを見渡し、他に犬がいないか探したが、足元で座る自分の召喚獣以外にそれらしい姿はない。

アルタは何か尋ねようと口を開いたが、その瞬間それはシータによって阻まれた。

「あ、いけない。職員室寄るように言われてたんだった！じゃあ、」

「えっ、あ、おい！」

アルタの制止もろくに聞かず、シータは危なっかしい足取りで走り

去っていった。
アルタはリエイに振り返り、リエイは首を振った。

「強い力を感じました…何者でしょうか、あの者…」
「お前がこの魔石を使っても見えるなんてすげえな…あいつも大会で優秀なのかな、やっぱ」

アルタはシータの背中を見送り、自分もまた教室へと赴き歩き出した。

第三章　見えないもの

アルタは教室につき、その異質な空気に息を止めた。
皆が予鈴前だというのに机に噛り付いて勉強をしている。
この実地練習は確かにリスクがでかい。失敗、失点すれば停学が食らわされることは既に教師が予め伝えていることで、アルタももちろんルーペルトからそれは聞いている。ただ、一部の人間―アルタも含めての事だが―は停学を望んで勉強している。
このクラスでもそれを知っているものがいるからこそ、この張り詰めた空気が生み出されたのだろう。ほぼ半分の生徒はこの空気に釣られて勉強をしているに違いない。アルタはそう感じた。

リエイはアルタの数歩後ろをついてゆき、一人、勉強していない生徒を見つけて怪訝げにその生徒を見つめる。アルタは急に階段の途中で立ち止まったリエイの視線を追った。

（…ヘティー…）

ツン、と澄まし、必死になっている他の生徒をあざ笑っているように彼女の美しい口元はやや釣りあがっていた。アルタは忌々しげにその様子を眺め、ふと視線が合い、ヘティーが音を出さずに何かを言っていることに気づいた。
アルタはそれを読み、唾を飲んだ。

『あなたもほんとうのいみをしっているんでしょ？』

本当の、意味。

アルタは戦慄すら感じてヘティーを見つめた。彼女は元貴族だったシモンとは比べ物にならないほどの良家で、金持ちのお嬢様。そんなお嬢様が神にもなれるという暗黙の試練を課せられていることを知っているとは驚きだった。まるでこれがアルタと同様、自分の運命だったとでも言わんばかりの覚悟を感じ、アルタは今までリエイさえいれば自分は大丈夫なのでは?という緩んだ心を払拭させた。彼女は何か大きな自分の弱みを知っている。直感的にそう感じた。

アルタはそのまま視線を外して席に着いた。
何となく他の人に習って、自分も教科書を出してみたが、ヘティーが監視しているようでどうも落ち着かなかった。
アルタは大きく深呼吸し、教科書をめくると隣でヘティーを睨むリエイを見つめた。

彼が初めて出てきたときは信用するべきか悩んだ。だが今は信じるべきだと体が訴えていた。
僅かにながらも彼との絆も感じ始めていたアルタは小声でリエイに声を掛けた。

「頼んだぞ」

リエイはしっかりとアルタを見つめ返し、力強く頷いた。

教会の鐘が鳴った。
ざわざわと声が入り混じり、少しいつもの雰囲気に戻った教室に、ルーペルトが入室し、その後から小柄な少年が付いてきた。

ルーペルトは出席簿を打ち鳴らし、静粛に。とよく通る声で告げ、少年に振り返った。

「転校生を紹介する。」

少年が前に出る。アルタは三度目の再会に目を凝らし、驚く。

「今日から我が召喚、魔術十学年亜クラスの一員となる、シータ・エーベルリンだ」

「どうぞ、よろしく」

にこっ、と愛らしい笑顔でお辞儀をしたシータはアルタを見つけ、軽いウインクを送ってきた。

アルタは動揺しながら軽く会釈をし、胸が妙にざわつくのを感じた。

まるでこれらは全て、用意された舞台に立たされているかのように。

二話

休み時間。アルタは隣に座ったシータを暫くぼんやりと見つめた。遠い黒板を必死に見つめる瓶底眼鏡の彼を見ていると、何だか誰かを思い出しそうになる。でもそれが誰で、どうして思い出そうとするのか、アルタには知れなかった。

ふと視線に気づいたのか、シータは笑顔を向ける。ドジで、人の話を全く聞かない。アルタは彼に対してそんな第一印象を植え付けられたので、ぎこちなくその笑顔に苦笑で返す。それと聞いてみたいことがアルタにはあった。どうしてリエイが見えるのか、と。

「ちょっと」

シータに声を掛けようとした瞬間、背後から掛けられた甲高い声に、アルタは固まった。

振り返れば予想通り、ヘティーがこちらを睨んでいる。アルタはうんざりとして振り返り、ヘティーの不満げな表情を見上げた。

「何だよ」

ヘティーはピッ、と真四角に折られた紙を突き出し、一緒に唇も尖らせた。

一見すれば見目は麗しいヘティーのその姿は愛らしかったが、アルタは反吐が出る思いでその紙を受け取った。中を見ようとすれば制止される。顔を上げれば更に不機嫌そうになったヘティーが首を振った。

「渡されてすぐ見るなんてデリカシーがない男ね。でも勘違いしないでよ、ラブレターであることは一生ないから」

「…いちいち嫌味な奴。」

アルタは紙を胸ポケットにしまい、ヘティーの背後を見つめる。いつも当たり前のようにいた取り巻きが今日ばかりは別な所で生徒と他愛ない話をしている様だった。この用事が、よっぽど知られたくないものだというのはアルタは理解し、押し黙った。

ヘティーはすぐそばのシータを一瞥し、踵を返した。

アルタはシータに振り返り、詫びの言葉を掛けた。

そして改めてヘティーがいなくなったのを確認し、アルタはヘティーが寄越した紙を開き、そこに書かれた一文を目で追い、心臓が高鳴り始めるのを感じた。

内容はこう。

『ウルリア・ダックフォーズの秘密を知っている。教えて欲しければ試験を放棄しろ』

秘密？アルタは眉根を寄せた。これではまるで脅迫文だ。アルタは背中に汗が伝ってゆくのを感じ、拳を握る。その秘密が、アルタが知っていることなのか、知らないことなのか。アルタには図りかねた。しかも彼女は今回の試験の意味を知っていて、尚且つリエイという存在を恐れての脅迫だということは明白で、アルタはそれを守ってやる義理はない。

アルタは悩んだ。

もし秘密が彼の所在なら、会って話したいことは沢山ある。それか、彼が咎堕ちしてしまったことを知っているなら彼女にその理由を尋ねなければならない。アルタは覚悟を決め、席を立った。

皆がなんとなくアルタに視線を遣る中、アルタは堂々とヘティーの前まで歩いて行き、静かに告げた。

「俺は試験を放棄することはできない。だが、お前が条件を変えるというなら、何でも従ってやる。俺はお前に何一つ隠し事しないし、嘘は言わない。求めることがあるのはお前の方だ、ヘティー」

ヘティーはまぶた一つぴくりともさせず、突然おおぴろげに手紙の内容に触れることを告げたアルタにただ一言、

「ほっんと、デリカシーってもんがないわね、アンタ」

と返したのだった。

ヘティーは残り数分ともなって、アルタを連れ出し、例の中庭にやってきた。教室からは階段を上がってすぐの中庭だが、試験前だというのに素直にアルタの言い分を聞き分けたヘティーにもまた、事情があったのだろう。ヘティーは中庭に誰もいないことを確かめ、アルタを見つめて端整な顔を歪めた。

「堂々と何を宣言してみているのよ!?習わなかった?言葉は凶器だって!」

「言ったろ、俺は隠すことは何もないからな」

「じゃああのときの召喚獣をどう説明するのよ?!十年召喚できないふりをしていたのは偽りだわ」

「ふりじゃない。できなかったんだ。現に、ここにまだあいつはいる」

ヘティーは飛び出るのでは?というほど大げさに目をむき、辺りを見渡す。アルタはため息をついて首輪を外して見せた。

「きゃ!」

ルーペルトの時もそうだが、リエイはそこにいるだけでとてつもないプレッシャーを与える神獣。召喚者、霊力の高い者でなければ、対峙しているだけでとてつもないストレスが掛かる。ヘティーはすっかり腰を抜かし、立てそうにもなかったのでアルタは再び首輪をはめた。

「…どういうことよ?説明なさいよ!」

「それはこっちの台詞だ。こいつの事を話すと長い。答えてはやるがお前の用件が先だ」

ヘティーはのろのろと立ち上がり、手を差し伸べたアルタの片手を振り払って髪を揺らした。

「ウルリア・ダックフォーズの秘密を話す条件に、あなたは何を差し出すの?」

「俺はこいつとの契約の条約で、この試験は絶対落ちなくてはいけない。だからこれは無理だ」

「…禁術じゃない…。ふん、じゃあ金でも積む?私は高いわよ」

「…お前が望む質問に、誠心誠意答えてやる」

ヘティーは顔をしかめた。どうやら彼女が何か知りたがっているのは当たりのようで、暫く考えるそぶりを見せたヘティーは、疑うよ

うにアルタを見据え、やがて恐る恐る尋ねてきた。

「じゃあ、遠慮なく尋ねるわ…。あなた、エーベルリンとどういう関係？」

アルタはすっかり拍子抜けして一瞬言葉を失った。何故ここでシータが出てくるんだ？と疑問に感じながらも、アルタはありのままに答えた。

「どういうって…。あいつは俺が遅刻してきた時、たまたまあいつも転校生ながら遅刻していて、そん時会っただけだけど…。シータのことがそんなに気になるのか？」

ヘティーはアルタの答えに、何やら真剣に考え込んでいたが、やがてすっと息を吐いてしなやかな髪をもう一度揺らし、ふんわりと花の香りがアルタの鼻腔を過ぎ去った。

「ええそうよ。約束だものね。教えてあげるわ」

「えっ？おい、こんな事でいいのか」

「…別に、たいした秘密なんかじゃないわ」

ヘティーはフン、と鼻を鳴らし、いつもの澄ました声で告げる。

「ウルリア・ダックフォーズはアンタの命を狙っている。それはアンタももう知ってるわよね？」

「…あ、ああ」

「アタシ、その事に気づいて数日前、間抜けにも助けに来たアンタが来る前にここで問い詰めたの」

「な、…！？りえ…、俺の召喚獣が出たあの日か？！」

「そうよ。でも気づいたのは、たまたま。アンタとあいつが目障り

だったから何か懲らしめてやろうとウルリアを尾行してててね、気づいたの」

アルタは、聞いてはいけないような気がしながらも、その続きを尋ねた。

「な、何に？」

ヘティーは綺麗な猫目を吊り上げ、愉快げに笑んだ。

「ウルリア・ダックフォーズなんて人間は、存在しないのよ」

「…どういう…事だよ？」

「彼はね」

ヘティーは前かがみになり、そっと耳元で囁いた。

「誰かが召喚した、召喚獣…だから」

体中の体温がさっと下がってゆくような思いだった。どこか現実から離れている。

いなくなってしまった親友のことが一つ一つ明るみに出る度、アルタはウルリアという人物がどんな人物であったかが、次第に分からなくなっていった。

三話

教会の鐘が鳴り、一人どうすることもできず立ち尽くしてしまったアルタを残し、ヘティーは教室へと戻っていった。アルタが参っている様子が可笑しいのか、ひどくサディスティックな笑みを浮かべたヘティーはそのままゆっくりと後ずさり、走っていった。
アルタはもう試験が始まってしまう、というのも忘れ、その場に崩れこんで今聞いた事を嘘であると言い聞かせた。
ウルリアが人間でなければ、一体だれが自分に呪術をかけたのか。
アルタは白んでゆく頭の中ごと掻き毟るように頭を盛大に掻き毟って芝生に倒れこんだ。
寂しげな鳴き声を上げたリエイが、アルタの鼻先を舐める。

「俺さ、一体なんなんだろうね」
「…ご主人…」

リエイは掛ける言葉が分からず、ただそっと側で座ったまま彼を見下ろした。

「試験も放棄でお昼寝。ようござんすね、ふふっ」

そんな二人の雰囲気に全くと言っていいほど場が離れた明るい声が、突然アルタに降りかかり、アルタは跳ね起きた。
いつの間にいたのか、リエイもアルタに気をとられていたせいで全く気づかなかったその声の主は、アルタに髪がかかるほど近くまで顔を下ろしてじっとアルタを見つめる。
アルタがたじろいでいると、その声の主である女性はむくりと体を起こし、艶のある唇を綺麗に弧を描かせ笑んだ。

「わたくし、生徒は授業料を払っているから是非とも無駄にして欲しくはないと思っているのでございますわ。あーた、何様？こんな所で寝そべっていて、授業料を払っている親御さんはなんとお言いになるのです？」

不思議な言葉使いに、それに合ったような薔薇のコサージュが乗った煌びやかなドレスは、舞踏会には少し華がないほどでも、学園内では異彩を放っていた。

アルタは一人ついてゆけず、くるんと巻かれた房のような金髪を呆然と眺め、はあ、はあ、と息をつくような生返事を返して彼女を見つめる。

女はようやく目の前の生徒が何者であるか突き止めようと、怪訝げな顔で名前を尋ねた。

「それで…あーた、お名前は？」

アルタは彼女が何となく教師であることを悟り、ハッと我に返ったようにしゃきっと背を伸ばして答えた。

「あ、えっと、アルタ・マクベインっていいます！」

女は目を見開いて黙った。

名前を言えといわれて素直に答えたのにこの反応は何だ。と今度はアルタが怪訝そうに見つめ返すと、女はようやく、というように搾り出した声で尋ねた。

「アルタ…マクベイン…？」

「は…はい、あの…」

アルタが何か言う前に、彼にふんわりと優しい衝撃が走った。一度も体験したことが無かった抱きすくめられるという感覚。豊満な彼女の胸と心がアルタを包み込んだ。

「…まさか…まさかこんな所でお会いできるなんて…！」

「あ、あのっ」

「わたくしをお忘れですか？坊ちゃん」

きらきらとした服のスパンコールが目に眩しかったが、それ以上に美しい彼女の目には大粒の涙が首元のパールのように輝いていた。アルタは突然嵐のように現れて叱ったと思えば、感動する彼女にどうしていいか分からず困っていると、彼女は涙を拭いて笑顔を見せた。

「十六年前、わたくしはオーヴァン様よりあなた様を託された乳母にございます。」

アルタは驚いて思わず抱き取っていた手を離し、彼女を改めて見つめた。今いくつであるか定かではなくなったが、どう見ても十六年前乳母をしていた女性だとは見えない。

彼女はアルタが全く覚えていないことを悟ったのか、弱弱しく笑顔を向けると立ち上がった。

「覚えていらっしゃらないのも無理はありませんね…まだ幼くあらせられたのですから。わたくしはコルネリア・ヘンリー。再びお会い出来て光栄ですわ、坊ちゃん」

アルタはその名前を聞いて暫く黙っていたが、ようやく脳内の人物図と結びつき、大声を上げた。

「ああっ！呪術の！さ、捜していたんだ！」

アルタはそろそろ、これが運命ではなく、必然で回り出した世界だと思い知った。

勢いよく手の包帯を取ったアルタは真っ黒に染まった自分の手を突き出し、口早に告げた。

「この呪いから俺を救って下さい！」

まだ彼女が自分と関係あると認めてはいなかったが、彼女が現れたことで彼の未来はまた少し動き出す。じわじわと染みこむ呪術のように、それは着実に彼の選んだ運命ををレールへと乗せて運んでゆくのだった。

四話

コルネリアは整えられた細長い眉を眉間の肉に押し込めるように寄せ、アルタの手を取った。
黒々と茨と花で覆われた彼の呪いは既に、手のひらと甲だけに留まらず、手首をも侵食して彼を蝕んでいた。コルネリアは唸るように小さく声を上げ、今度は悲しげな表情を見せた。

「…複雑な…、呪詛…。おいたわしいですわ坊ちゃん…。」

暫く手を見つめていたが、コルネリアは真剣な面持ちのまま首を振り、アルタの手を離す。
アルタが何か尋ねようと口を開いたが、色素の薄い指がすっと前を阻んだ。

「坊ちゃん。とにかく試験が始まってしまいます。わたくしはあなた様の乳母である前に、この学園の教師です。放課後、またわたくしの部屋にお出で下さいまし。わたくしの部屋はご存知？」

アルタはやや呆気に取られながらも小さく頷いた。
コルネリアはアルタが頷いたのを確認するとドレスの埃を払って踵を返した。

「もう教室には誰もいないでしょう。すぐに試験会場の教会へと急いで下さい」
「あ、待って、俺、聞きたいことがっ…！」

しかしその言葉が届いていたかどうかはともかく、コルネリアはそ

の後振り返ることなく歩いていった。アルタは突き出した右手を引っ込めると、どうしようもない気持ちの整理のため、俯いて押し黙った。

乳母。ウルリアが召喚獣だなんて馬鹿らしい話を信用しようとは思えなかったが、彼女の態度は信用するに足りるものが感じられた。父の名前だと言っていたオーヴァンという名前も一致しているし、あの驚き方が偽りだとは思えない。アルタは呪詛が書き込まれた手を見下ろし、苦い表情をしていたコルネリアを思い出した。

抱きしめられた温かさは恐らく初めて感じた。母がいたなら、幼い頃あんなぬくもりに触れられていたのだろうかと、アルタは手を握り締めた。

リエイがそんなアルタの様子をそっと伺い、やがて遠慮気味に促す。

「ご主人、そろそろ…」

「…分かってる…行こう、リエイ」

アルタはリエイの首輪を外した。もう召喚して腕を試される必要はない。堂々と教会へと入ればいいだけだ。アルタはそう言い聞かせて自分の頬を軽く叩き、しっかりと地面を踏みしめて歩き出した。父の真相を暴かなくては、どの道この契約上死んでしまう運命。アルタはウルリアの顔を脳裏で描いて、唇を噛んだ。

「待ってろ、俺が必ず真相ごと引きずり出してやる」

教会はざわついていた。各々が停学。という一文字をあらゆる感

情であるいは恐れ、あるいは待ち望んでいた。その教会の扉が再び開いた瞬間、ざわついていた教会内は一気に冷え切り、静寂が張り詰めた。

アルタは教会を見渡した。ものすごい人数が一斉にこちらを見つめ、息を飲んでいることがわかる。

震える足は一歩踏み出し、すぐ側にいた生徒は素早く彼を避けるように道を作った。

アルタはこの反応が一体何なのかすぐに理解できなかった。

ウルリア失踪事件はやはり彼の急な転校ということで片付けられ、ルーペルトはその手伝いという名目で午後から学園にいない。

もしかしたらまだ自分は疑われているのかと表情を硬くしていると、ぽんと背中を叩かれ、アルタは顔を上げた。

背中を叩いたのは、シータだった。

「アルタ」

「し、シータ。どうし…」

「みんなが君を見ている」

アルタは眼鏡の奥でじっとりとこちらを見つめるシータに悪寒を感じて凍りつく。その眼差しは吐くほど優しく、慈愛すら感じられたが彼の心情は読めない。シータはにっこりと人の良い笑みを浮かべてリエイを見下ろした。

「君と、君の召喚獣…ベルフェゴールの狗をね」

けたたましく鐘が鳴った。折り重なるように、体がしびれる程大きな鐘の音に気を取られてシータが言った言葉の意味を理解するのには時間がかかった。アルタはやがて再びざわめき始めた教会内で一人まだ静寂に包まれたままのような静かなシータの笑顔を見つめて、

言葉をつむぎ出した。

「えっ…？べる…何だって…？」

しかしシータはまるで先ほどの大人びた表情が嘘のように鞄から教科書を引きずり出すと、付箋が貼られたページをめくり、黙ってしまった。無視をされたというよりは、突然人格が戻って先ほどの会話を覚えていない様子に近かった。アルタがその反応にまごついていると、シータはアルタを見上げる。

「試験、頑張ろうね」

満面の笑みで返すシータに、アルタは胸につっかえるわだかまりを感じながら曖昧に返した。

「あ、ああ。…がんば…ろうな…」

五話

教師が数人、目元まで覆われたフードをかぶり、長いローブを引きずって歩いてきた。
その内の一人、いやに派手なローブを身にまとった女性―コルネリアが、小さな木槌を打ち鳴らして生徒の気を集めた。
コルネリアはうん、と高く咳払いをし、フリルが覗くローブをたくしあげて椅子に腰掛けた。
生徒はそれに習い、一斉に椅子に座ってゆく。アルタはコルネリアから目が離せず、少し遅れて着席した。

「十学年の皆さん、ご苦労様ですわ。わたくしは審査員のコルネリア・ヘンリー。他の審査員の方々の紹介は時間も惜しいですし省略いたしますわ。ま、生徒ならご存知よねえ」

ぺらり、とまるで新聞でもめくるような優雅な手つきでコルネリアは審査用紙をめくり、各クラスの名簿に目を通した。

「審査は召喚。召喚してみせてもいいし、待ち時間に召喚してもよくってよ。では亜クラスから順番に教師が一人に生徒が三人で審査しますわ。それでは亜クラスの生徒は整列。他のクラスは亜クラスのを手本に召喚しておくのがベストですわ」

コルネリアは審査用紙から一枚、書き込む欄がある紙を取り出し、足元の鞄から分厚い記録簿を引きずり出して席を立った。コルネリアが立ち上がったのを見て今度は教師が動き出し、教会の真ん中に引かれた線に沿って並び始めた。
コルネリアはその線の一番右端に並ぶとダイアモンドのような輝く

瞳でうっすらと笑みを浮かべた。

「では始めてくださいまし」

アルタはぶつぶつと詠唱をしながら俯く生徒達を何となく見つめながら、自分はどうしたものかと内心焦っていた。もしもこの召喚が禁術であるとバレてしまって、この大会に出出しから参加することができなかった自分の未来は、どうなるのかを考えた。

まず、父親については永劫明かされることのない迷宮入りの謎となり、それを後悔する。そして野放しにしているクロードという男が何かしでかす可能性もあった。アルタはそれだけの大勝負だということを覚悟し、拳を握る。

ふと制服のポケットに何か硬い物が入っている。指先を滑り込ませればひんやりと冷たさが伝わってくる。少し触ってみて、アルタはハッとした。

（ウルリアの…ロザリオ…！）

以前、授業で抑止反応を起こして怪我をしたとき、へし曲がってしまったロザリオは今も少し焦げ付いていて歪だった。アルタはそのロザリオを見つめ、必ずこの大会の果て、彼に出会うことを誓ってその歪なロザリオを首から提げた。

「召喚準備が整っている三人は前へ」

アルタは強く頷いて立ち上がった。

教会が異様な空気に包まれ、アルタは不安感からリエイを見下ろした。頼もしい相棒は利口そうな表情を柔らかくし、わん！と吠える。

アルタはそんなリエイから元気を貰って、また一歩、一歩と歩き出し。コルネリアが立った前で立ち止まる。

今にも感涙しそうなコルネリアに、アルタは身内という意識から穏やかな心情で告げた。

「俺にはこいつしかいない。こいつが俺の全てです、ヘンリー先生」

コルネリアは深く頷き、アルタの名前が書かれた紙の合格不合格のどちらかに赤丸を記そうと、手を挙げた。

が、その瞬間、それは一瞬にして何者かに阻止され、彼女の手からはペンが落ちていった。

「一体何が…！」

アルタが起こった状況が理解できず、足元にいたリエイがいないことだけに気がついて顔をあげた。それはほんのコマ送りのようにしか目で追えないような早業で、リエイはアルタと共に審査してもらうはずの二人の頭を軽々とジャンプで飛び越え、細長い体を猫のように柔軟に曲げて一人の少年に襲いかかろうとしていた。アルタはただその一瞬が目に焼きつき、まるで時間が止まったままのように見え、急いで声を出そうと口を開いた。

「やめろ！リエイ！！」

コルネリアの審査を阻止したのはどうやら飛躍したリエイで、リエイの矛先はじっと彼を見上げて驚いた表情も見せないシータに向けられていた。

アルタは何故突然彼がそんな行動に出たのか理解はできなかったが、とにかく制止しなくてはと力一杯叫んだ。静まり返った教会に響くアルタの声。そして爆音と目を開けていられないほど凄まじい煙がたちこめた。

アルタはまさか自分の召喚獣が誤作動で人を襲うなど思ってもいず、その場に座り込んでシータの命を絶望視した。
だが煙がやんわりと薄まってゆく中、アルタは次第に背中が冷たくなるのを感じてただシータがいた一点を見つめる。何か煙に混じって巨大な影がさしている。あれは一体何だ？理解しようとする頭が停止してしまったのはその存在がしっかり目を通して脳へと伝達されてからのことだった。

「なん…だよ…アレ…。」

教会の屋根はあの爆音がしたとき壊れたと見えた。屋根から顔を出していたのは二つの頭を持つ神獣、ドラゴン。真っ白な体には鋭利なうろこがびっしりと丁寧に並び、巨大な牙はと双眸はゆっくりと獲物を捜すようにさまよっている。そして何よりそのドラゴンの片手には腹を一突きされたリエイがぐったりともたれかかっていた。
アルタは思わず悲鳴をあげ、もたつく足でその怪物へと駆けた。

ふと風を感じてアルタは足を止めた。召喚したのは誰だ？いや、分かっている、誰かなんて。

アルタは振り返り、何の感情も映さない中性的な少年の顔を改めて見つめた。
眼鏡が先ほどの衝撃で吹き飛んだのか、片方だけレンズがはまって耳からずりおちた瓶底眼鏡。完全にその眼鏡が耳から落ちていった瞬間、旋律を覚えてアルタはシータの顔に釘付けとなった。
あの美しい顔を忘れるはずがない。アルタは震える声で呟いた。

「し…、シモン…！」

美しいクリーム色の髪が流れて、シータがアルタを見遣った。
瞳の奥は更に底知れぬ闇が潜んでいて、彼は少年らしからぬ妖艶な笑みを浮かべたのだった。

六話（前書き）

なんだか急展開！これからも応援よろしくお願いします＾＾

六話

アルタは自身の両目を疑った。
弾けとんだ眼鏡の奥に潜んでいた彼の闇は想像以上だった。
目の前にいるのは数十年前子供だった叔父の姿そっくりな少年。そして自分の召喚獣は彼が召喚したであろう召喚獣によって爪先にぶらさがっている。
とにかくアルタはリエイが心配で、ピクリともしない彼の真っ赤な姿をただ唖然として見つめ、
生徒が悲鳴をあげる中、一人だけ取り残されているように思えた。

そして、何かシータに言わなければ、そう思い振り返った瞬間、
リエイの真っ赤な体が大きく宙を舞い、アルタのすぐ側まで迫っていた。
これではリエイの大きな体が顔面を直撃し、アルタは無事ではすまない。

しかしリエイはすっかり動けず、アルタは腰を抜かして立てない。
せめても防御しようと両腕を上げた。

「何やってるのよ、ばかっ！」

甲高い声が耳に届くより早く、アルタの体はドン、と激しく突き飛ばされてアルタは倒れこんだ。
状況を把握しようと起き上がると、小さな悲鳴が耳に滑り込む。
そしてようやく自分を助けたヘティーがリエイの下敷きになっているのに気づいた。

「…なん…だよ。何で…お前が俺なんか助けるんだよ…！」

教会内は混乱していた。逃げ惑う生徒を抑えようと声を張り上げる教師達。屋根が崩壊し、キシキシと妙な音を立てる教会の床と壁。そして足元には苦渋の表情をするヘティーがうずくまっている。アルタはヘティーを抱き起こして彼女の頬についた血を拭った。

ヘティーは少しだけ口角を上げ、アルタの手を叩き落とした。

「アンタを助けたわけじゃないわよ、私はただ、あの男が気に食わないだけよ」

ヘティーは弱弱しくアルタをどつき、立ち上がる。その視線の先にはシータの姿があった。

シータは狼狽したようにおどおどと辺りを見渡すと、アルタに駆け寄った。

「アルタくんっ！」

アルタは思わず身を硬くする。元々けしかけたのはリエイだったが、あんなドラゴンが出現して、教会内はおかしな空気に変わってしまった。そして何より、不安げなその表情が貼り付けられた整った顔は、叔父のものだ。アルタは返す声が出ず、心配そうにこちらを見つめるシータに戸惑う。

「ごめんね、僕、君の犬が怖くてつい」

「い、いや…俺こそ…悪かった…から」

シータは安心したようにふっと笑んで召喚していたドラゴンを手招きした。

少し頭を下げたドラゴンは、小さく鳴いてシータに甘えるしぐさをみせる。ヘティーは二人のやりとりを特に何を言うでもなくじっと見つめていた。

「…ヘティー、救護室に行こう。怪我、しただろ」
「フン、言われなくても行くわよ愚図。触らないでよ」

ヘティーはツンとした態度をなんとか維持させようとしていたが、その実はボロボロだった。アルタはそんなヘティーの姿に胸が痛み、申し訳なさがこみ上げた。
そしてどうしてこんな事になったのか、アルタは理解できずに気絶した様子のリエイを見下ろし、しゃがみ込んだ。

「…リエイ…」
「でも二人とも無事でよかった…。ディズリーさんすみません、僕…」

シータがアルタと同じようにヘティーに声を掛け、申し訳なさそうな表情でそっと彼女の肩に触れた。

「いやあああああああああっ！」
「へ、ヘティー？！」

絶叫が響きわたった。ヘティーはシータの手を払いのけると這うように床に這い蹲り、動かなくなってしまった。アルタは突然悲鳴をあげ、不可思議な行動を取るヘティーに更に困惑し、なるべく体に触れないようにヘティーに近づいて声を掛ける。

「お、おい、大丈夫かっ？！」
「いや、こわい、こわいよお」

「ど、どうかされましたかっ！？傷が痛むのですか？」

すっかり錯乱状態になってしまったヘティーに、数人の教師が駆けつけた。

その内の一人であるコルネリアはアルタとシータをそれぞれ一瞥し、彼女を刺激しないように優しく声を掛けながら彼女を教会から出した。

残されたアルタとシータの二人の間には会話がなくなり、天井に空いた穴から少しづつ雨が漏れてきていた。

アルタは膨大になった謎と質問の束をどうやってぶつけようかと頭をフル回転させていた。

もしかしたらこの騒ぎで停学どころか退学になったらどうしようか。

そしたらシモンになんて説明したらいいのか。そこまで考え、アルタはややゆっくりと焦らすような速度で尋ねる。

「お前…」

シータはもう何の感情もない表情をしていた。アルタは震える声で静かに続けた。

「一体誰なんだ…？」

シータは答えない。真っ白な歯が弧を描いた口元から輝いて見える。

アルタは真剣に尋ねているのにも関わらず、こんなにいい笑顔を浮かべるシータに戦慄を感じる。

まるでそう、

快楽で殺人を行う恐ろしい殺人鬼のようなその、恍惚とした笑顔に。

＞ｉ１５３１７―２１３５＜

第四章　干渉

アルタは一先ず、動かないリエイを抱きかかえ、足を引きずるようにして教会を後にした。
シータはせめてもと、彼が召喚したドラゴンに運ばせようとしたが、アルタはやんわりとそれを断ってコルネリアの部屋を目指していた。
リエイは不死であるため、こんなことで死んだりはしないのだろうが、特定の大きなダメージを受けると召喚獣は帰還してしまう可能性があった。
前までならば複雑ながらも帰還に関しては何も思わなかっただろうが、今は大会がかかっている。
もしも本当にこの大会にそのクロードという男が参加するとなれば帰還されると困るのだ。

そして何より、自分が信用し、その力を認めた相棒であるリエイがここまで傷ついた姿に、アルタは心を痛めていた。

何故突然シータを襲ったのか、その事も聞いておきたかったし、アルタは一刻も早くリエイが回復するのを待つしかなかった。

「坊ちゃん！」

高い声に呼ばれ、アルタが振り返る。アルタをこう呼ぶのは一人しかいなかった。リエイの重みに耐えるアルタはうっすらと汗をかきながら弱弱しい笑みをコルネリアに向けた。

「先生…」
「お怪我は…、お怪我はございませんか！？」

すっかり先ほどまでの威厳ある表情を無くして、コルネリアはうろたえていた。
想定外の事態に頭が追いつかず、こうしてふらついているのだろう。
アルタはリエイを一度床に下ろして彼女に向き合った。

「落ち着いて下さい、えっと、俺は平気です」
「申し訳ありませんわ！わたくし達教員がついていながらこんな事態を起こすなんて…！」
「いや、元々はリエイが悪かったんです、先生は悪くありません」
「ああ、坊ちゃん。わたくしのことはコルネリアと御呼び下さいな…わたくしは胸が痛くございますわ」

コルネリアは軽くアルタの肩を抱いて、側に倒れているリエイへと視線を落とす。

「一体、何があったのです？」
「…せん…コルネリアこそその坊ちゃんはやめてくれよ。…俺にも、分からない」

コルネリアは暫くじっとリエイを見つめていたが、やがて真剣な面持ちでアルタを見つめた。

「…この試験の意味。もしやご存知なのですか？」
「…そうだよ」
「わたくしは…反対ですわ…。この大会には…、ぼっちゃ…いえ、アルタ様の恐れ多くもお命を狙う輩がいます。」
「その通りだよ、コルネリア」

アルタは深く頷く。そしてもう一度リエイを抱えなおし、辛そうな

表情をみせた。

「だからこそ俺はこの大会に参加しなくちゃならないんだ。もうリエイに聞いた。なあ、俺はもう自分の足で立っているんだ」

コルネリアは複雑そうな顔で、アルタをただ黙って見つめている。
アルタは自分の胸にそっと手を当てて目を閉じた。

「これは俺が決めて、俺が知りたいんだ、父さんや、母さんのこと、自分の目で、見つめたいんだ」

コルネリアは長いまつげを伏せて小さなため息をもらした。
そして首を軽くふり、ややあって笑顔をみせる。

「大きく、成長されましたね…。ですがわたくしにもお手伝いさせて下さいませ」

大きく踵を返してコルネリアは指先を振り、魔法でドアを開いた。
魔石が輝くドアノブがくるりと一回転し、コルネリアの肌掛けがふわりと揺れる。
アルタがその様をじっと見つめていると、ドアが開かれた向こう側は真っ暗な部屋が広がっていた。コルネリアはドアを完全に開くとアルタを導く。

「さあ、坊ちゃん。ようこそおいでくださいました」

アルタは何となく嫌な予感がしながらも、リエイを引きずりながらコルネリアの部屋へと入っていった。

二話

深い闇のような漆黒のカーテンの奥は、アルタが何となく想像していた世界とはかけ離れていた。だがしかし、その顔をしかめたくなるようなフリルと少女的趣味が押し込まれた部屋は想定内の一つと言えるだろう。それはコルネリアの姿と物腰を見ていれば分かることだった。

アルタは魔女の部屋のような物騒な物がある部屋だと想像していたのだが、

客用のソファーとテーブルが部屋の真ん中に鎮座し、それらには勿論桃色のフリルが重ねられている。部屋は桃色とフリルで統一され、簡易なキッチン、洋服ダンスだと思われる真っ白なクローゼットがいくつか並んでいる。アルタが想像したような鍋などはなかった。

アルタはおずおずとソファーに腰掛け、お茶の準備を始めたコルネリアを見遣った。側に寝かせたリエイが時々苦しそうな声を上げる度、アルタは一度視線を戻す。

シータのことも気がかりだったが、今は別に心配なことがアルタにはあった。

「その、ディズリーは？」

「ああ、彼女でしたら医務室ですわ。もう少し落ち着いたみたいですけれど…何があったか分かって？」

アルタは首を振った。

あの時、ヘティーはシータの召喚獣から自分を守り、心配したシータが触れた途端悲鳴をあげた。そういえばウルリアが失踪し、その秘密と引き換えに大会の辞退を脅したときもそうだった。彼女はシ

ータが何者であるのか知っている。アルタはコルネリアが差し出したお茶に口をつけて押し黙った。
コルネリアはアルタの前に椅子を引きずってくると、静かに腰掛け、アルタを見つめた。

「俺には…分からない…」
「そうですの…ぼっちゃ、ふふ、嫌ですわまた間違えてしまって、アルタ様が」
「あー、もういいよ、面倒だから好きに呼んでくれ」
「ごめんなさいね、それで」

ソーサーからカップを取り、カチャンと小さな音が触れ合う。
コルネリアは少し喉を湿らせてから続けた。

「こうして、ご無事でお元気そうになさっていただけで、わたくしは幸せですわ、と申し上げたくて…大会に参加なされるのは、わたくしが口をはさむのもおこがましい話ですが、わたくしは」

コルネリアの細い指先がアルタの手に重なる。
アルタは少しどぎまぎしてコルネリアを見つめて、コルネリアはリエイを一瞥し、首をもたげた。

「いつまでも…坊ちゃんにはお元気でいて欲しいと、切に願っておりますわ」

アルタはそっとコルネリアから手を離した。まるで心の中をじっと見つめられているような気持ちになっていたたまれない。アルタは大きく息を吐いて本題に移ることにした。

「それで…先にリエイは助かるのか聞いておきたい」

コルネリアは深く頷き、席を立った。
そしてキッチンに備えられていた小棚からおしゃれな瓶を取り出すとアルタに振り返る。

「これは、妖精の涙といいます。」

小瓶に納められていた少量の液体は、魔灯の光に反応して淡く光っていた。コルネリアはアルタに瓶を手渡し、リエイがシータの召喚獣にやられた傷をしげしげと眺め、リエイの体をアルタに向ける。
アルタが戸惑っていると、コルネリアは立ち上がって笑んだ。

「その小瓶は召喚獣の傷を癒す唯一の薬です。どうか傷に」

アルタは改めてリエイを見下ろし、浅く、今にも消え入りそうな息をするリエイにそっとしゃがみ込んだ。そして祈るように目をとじ、小瓶の蓋を置いた。そしてリエイの痛々しい傷に少しずつ振り掛ける。

「リエイ…！」

すると、傷口がすぐに輝きだし、傷はみるみる塞がっていった。もう向こう側が見えてしまっていた風穴もすっかり本来の体に戻り、しいて言えば傷の周りだけ赤毛が薄くなっただけだろう。アルタは安堵し、コルネリアに礼を述べた。

「ありがとう…、コルネリア」
「いいえ、わたくしは自分の仕事をしただけですわ」

優しく笑んだコルネリアに頭を下げ、アルタは自分の制服をリエイ

の体に被せた。
そしてゆっくりと視線を戻し、右手に下ろす。
じんわりとした違和感、そして包帯はいつしか黒い染みを作っていた。
アルタは包帯を解きながら、腐敗してしまったかのように変貌した自身の手に顔をしかめた。

「…これは…酷いですわね…これでは召喚獣も本来の力を出せなかったわけですわ」

コルネリアはアルタの右手を取り、入念にその呪術の招待を見破ろうと見つめている。アルタはふと、真ん中の黒い薔薇が一枚花弁を散らしているのに気がついた。それはすなわち、この呪いによってアルタが死ぬのが短くなったことを示している。

コルネリアは唸り声を上げ、アルタの手を掴んだまま、視線を落としたまま、近くの棚を漁って本を探し出した。乱暴に手でその棚をまさぐったため、ぼたりぼたりと次々色んな物が床へと落ちてゆくのもかまわず、コルネリアは解析を続けた。

ただそれを見ているだけのアルタは床に落ちた本が気になったが、コルネリアがあっ、と声を上げたので再び意識をコルネリアに寄せた。

「この名前…」
「何か…分かったのか？」
「…坊ちゃん、この呪いは二人の者によってかけられた呪いで…これは…」

右手からようやく視線を上げたコルネリアの顔は困惑を乗せていた。

アルタはじれったさを感じ、続きを尋ねた。

「な、何？」

コルネリアは少し間を置いて、恐る恐る口にした。

「この呪術は上級呪文で、この呪いには生け贄が出されていますわ」

「いけ…にえ…？」

「呪術の跳ね返りを術者以外の者が受ける為の生け贄…名前は」

「いい、聞きたくない！」

アルタは耳を塞いだが、指の隙間からは容赦なくアルタの予感通りの名前がコルネリアの声となって侵入する。

「ウルリア・ダックフォーズ…」

三話

コルネリアは突然声を荒げたアルタに動揺し、言葉を失った。大きな声を出した反動で椅子を倒して立ち上がったしまったアルタは冷静さを取り戻して椅子を戻す。そしてもう一度座りなおすとややあってからコルネリアに詫びた。

「…ごめん、いきなり大きな声出して…」
「お知り合いの方でしたの？」
「…ここで知り合った…友人だったんだ」

コルネリアは口をおさえて黙った。
アルタは改めて自分の右手を見つめる。ウルリアは今、一体何を思って自分を呪い、そしてその代償を受けているのか。彼と過ごした友人としての生活を振り返り、彼を信じたいと思えば思うほど、アルタは自分の惨めさを感じた。

椅子が倒れた衝撃で、テーブルまで振動したのか、カップが揺らいで落とした紅茶の雫が落ちていた。アルタはそれを指先で拭い、カップに視線を落とす。
情けない顔をした己の顔が、蜜色の紅茶にたゆたい、歪んでいる。
アルタはこれは自分の心情を映したようだとそっと自嘲気味に笑んだ。

「では、続けますわ…、坊ちゃん」

アルタは頷き、右手を差し出す。
彼女の冷たい指先が甲を撫でてゆくのをもどかしげに見つめていたアルタは、ふと足元から声がして視線を急いで落とした。

「…ご主人」
「り、リエイ！無事か！？」

リエイは頭を懸命にあげようと何度か挑戦したが、体が気だるいのか結局は伏せたまま言葉を続けた。
本当ならしゃがみたかったが、右手が拘束されていてうまく顔を下げれないのでアルタもそのまま聞いた。

「ご主人、気をつけて今…」
「…えっ？何だよ、よく聞こえな…」

アルタは少し身を乗り出し、かすれたリエイの声に耳を澄ませた。
コルネリアはそんなアルタに嫌な顔一つせず場所を移動すると彼が屈みやすいようにした。

「…が、来て…」
「えっ？」

アルタがもう一度聞き返そうと耳を寄せた瞬間、何かに感づいたのかリエイはバッ、と跳ね起きると体制を低くしてアルタの前に構えた。その視線は唯一の出入り口を注視している。突然唸り声をあげ、震える足で懸命に自分を守ろうとするリエイに、アルタは首を傾げる。

「お、おいっ、何だよ？！」
「只事ではありませんわね…、少し様子を見てきますわ」
「あ、こるねり…、」

アルタは危ないから一緒に、と声を掛け終わる前に、目の前を歩い

ていったはずの彼女が後ろへと吹き飛んでゆくのが視界に映り、息を飲んだ。
鋭い音と、彼女が叩きつけられた激しい音が入り混じり、室内は僅かな静寂が張り詰め、その中のリエイの唸り声は異質にすら感じられた。
アルタは急いでコルネリアに駆け寄り、出入り口を見つめる。
一体何が?苦しげな声を上げるコルネリアを抱きしめ、アルタは手元にあった暖炉の火掻き棒を手にとった。

やがて壁を粉砕してできた破片が室内に粉と共に流れ込み、二人の男女が姿を現した。
アルタは火掻き棒を振り下ろし、震える声で尋ねる。

「だ、誰だ…お前ら」

アルタはちらりとリエイを一瞥する。コルネリアが吹っ飛んだ場所まで走ることができないのか、先ほどアルタが座っていた場所でただ威嚇をするリエイの満身創痍な姿。アルタはリエイ、コルネリア共に自分が守らなくてはと、二人を見据えて立ち上がった。

二人の男女はそれぞれ真っ白な服を着ており、ピシっとした制服を身に纏った男は愛想のいい笑みを浮かべ、背後の女は深いフードで顔が分からなかった。
男はアルタに歩み寄ると静かに礼をした。

「お初にお目にかかります、我々はウーラノス教団の使節団です」
「うーらのす…?なんで教団が…」
「申し訳ありません。危害を加えるつもりは毛頭無かったのですが、彼女は少々手加減を知りませんで…エミリー」

男の背後で隠れるようにしていた女は頷き、コルネリアに駆け寄る。
アルタが警戒すると男は軽い感じで笑んでそれを止めた。

「ご安心を、回復魔法をかけさせて頂きたい」

アルタは暫くエミリーと呼ばれた女の動向を監視していたが、彼女が普通に回復魔法を行使したのを見て視線を男へと戻した。
男は視線を感じて話を続ける。

「私の名前はウィリアム・ボネット。あなた様に永久従属する為、教会から派遣されました。以後よろしくお願いいたします」
「…はっ…!?おい、何だよ、それ…?」
「そして、教団の命令により、あなた様をお迎えにあがった次第です。」
「ちょ、ちょっと待て!俺が何をしたっていうんだ?!」

ウィリアムは意外そうな顔をして、頷くと、流れる美しい銀の髪をたなびかせてアルタの側に跪く。
アルタは突然のことに動揺し、彼に合わせてしゃがみ込んだ。

「お、おいっ」
「顔を上げてくださいませ、あなた様と私は身分が違う」
「さっきから何言ってんだよ!俺がなんだってんだよ!」

ウィリアムはテノールの甘い声で静かに、囁くような声で告げた。

「あなた様はこの人間界の統括するグラウンドキングダムの王位継承第一位」

そしてうっとりするような端整な顔を優しく笑顔で包んで再び頭を

下げた。

「皇太子殿下であらせられます」

アルタは思わず後ずさり、コルネリアがぶつかった壁に背中を打ちつけた。右手がひどく膿んだように痛んだ。

四話

やがて、回復したコルネリアは、折れた肋骨の部分に手を当て、目を覚ました。
だが現状は読めなかった。
アルタはすっかり混乱したような、苦しげな表情で立ち尽くし、見知らぬ男がそれに傅き、
また見知らぬ女がこちらを不安げに見つめている。
コルネリアは身をよじり、アルタにそっと声を掛けた。

「あのっ、坊ちゃん…？」

アルタは大げさなほど肩を震わせ、跳ねるようにコルネリアに振り返った。そして、無事そうな彼女の姿に安堵したのか、大きく息を吐いてその場にへたり込んだ。

「おい、お前…もういいから顔上げろ」

ウィリアムは素直に頷くと立ち上がり、アルタを起こそうと手を差し伸べた。
だがアルタはその手を一瞥して立ち上がると、すぐにコルネリアの側に駆けつけた。

「無事か、コルネリア」
「ええ…はい、骨が数本折れてしまったみたいですわ…でも、この方のお蔭で痛みは…あの、一体何があったんですの？」
「失礼、ご婦人」

ウィリアムは答えないアルタの代わりにすっとコルネリアの前にや

ってくると、エミリーを下がらせお辞儀をした。それは挨拶というよりは深く、非礼に対する謝罪に近かった。

「我々はウーラノス教団の者です、…あなたは、アルタ様の乳母でいらっしゃいますね」

「…！もしかしてあーた、グラウンドキングダムの…！」

ウィリアムは頷き、アルタに目配せする。

不機嫌そうなアルタはふいっ、と視線を逸らし耳だけ寄せていた。

「なんてこと…すぐお帰りになって。ここはグラウンドキングダムの傘下内ではない学園ですのよ」

「承知しております、しかしながら我々も火急の用です、ご承知を」

コルネリアが不審げにウィリアムを見上げた。ウィリアムは胸元から一通の破かれた手紙を開き、高々とその内容を朗読始めた。

「グラウンドキングダム総支配人であらせられる我が君はこの度、病にてご崩御召しました。」

アルタはその言葉に驚き、握っていたコルネリアの手を離して立ち上がった。コルネリアも驚いた様子で視線をさ迷わせると、唾を飲んで続きを待った。

「そして、我が君の遺言により、我ら三教団は新たなる王を迎え入れる準備と、今回強いられた大会の阻止を宣言し、この手紙を読み渡されるであろう後継者皆様方にはそれぞれ教団から派遣したバトラーを設け、この度の事、ご検討なさいますよう、よろしくおねがい致します」

「ふざけっ…！」

「坊ちゃん…！最後までお聞きになって」

淡々と手紙の内容を話すウィリアムに掴みかかろうとしたアルタを、コルネリアが止める。

「尚、」

ウィリアムは一度間を置き、アルタを見据える。両手をコルネリアに掴まれていたアルタは顔をしかめたが、ウィリアムは気にせず続ける。

「今回大会に参加なさいます後継者皆様には、教団はいかなる手段を持っても、この大会の優勝者を排除する構えですので、それなりのご覚悟を持ってお戦いになられますよう、申し上げます。三教団統括。」

手紙が終わったのか、ウィリアムは手紙をたたみ、そっと胸へと戻してアルタを見つめた。

アルタはウィリアムの話した三つの教団、そしてこの人間界を治めているグラウンドキングダムの要望で取り決められた事と、大会の矛盾に眉を寄せた。

聞きたいことが山ほどあったが、アルタはとにかく落ち着くため倒れた椅子に腰掛け、俯いて暫く押し黙った。

まるでアルタの言葉を待つかのような沈黙が広がり、やがてアルタは搾り出した声で一言尋ねる。

「…まず、俺が皇子だというのは本当で…父さんは昔、人間界を治めていたのか？」

「はい、事実でございます。そこにいらっしゃる乳母も、証言できるかと」

ウィリアムがコルネリアに視線を遣り、コルネリアはいたたまれなさから目を逸らす。

彼女はアルタを預けられた時、オーヴァンに緘口令をされていたのだろう、動揺した様子こそ証言たるものだったが、彼女は肯定も否定もしなかった。

アルタはため息をつき、続いて尋ねた。

「一つ、おかしくないか？リエイがこの大会は三会場で行われていて、ウーラノス教団の教会を使うって聞いた。天界の連中に協力していたんじゃないのか」

「はい、仰る通りでございます。我々は今後、運営に携わるでしょう」

「だったら…！」

「…この大会、最後は神が魔法と召喚を無くしてしまうことはご存知ですか？」

アルタはようやく意図が読め、押し黙った。

つまり教団の存続を脅かすこの大会に、最初は調子よく合わせ、最後の優勝者が決定した時点でこの大会と、そのシステムごとうやむやにしてしまおうというものだった。アルタはやがて寒気すら感じて、震える唇で言葉を紡ぐ。

「も、もしかして…今までの大会もそうやって」

「…この世界の秩序には、仕方の無いことでした」

「嘘だろ…！そんなのっ！」

ウィリアムはしっかりとした目線でアルタを見つめた。それは彼の

強いプライド、この仕事への誇りを感じさせ、アルタは少し気圧され言葉がでなかった。彼はしたくてしていることではないと言い張っている。だがもしも自分の父がこの大会の優勝者で彼らに殺されてしまったと言われたなら、どんな気持ちになるだろうと考え、唇をかみ締めた。

「俺には…到底そんなこと理解できるか…俺は十六年間、召喚とも魔法とも縁がなかった、だけど俺はこうして生きている、何故か分かるか？」

ウィリアムは首を振る。背後にいたエミリーが震えたようにウィリアムの背中に隠れた。
アルタは怒りで握り締めた拳が痛むのも気にせず、静かな声で答えた。

「人が十六年生きるのに、必要なかったからだ。帰って伝えろ、俺は大会を辞退なんかしないし、王位も継がないと」
「…かしこまりました」

ウィリアムはエミリーに軽く指示を出し、エミリーはアルタにお辞儀をし、部屋を出て行った。どうやら彼女がアルタの言葉を伝達するらしい。ウィリアムは本当にアルタに従属するのか、大人しく次の指示を待っていた。

そして、コルネリアは体中が彼に対する畏怖で高まってゆくのを感じた。この人間なら必ず素晴らしい世の中を創り、自分はそれに従わなければならないという使命感。溢れるような彼の輝きがそうコルネリアを動かしていた。王位を継がないまでも彼に一生従いたくなるような神々しさと威厳。

そして知らずと彼女はウィリアムにならって頭を垂れるのだった。

第五章　彼の本質（前書き）

この章は作中、グロテスクな表現を含む可能性があります。ご注意ください

第五章　彼の本質

アルタはコルネリアの傷を労わり、そっと体を抱えて彼女を持ち上げた。
今回の事を保健医になんと説明するべきかと考えを巡らせていたアルタは、ふと足元に鼻先をこすりつけ、弱弱しく鳴いたリエイを見下ろした。
きっと主人を守りきれなかった己の不甲斐なさを悔いているのだろう、彼はアルタと目を合わせようとしない。だがアルタは深く頷き、何か事情があってのことなのだろうと汲み取った。

「いい、リエイ。お前はここにいろ。コルネリアを預けたら迎えに来る」

リエイは戸惑った様子を見せたが、口調がしっかりと命令を下していた為、大人しく座り込んだ。
ウィリアムはコルネリアの反対側の体を支えようとしたが、アルタがそれを拒んだ為、
静かに彼の後ろについた。

「…お前も帰れよ。俺はもう後継者じゃねえんだし」
「申し上げたように、私はこれからもあなた様に遣えるよう、先代国王のお遺言ですので」
「…はあ、勝手にしろ」

アルタは呆れたように一言残すと、医務室に向かって歩き始めた。
体は思うように動かない。学園内は今回の実施試験の失敗によって混乱が起こったが、

今はすっかり生徒の姿はなく、下校したのだろう。教室内に明かりはなく、薄暗い。
せめても先ほどのやりとりが見つからなくてよかったというものだった。

医務室にはほんの少し、ここが医務室であると分かるぐらいの小さな明かりが灯っていた。
アルタはポケットから簡易証明の魔石を取り出し、中の様子を伺う。

「先生はいらっしゃいませんか？」
「うーん、いないな…職員室かな…お、でも戸は開くな…」
「では私が呼んで来ましょう」

ウィリアムは率先し、職員室に走り去った。彼は部外者である為、アルタはやや不安だったが、
彼なら何となく上手くごまかせそうな気もして止めなかった。
アルタはベッドまで彼女を導くと、心配そうに表情を覗き込んだ。

「すまない、コルネリア」
「いいえ、わたくしが悪かったのですわ…迂闊でした。わたくしも教師でありますのに…お恥ずかしいですわ…」
「…ありがとう、そう言ってもらえるとちょっと気が楽だ」

アルタは否定しても彼女は更に自分を責めるだろうと分かっていて、優しい笑みで礼を述べた。
コルネリアは医務室の暗い中、彼が持った小さな魔石だけが仄かな明かりを灯している様を美しいと感じる。コルネリアは少し考えてこの言葉を贈った。

「わたくし、お久しぶりにアルタ様を見た時、正直不安でしたの」

「えっ？」
「何があったかは存知あげませんでしたが、不安そうで、悲しそうで…とても…儚く感じましたわ」
「ああ…あの芝生で会った時か」
「ですが、わたくし、先ほどのアルタ様のお姿を見て、確信致しましたわ」

コルネリアはアルタの右手を取った。包帯が巻かれていないその右手はつい目を逸らしたくなるほど痛々しい。そんな右手を優しく包み、コルネリアは笑んだ。

「あなた様に、一生、このわたくしの力でよろしければ添えさせて頂く所存。どうか、どうか坊ちゃん…、お強く生きて下さいませ…！」

最後の方は掠れて聞こえないほど彼女の声は震えていた。
大きな両目からは涙が溢れていたし、アルタは少なからず動揺する。
そして握られた手を握り返して、アルタは静かに返した。

「俺は沢山の人に生かされているんだな…分かったよ、コルネリア。俺、諦めない」

ひらり、とその言葉に無情な花びらが一枚散った。
アルタはキッと澄んだ瞳でその散り行く様を見つめ、顔を上げた。
その顔に張られた凛々しい表情は彼の覚悟を映したかのように…。

二話

ほどなくして、ウィリアムが保健医を連れ帰った為、アルタはコルネリアを預け、ウィリアムと共にコルネリアの部屋へと帰った。廊下を歩く二人の間に会話はなく、彼が気さくに話掛けてくることもない。アルタは多少の気まずさを感じながらも、階段をもくもくと降りてゆく。ふと、コルネリアの私室手前に差し掛かった時、ようやくウィリアムがアルタに声を掛けた。

「アルタ様」
「ん、何だよ？」
「コルネリアさんの私室、少々荒く破損させてしまった箇所を直す為、お時間を頂きたい」
「構わないけど…直すって…お前が？どんぐらいかかんだよ」
「ほんの数分で仕上げましょう」

ウィリアムは胸ポケットからこちらも真っ白な手袋を取り出し、キュっ、と手首の部分を引き締め皺を伸ばす。アルタが不審がって見つめていると、ウィリアムはさっと手をかざして空中にぼんやりと魔法陣を描き出した。アルタが次に瞬きをした途端、物凄い数のピクシーが魔法陣から噴出し、まるで餌を求めて飛び交う虫の様に飛び回ったピクシー達は、エミリーが粉砕したドアを丁寧に拾いながら修復する。
目にも止まらぬその速さに圧倒されていたアルタは、ウィリアムを感心したように見上げた。

「さっすがウーラノスの精鋭…すげえな…」
「…勿体無いお言葉」

そうこうしている内に修繕が完了したのか、ピクシーは金の粒子になって散り散りに消えていった。アルタはすっかり来たばかりとなんら変わらない様子に戻った部屋に驚きながら、一番驚いたであろうリエイを見つけ、表情を緩ませた。

「ご主人、一体何が…？」

「おお、こいつがすげえんだよ、召喚であっという間に…」

アルタは笑顔で先ほどみた光景をリエイに説明しようとして、ハッと口をつぐんだ。

そうだ、こんな奴褒めてやる必要はない、自分はまだ怒っていたんだと思い出したように、アルタはその後もごもごと別に何でもないとごまかした。

「そろそろ…帰宅しなければシモン様が心配していますよ、ご主人」

「あ、ああ…そうだな…うん、帰ろう。聞きたいこともあるし…歩けるか？」

リエイが頷き、アルタはウィリアムに振り返った。

「俺達はシモンの家に帰るよ。お前はどうするんだ？」

ウィリアムは答えない。暗に、すぐ側に仕えていたいと目で訴えられていたが、彼にも彼のプライベートがある。アルタは暫く逡巡し、嫌そうに尋ねた。

「もしかして俺ん家に来るのか？」

「もしよろしければ…」

「…はあ…リエイの次は何だか知らない男か…シモンが良いって言

うかどうか…」

アルタは家でもしウィリアムを連れて行った場合の環境を考えた。きっと彼ならば快く歓迎し、翌日に浮かれた歓迎会なんてものまで開きそうな勢いだった。アルタは考え止め、踵を返してコルネリアの部屋を出た。

「とにかく帰ろう、本当にシモンが心配するからな…お前の事はとにかく後だ」

ウィリアムが深く頷き、アルタは不満げに鼻を鳴らして歩き出した。真っ白な教団の若い男を連れ、首輪のないリエイを連れるアルタは奇妙な集団だった。せめてリエイに首輪をとも考えたが、彼の体を気遣ってはやはり拘束具をつける気にはなれない。

なるべく人が少ない道をすり抜けながら、アルタはやっとの思いで家へとたどり着くのだった。

「おかえり、アルタ！」

アルタは先ほどの想像通りに浮かれた姿で出迎えた我が叔父をうんざりとして見つめる。

頭にはパーティー用の三角帽子、派手なエプロンには沢山のシミが広がっている。そしてその片手にはクラッカーが握られ、出迎えら

れたと同時に軽快な音とリボンがアルタの視界を占領した。
頭に巻きついたリボンの束を黙って取り、アルタはシモンを見上げた。

「遅いから心配したよ、何かあったのかい？」
「…それはこっちの台詞だ…なんでこんなに浮かれてるんだお前」
「えっ？ああ、この前アルタ、誕生日だったろう？そのお祝い。ごめんね、遅くなって」

アルタは目を丸くした。
そうだった、あの日、リエイがやってきた日は最悪な誕生日を過ごして終わったんだ。
アルタは自身誕生日だったことすら忘れていたが、彼はしっかり覚えていたのだ。

「原稿が上がらなくて遅くなったけど、十六歳おめでとう、アルタ」
「あ、ありがとう…」
「おや、そっちの君は…？」

ウィリアムはシモンと視線が交じり合い、深々と腰を落として跪いた。
そのしぐさと彼の服装で何者であるのか悟ったのか、シモンは一瞬硬い表情をしてみせたが、すぐに笑んで彼の腕を引いた。

「役人か、まあいいさ。お祝い事には沢山の人が居た方が楽しい！」
「いえ、私は任務中ですので…」
「いいの、いいの、さあ、上がって」

ウィリアムは何か言いたげにアルタを一瞥したが、いい気味だとい

わんばかりにアルタはニヤニヤとして助け舟を出さなかった。それに機嫌が良かった。シモンがお祝いする、それだけでアルタは全てが許されて楽しい気分になれるようだった。

三話

シモンは二人を引き連れ、凝った飾りがされた部屋に案内した。
仕事が今はないため退屈だったのか、一つ一つ手作業で作られた飾りを見上げながら、アルタは自然に笑みがこぼれた。
昨年は彼が賞を受賞し、誕生日どころではなかった為、尚更嬉しくアルタは感じた。
ウィリアムは部屋を一度ぐるりと見渡し、アルタが声を掛けてようやく椅子に着席した。
それは緊張している、というよりはある程度の距離を自分から作っているようだった。アルタはウィリアムの態度が気に入らなかったが、機嫌がよかった為、相手にしなかった。

「そうだ、ケーキも作ったんだ、良かったら食べてくれないか」
「おいおい、張り切りすぎだろ?どうしたんだよ?」
「去年はお祝いできなかったからね、去年分も合わせておめでとうだ」

今日は何でもない日。今年の誕生日もとっくに過ぎている。しかしアルタはそんなことはどうでもよかった。家族と暮らしたことのないアルタは幼い頃からこんな幸せに憧れていた。

しかしそんな幸せの最中、アルタはシモンの嬉しそうな笑顔を見つめていると、胸のつっかえを思い出してならなかった。
あの時一瞬目に焼きついたのは確かにこの顔だった。幼い頃は知らないが、大人である彼の面影がしっかりあり、見間違うはずがない。
アルタは浮かれていた気分を自制し、静かな声をできるだけ作ってシモンに尋ねる。

「シモン、一つ聞いていいか？」
「んん？どうかした？」
「お前…確かに今日、ここにいたよな？」

シモンは少しきょとん、としてアルタを見つめ、やがて緩く笑う。

「そうだけど…？この準備をしていたんだ。あとは買い物…」
「学園は…、学園には来たのか…？！」

シモンは抜こうとしていたジュース瓶のコルクから手を離し、改めてアルタを見つめる。
彼はどこか、怯えた表情をしていた。

「…何か…あったの？」

シモンはウィリアムに一瞥し、微動だにしない彼を見据えた。
そしてややあってからアルタが答えた。

「…知らないなら…いいんだ、ごめん」
「…そう、ならいいよ。そんな顔をしないで、ね」

ウィリアムはアルタを見つめた。彼は自分が何をしたのか、何を話したのかを全て叔父であるシモンの報告するのではと踏んでいた。
そして、それを待っていた。
シモンは後継者の一人として必ず教団の使者が訪れているはずなので、このことを理解しているはずだった。ただアルタと違うのは従者がつかないこと。
彼は先々代の王が妾の間に作った子供で、世間的には王位継承権は

ない。
しかし先代の王の遺言には王族の血を引いた人間を招集させる目的があったため全ての関係者には使者が向かっている。
そしてその中でも継承順位が高い者にはバトラーが配属されたのだ。
そう、王位継承者を監視させる為に…。

シモンはコルクを抜き、数年使っていなかったくすんだワイングラスに注いだ。
アルタは先ほどまでの気分を取り戻そうかと、無理に鼻歌を歌ってみせていた。

「そうだ、アルタ。見せたいものがある」

シモンはふと思い出したようにアルタの肩を軽く叩き、
自身の執筆に使用していた机へと向かう。そこには彼の部屋同様の魔法陣が刻まれ、シモンは笑顔でその上の埃を払ってアルタに振り返る。

「この前は抑止反応があったみたいだけど、触ってごらん。今度はうまくやれるだろうから」

アルタはそっと目をとじた。
記憶を保存した魔法陣（レコード）に指先で恐る恐る触れると、脳がじんわりとした優しい温かさに包まれる。アルタが再び目を開くと、視界はまばゆい光に覆われていった。

四話

アルタは次に目を覚ました時、仄暗く、ぼんやりした部屋に佇んでいることに気がついて辺りを見渡す。見たこともない豪奢な廊下で、甲冑が侵入者を警戒するように綺麗な線を描いて一列に並んでいる。そして、すぐ側に、両手を祈るように組んで俯いた男が座っていた。

アルタはこれが魔法陣（レコード）の中のことだと理解し、男を見つめる。

男は顔は見えないが、柔らかそうな栗毛の跳ねた髪に、裾の長い上等な服を身に纏って石像のようにぴくりともしない。これを記録しているのはシモンなのか、目線が少し高く、声が柔らかい。

『そんなに心配するな、無事男子が生まれてくれるさ』

『す、すまないシモン…、初めての子だから慣れないんだ』

男―オーヴァンが顔を上げた。優しげな笑みをたたえ、シモンとは似ていなかったが鏡の向こうの自分のように彼はやや幼くすらっとした顔立ちをしていた。

やがて乳母であるコルネリアが焦ったように向かいの部屋から駆けつける。彼女も十六年前だとは思えないほど変わらない。しいて言えば使用人の服装で地味さを感じるぐらいだ。

『陛下！お生まれになりましたわ！』

『ほ、本当に…！？』

オーヴァンは嬉々として立ち上がる。コルネリアは最上の笑顔を見せた。

『元気な男の子ですよ！』

シモンとオーヴァンは顔を見合わせた。オーヴァンは待ちきれない様子で走り出し、シモンもすぐその後を追う。やがて遠くからわーんわーん、と子供の泣き声が聞こえた。耳に心地よい、命の声が…。

『シュキア…！』

ベッドは、数名の助産婦と看護婦が待機していた。オーヴァンの姿を見て深く頭を下げ、彼女達が去ると、子供を抱いた女性がやや視界に映る。急いでその女性に駆けつけたオーヴァンの背中でしばらくその姿は見えなかったが、オーヴァンは至福そうに振り返ってわが子を弟であるシモンに見せた。

『どうだ…なんて凛々しい顔だろうか…この子がこの人間界を背負う礎となるのだ…』

愛おしげにオーヴァンが優しく生まれたばかりのアルタの額を撫で、シモンに笑顔を向ける。
そして彼の妻は静かな声で発言する。
まるで水に水滴が落ちるかのような清らかな声が響く。

『これで約束を、…果たせたわ…』

アルタは一瞬、その女性と目が合った気がした。

―来て―

―ここに、―

そして辺りは再び真っ白な光に包まれていった。

五話

アルタはハッと夢から覚めたように現実に引き戻されて、魔法陣（レコード）に収録されていた過去が終わったことを感じた。彼は数時間の過去の記録という旅をしたが、現実世界はほんの数秒間しか刻んでいない。少し時間の差というのを感じながらこちらを見つめるシモンに緩く笑ってみせた。

「あれが俺の…両親…」

「そう。二人とも君をとても愛していたんだ」

アルタは俯いた。この魔法陣（レコード）の全てが事実で、彼らが本当に自分の両親ならば自分がいかに望まれて生まれてきたかを知った。子供のときの記憶なんて新しい記憶に追いやられてすぐ消えてしまったが、誰よりもアルタはあのときの事を記憶の中に留めておきたいと願った。

最後にあの水滴が落ちるような凛とした声が耳によぎったのは気がかりだったが、

アルタはきゅっとはにかんで魔法陣（レコード）を撫でた。

両親だけじゃない。シモンからも惜しみない愛情を感じたのだ。

「あ、ありがとう…シモン。俺、やっぱり父さんのこと…母さんのこと…知りたい…」

「…そうだ、アルタ。君にプレゼントがあったんだ」

シモンは部屋の隅でじっと仕事の機会を伺っているウィリアムを見てやや肩をすくめると、彼の側に置いてあるチェストから細長い箱

を取り出した。包装はアルタの好きな藍色で包まれた紙に水色のリボンが施され、シモンはそれを取り出すとアルタに手渡した。
アルタは少し戸惑いながらシモンを見上げる。

「…開けていいのか？」

シモンは笑顔で頷いた。
アルタは紙を破ってしまわないように慎重に包装を解き、中から現れた上質な木箱に息を飲んだ。
止め具が金で加工され、鍵までついている。一体何が？そう思いながら開くと中から現れたのは一本の万年筆だった。

「魔法には陣が必要だ。勿論、召喚にも。アルタは学生だし、きっと必要だと思って」
「すげえ…嬉しいよ、ありがとう！」

アルタは万年筆を魔灯にかざしてみた。じんわりと広がる小さな宇宙のように、深い藍色と黒色が交じり合った万年筆の蓋は魔灯の輝きを受けて中に閉じ込められた砂金をきらきらと瞬かせる。
その美しさに見とれていると、ふと玄関からチャイムを鳴らす音が響いた。

「あ、きっと頼んでおいたピザだよ。ちょっと待ってて」

シモンは喜んだ様子のアルタの肩に触れ、小走りで玄関先へと向かった。
幸せな気持ちが胸を満たしている。背後に控えていたウィリアムが、良かったですね、と軽く声を掛けてきたことすら心地よかった。アルタはそれに笑顔で答え、再び箱に仕舞おうとした瞬間、右手に激

しい痛みが走る。
痛みに思わず手から万年筆を落としかけたアルタは急激に痛み出した右手を押さえた。
「…なん…だよ…！」
包帯からじわっ、とインクが染み出たように呪詛があふれ出た。
アルタがその様に目を張って痛みを堪えていると、激しいリエイの声が耳を貫いた。
「…リエイ…？」
それと同時に鈍く何かが倒れる音が耳に届く。
アルタは玄関へ向かったシモンが心配になり、駆けつけた。
「シモン！」
床に倒れこんだシモンがまず目に付いた。アルタは急いでシモンに駆け寄り、無事かどうか確かめようと彼を揺さ振った瞬間、呪詛の黒を彷彿させる赤黒い鮮血が床の板目に沿ってどろりと流れてゆくのにアルタは小さな悲鳴を上げて彼から手を離した。
嘘だ、こんなの信じない！
アルタはゆっくりと視線を上げた。
玄関先にいた少年はあまりに異質な赤で彩られ、その表情は恍惚としている。
すっかり思考を停止してしまったアルタを見下ろして少年は無邪気

に手を振った。

「やあ、アルタこんばんわ…。どうかした？顔が真っ青」

「お、お前……！」

ぐん、と自分の頭の上を真っ赤な犬が飛んでいったのをアルタは滲んだ視界で捉えた。

抱えたシモンはだんだん温かさを失い、冷たい指先で必死にアルタの手を掴んでいた。

「アルタ…、逃げ…」

「しゃべるな！黙れ！俺が助けてやるから死ぬなよっ…ううっ、」

リエイは咆哮を上げ、少年に牙をつきたてる。だが全く動じない少年は人差し指と親指でピンっと虫でも弾くようにリエイを吹き飛ばし、既に怪我を負っていたリエイは再び立ち上がろうとしたがその場に崩れてしまって動かない。正に絶体絶命だった。

少年は倒れて動かなくなったシモンを見つめて、己のクリーム色の毛を弄んで笑んだ。

「いいね、この体。今までで一番使い易いや。ねえアルタ。もし君の姿を借りたなら、僕はどんな力を得るんだろうね」

「どうして…こんなことを…シータ…！」

少年、シータは幼少期の美しいシモンの顔を歪めて高らかに笑った。何がおかしいのか、どうして笑うのか、背筋が凍るような無邪気で邪悪なその笑い声がアルタの脳に反響した。

「僕はこの姿のこいつを忘れない為にこいつ自身になりきったんだ。

厚いめがねをぶら下げていい面隠して僕を陥れたこいつと、お前の両親に復讐する為にここにいる…。」

シータはシモンを抱えたアルタごとシモンを蹴り飛ばした。アルタは両腕を強く蹴られて悶絶し、シモンを離してしまった。

「計算外だったよ、まさかお前の犬が勘付くなんて…あの時殺してやりたかったけど少し力が弱ってたぐらいじゃさすがにベルフェゴールの犬を殺すことはできないか」

「お前…一体何者なんだ…？」

アルタは震えた声で尋ねた。左手が骨折したのか脳が出した指示どおりに動こうとしない。それでもアルタはシモンを守るように抱き寄せて怯えた目でシータを見上げた。

シータは眼鏡を捨て、両側に跳ねたくせっ毛をこねくりまわしてさらりと流した。

シモンの瞳とは違って真っ赤なシータの大きな両目は獰猛さを感じる。

「僕の名前はシータ・エーベルリンじゃない」

すぐ近くて雷が轟いた。その轟音と光にまみれて暗雲がさらに暗雲を呼んで、今にも冥府の扉が開いてしまいそうな邪悪な気が漂い、シータは唇に指先を持って行き、そっと屈んでアルタを見据えた。

「僕の本当の名前は…、クロード…・バスキンズ…」

アルタは一瞬、息を止めた。

鼻先とも言えるほど近くにある幼い叔父の顔は既に別人のものだった。

「さあ、アルタ…！僕を讃えろ！僕の名を呼べ！僕こそがこのグラウンドキングダムのいやこの世界を統べる神だ…！」

六話

シータもといクロードはその言葉と共に突然俯いたかと思うと、背後へと振り返った。
すぐ目の前にいたアルタはただ呆然とクロードを見つめていたが、そのクロードの腹部からじんわりとサーベルの切っ先が現れ、そこから滴る血はシモンのものと混ざりながら床に伝っていく。
クロードは先ほどまでの子供のような声からは想像も出来ないような地を這うような低音で叫んだ。

「チイッ！この…国家の犬が…この僕に楯突こうとは…」

クロードは腕でサーベルを叩き折ると、飛び退いてアルタを見つめた。
アルタはクロードに刃を立てたであろうウィリアムに抱えられてクロードに飛び掛ろうとするのを止められた。

「やめろ！離せ！殺してやる、父さんとシモンを…よくもっ！」
「くくっ、助かったね、アルタ。僕は退くまずそのこざかしい番犬二匹を殺したら…また会ってやるよ」
「待てよ！クソッ、離せ！命令だ！離せ！」

クロードは右手をかざして召喚獣であるドラゴンを呼び寄せた。強い風に目を伏せた瞬間、クロードは飛び去り、雷鳴が響いてクロードが飛び去った。アルタはようやくウィリアムに開放されて手を伸ばすが、その手はスッと虚空を裂いた。
アルタは座り込んで小さな声でウィリアムに告げた。

「…すまなかった…お前がいなかったらシモンも俺も…死んでた…止めてくれて…ありがとう」
「いえ、それよりシモン様が今は一刻を争います。エミリーを呼んでいる時間もないので止血し、私が縫いましょう」
「えっ…？」
「アルタ様は恐縮ではございますが熱湯と道具のご用意をお願いできますか？」
「わ、わかった！」

アルタは急いでリエイを抱え上げ、自室へと向かう。
リエイの様子も気になったが、今は死なない彼よりも命の限りがあるシモンが最優先だった。
アルタはそっと自分のベッドにリエイを寝かせるとその額を撫でて唇を噛んだ。

「…ありがとうな…リエイ…」

そして包帯とはさみを持ってキッチンへと戻る。浮かれた誕生日が一気に引き締まる。
自分が生まれたことを祝う前に、アルタは自分の弱さを改めて実感して強くなることを知るべきだと実感する。
ウィリアムはもらったばかりの万年筆を見下ろし、黙ったままのアルタに声を掛ける。

「…アルタ様…」
「分かってる…今行く。」

アルタはぎゅっと万年筆を握り締め、顔の前でまるで十字架のように掲げてウィリアムに振り返り、包帯と救護に使えそうな道具一式を手渡した。

「シモンを頼む…」

ウィリアムは深く頷き、お湯が入ったやかんと道具を持ってシモンの部屋へを急いだ。

誰もいなくなった部屋で、アルタは万年筆の蓋を取り、その美しい黄金のペン先を手の甲にぐっと押し込んで魔法陣を描く。中心に散り始めていた薔薇はそれを取り囲むかのように蠢いたが、アルタは薔薇が動く度にペン先を押し込んで血で魔法陣を描き込む。オリジナルの魔法陣。なんとなく覚えた古代文字でアルタは一言付け足した。

『何があってもくじけぬ心』

描き込んだ瞬間、アルタは強く叫んだ。

「リエイ！」

そして魔法陣は輝きだす。アルタの強い意志に答えるように、絡められた呪いからもがくように…。

第六章　新天地

描いた魔法陣から放たれた光は、誕生日会をしていた部屋を丸々包み込んでその眩しさからアルタは両目をとじた。床が軋むほど大きな揺れがあり、それは自室から叫ぶリエイの咆哮によるものだとアルタは後に気づいた。

自分に渇を入れようと描いた魔法陣に効力があったことがまず驚きであったが、

アルタはこの地響きのようなリエイの声に不安感を感じ、ややもつれた足で自室へと走った。

シモンの手術の妨げとなっていないか、それももちろん気がかりで、アルタはシモンの自室前で足を止めた。

しかしウィリアムが覗きにくる様子もなく、手術に専念しているのだろう。さすがはプロの執事とも言える。

アルタは恐る恐るドアノブ引き、顔だけでそっと中の様子を伺った。

「おい、リエイ？大丈夫か…？」

返事がない。もしかしたら自分はとんでもないことをしたのでは？と流石に焦ったアルタは勢いよく扉を開き、リエイが無事か確かめようと部屋をもう一度見渡した。

すると先ほどまでそこに横たわっていた真っ赤な犬の姿がなく、代わりに見知らぬ小柄な少年が顔を覆うようにしてうずくまっていた。

アルタはいつからそこにいたのかと眉根を上げ、その少年の表情を覗き込むように彼の前まで回りこんだ。

「お前…？」

何故だか見覚えがある。だが面識はない。まるで有名人にようやく出会えたような歯がゆさに首を傾げると、少年は驚いたような、動揺したような顔を上げ、アルタを呼んだ。

「ご、ご主人…！」

アルタは驚いて数歩下がって少年を見つめた。

薄く開かれた少年の唇から漏れ出したのはリエイの声。そして呼んだ言葉はご主人という聞き慣れた自分の呼び名だった。アルタはしばらく言葉を失っていたが、やがて息を吐き出すように言葉を紡いだ。

「まさか…お前…？」

「そうです！僕です！どうしましょう！すっかり人型になってしまいました！」

アルタは頭を抱えた。

あの雄雄しい咆哮はどこへいったのか。貧弱な肉体に情けない面を下げた番犬の姿にアルタは絶望に似た感情を抱えて言葉が出ない。

自分の命を狙っていたクロードがシータ本人で、わざわざ大会前にこの命を消そうとやってきたのにも関わらず大事な戦力を失ったアルタにはもうウィリアムしかいない。

アルタはウィリアムを戦力と認識することが少々癪だったが。

こじんまりと座り込んだリエイは自分より遥かに困ったかのような表情をぶら下げたまま、同じぐらいの身長になったのにも関わらず犬の時のようにこちらを見上げていた。

「なあ、どうしてこうなった?俺は、でたらめな魔法陣を父さんの残した魔法陣から上書きしただけだぞ?」
「そう、それなんですよ!」
リエイは耐え切れなくなったのか、立ち上がり、深く頷いてアルタを見据えた。
「魔法陣が新たに更新されたことによって、メリット、デメリットが生じました。まず一目瞭然なデメリットとして僕が人型になってしまったこと。そしてメリットは契約の条約が白紙になったことです」
「どういう事だ?」
「つまり、僕が提示した三つの条約そして、最終項目である命の取引が無効になったのです。ですから僕は本来の力を取り戻したにも関わらず、あなた様にそれをお貸しすることができないのです」
アルタは大げさなほど大声をあげ、その言葉を反芻する。
つまり取引が無効となった為、形だけアルタは主人に成り下がったというわけだった。
「クロードが現れ、大会の選考を阻止した以上、ヤツは大会に出るでしょう。」
「でも、お前。白紙になったことはメリットだって言ったよな?」
「はい。オーヴァン様と交わした約束事全てが白紙になったのですから、当然僕からあなた様のお命を頂くことはありません」
「…だったら、俺が新しい条件と対価を元に、俺はまたお前の力を借りられるのか?」
リエイは息を飲んでアルタの顔を改めて見つめた。

彼はリエイを見ていなかった。まるで遠く、先の未来まですっかり見つめてしまったかのような強い覚悟が垣間見えるその姿に、リエイは膝を折って彼に傅いた。

「このリエイ、精一杯あなた様の為にありましょう」

アルタは頷いた。

「じゃあ、俺がお前に渡す対価は…」

二話

薄暗い室内は緩んだ蛇口が落とす数滴の雫が滴る音を反響させていた。
わずかな明かりのもと、やや苦しげなうめき声を上げて少年がうずくまっていた。
舌先で棒がついたキャンディーを弄んでいたクロードは、つま先で軽く彼の横腹を突いてみた。

「まさかこんなに早く僕の呪術が破られる…なんてね…」

足元で脂汗を浮かべ何も話すことのない少年はただ痛みに耐えていた。
クロードは勢いをつけて椅子から立ち上がると、少年がうずくまった場所に屈みこんで少年の顔を覗き込んだ。

「痛い？苦しい？」
「……。」
「けれども当然だよね。これが君が受けるべき罰で、然るべき痛みなんだからさあ」

クロードは何も話さない少年をじっと見つめ、面白くなさそうに鼻を鳴らして立ち上がった。
纏っていた黒衣を脱ぎ捨てる。先ほど向こう側が見えてしまうほど大きな穴が空いてた体だったとは思えず、病弱そうな白い皮膚がちゃんと繋がっていた。
クロードは刺された部分だった場所を撫で、傍にあった小さなテーブルに飾られた懐かしい写真を手に取る。

そしてそれはすぐさまクロードの手を離れて少年の体に叩きつけられた。

「クソッ！忌々しい…！オーヴァンの血族が生きている事が我慢ならない！」

その声は今まで少年らしく作っていた声とは打って変わり、背筋が凍るような毒々しい低音になった。写真立てが頭にぶつかった少年の額から、じんわりと鮮血が溢れ出す。

クロードは少年の胸倉を掴み、自分と身長が同じほどある少年を軽々と片手で持ち上げる。

「いいか、次はないからな。しっかりアルタ・マクベインを殺すんだ！分かったな、ウルリア！」

少年―ウルリアは小さく頷くと手を放されて床に崩れ落ちた。

「僕は一生、あの日のことを忘れない…オーヴァン、今度は僕がお前の全てを奪う番だ」

クロードはそう笑んで部屋を出るべく踵を返した。

顔を上げないままのウルリアは、その足音が完全に部屋から出たのを確認すると、耐えていた嗚咽を吐き出すように漏らして涙をこぼした。

その胸には確かな罪悪感があったが、彼自身その涙の本意は知れないままだった。

空は晴れ渡っていた。窓際から差し込む朝日がカーテンを閉め切った部屋に色を与えていた。

昨日適当に描いた紋章が施行され、新たにリエイとの契約を結んだアルタはやや疲れた顔をぶらさげてベッドから起き上がった。しかししっかり寝たというよりは、いろいろなことを考えているうちに倒れこむように寝てしまったようで、リエイが掛けてくれただろう毛布が一枚掛けられていた。

「あ、ご主人！おはようございます！」

アルタは一瞬ギョっとして目をこすった。確か契約は成功したはずだがリエイの姿は見慣れた犬の姿ではなく、まだ人型を保っていた。

「お前…？犬に戻るんじゃないのか？」

「それが、どうやら力は取り戻したのですがまだ本調子じゃなくて…」

「…おいおい、大会はそれで大丈夫なのか…？」

「多分…それまでに元の姿に戻れるように頑張ります…！」

ワン！と鳴いたリエイだったが、その姿は少年のままなのでどうにも見た目が間抜けだった。

アルタは深いため息をついて、ハッと大事なことを思い出して跳ね起きた。

「そうだ！シモン！」

三話

「シモン！」

ドアを開け放ったアルタは、消毒に使われたアルコールの臭いにまず気がついて部屋をぐるりと見渡した。後ろから情けない表情でついてきたリエイは、流石に突然人間の姿で出て行っては混乱させるからと外で待っている様子だった。

ベッドの側で立ち尽くしていたウィリアムは、飛び込むようにやってきたアルタの姿を見て一礼し、そっとベッドから離れた。

アルタは弱弱しい足取りでベッドまで駆け寄ると、包帯が巻かれた体で横たわるシモンの姿に少なからず衝撃を受けていた。

「ご安心を。麻酔がない手術に耐えていらしたので疲労で眠っているだけです」

「そ、そっか…。」

「先ほど…何やら強い力を感じましたが…ご無事で何よりでございます」

「…俺のことはいいよ。シモンはもう、大丈夫なのか？」

「傷自体はそれほど深くございません。出血がひどく、今は療養なされた方がいいかもしれません」

「…シモン…」

アルタはふと、脳裏に幼い頃両親がいない理不尽をシモンにぶつけて、素っ気無い態度を取っていた日々を思い出した。それでもシモンは温かかった。どんなに自分がその手を払いのけても、シモンがアルタを見捨てたことなど一度もない。そうしていく内にわだかまりは解けたが、アルタはその日々を今でも悔いていた。

そっと真っ白な彼の手を取り、アルタは自分の頬へと持っていく。すっかり冷たくなった彼の指先にアルタの温かい涙が伝った。

「俺…まだ伝えてないことがあるんだ…だからまだ…死なないでくれよ、シモン」

ウィリアムはモノクルを人差し指で押し上げ、そっと目を伏せた。そして胸元のポケットから一枚の封筒を取り出すと、シモンの手を離したアルタに静かに差し出した。

「どうか、シモン様の事は私におまかせ下さい。あなた様には、大会の知らせが届いております」

アルタはクリーム色の高級そうなその封筒を怪訝げな顔をして受け取り、
側にあった果物ナイフで封を切った。

「この度、神の試練に参加した生徒で優遇を授与されましたアルタ・マクベイン様におかれましては…本大会の本予選へのご招待をさせて頂きたく存じ上げます…？優遇？」

アルタはウィリアムを見上げた。
ウィリアムは頷くとやや大げさに頭を下げて胸元に右手をあてた。

「実はアルタ様はあの予選で、審査不十分として落選なさったのです」
「えっ…？！」
「コルネリアさんはあの審査でコネクションをしていたのではと審査員から外されてしまったようです。昨晩、エミリーから知らせが

来ておりました。」
「そうだったのか…。でもなんで俺は…？」
「こう言うのは、お気に触れるかとは思いますが、どちらの理由も…あなた様がグラウンドキングダムの王位継承権者であることが大きく関わっているでしょう」
「…なるほどな…」
「この大会には、グラウンドキングダムで、あなた様方をよろしく思わない者があなた様の前に阻むでしょう。それこそ、命に関わるような」

アルタは首を振った。では納得がいかない。自分は王位継承権を捨てたのにも関わらず、自分はまだ目の仇にされている挙句、自分を監視するためのバトラーはまだこうして穏やかな笑みを湛えて目の前にいる。バトラーを送り込んだ者とは別な意思がこの大会に干渉しているのは間違いないが、
まるで先代の王はこのことまで見越してこうして彼を送り込んできたかのように思える。
王位を一度でも持っていたものは根から潰す気でいる王位を操りたいもの、そして巡行される先代の遺言、クロードの本意。

この大会にはアルタが切っても離れぬ縁がある。
アルタは更に封筒に入っていた二枚のチケットを取り出し、眉根を寄せた。

「何だこれは？」

知らせが書いてあった便箋は二枚。
二枚目にアルタは目を通した。

「こちらに同封させて頂いたチケットが…本予選会場への切符とな

っております…？うおっ、マジかよ…俺転送チケットは初めて使う…！」

ひらりと二枚のチケットを表裏にしながらアルタは少し目を輝かせた。
ウィリアムは薄く笑みを浮かべ、チケットに目を遣った。

「使い方はご存知でしょうか？」
「ここを切ればいいんだろ？」
「はい。その入場チケットを切った瞬間、会場に瞬時に移動となりますので、ご準備をなさってから切って下さい。」
「うっし、じゃあ…本当はお前をまだ信用したわけじゃないが…シモンはお前に任せる」
「はい」

アルタは大きく伸びをして、スッとウィリアムの目を見つめた。

「だからもしもシモンに何かあった時は覚悟をしておけよ。」
「私の命に代えましても、シモン様をお守りすることをお約束いたします。」

アルタは堅いウィリアムの態度に苦笑し、リエイをシモンの部屋に招きいれた。
予めまとめておいた荷物から教科書や練習用の魔道書などを抜き取り、トランクを閉める。
人間の姿をしたリエイの分とアルタ自身のチケットに手をかけ、アルタはシモンが眠るベッドを見遣った。
そして凛とした表情でただ一言、

「いってきます」

と残し、チケットを切り取るのだった。

四話

アルタが再び目を覚ました瞬間、突然アルタの耳に街の賑やかな喧騒が飛び込んできた。
ほんの一瞬目を閉じただけだというのに、その手にだらしなく握られたチケットが切られた瞬間、アルタは確かにあのシモンの部屋からいなくなり、そしていま彼の眼前には巨大な都市が広がっていた。

アルタはぽかんと口を開いたまま立ち尽くし、すれ違う人に肩をぶつけられてよろめいた。
空はいやに高く、何万ともいえる人やその他の種族が慌しく通り過ぎてゆく。
調度アルタが見つめる先に、ウーラノス教団の大聖堂がそびえ立っていた。見上げてもその全貌が見つめられないほど巨大な聖堂の周りにはこの都市を構成している住人の居住区とショップがひしめき合い、この聖堂へ向かう橋自体が小さな国にも思えた。

「すっ…げえ…」
「アルタ様、ここに突っ立っていては危険です。場所を移動しましょう」
「あ、ああ」

アルタは聖堂を見上げたまま、生返事をしてリエイに振り返った。
しかしリエイの忠告虚しく、リエイがいる方向とは反対に振り向いたアルタは通行人である一人の少女に頭からぶつかり、少女は尻餅をつき、アルタは悶絶してしゃがみこんだ。

「ご、ご主人…！」

「いった…！ごめん、大丈夫か…？！」

アルタはぶつかった少女を一瞥し、額をさすった。彼女のほうが頑丈だったのか、アルタの額はこぶができて盛り上がっていた。

「ごめんなさい…私、前を見すぎてぶつかってしまったみたいで…」

少女は怪我などしなかったのか、すくっと立ち上がるとまだ立てないでいるアルタに細い手のひらを差し出した。アルタは何となくその手につかまって立つと、折れてしまいそうに思えたためやんわりそれを断り、よろよろと立ち上がった。

「あ、そのチケット…あなたも試練の大会に参加するのね？」

アルタがぶつかった拍子に落としてしまったチケットに視線を遣って、少女は微笑んだ。

アルタはくしゃくしゃになってしまったチケットに視線を落とし、再び少女に戻して苦笑する。

「あ、…ああ、まあ…きみも？」

「そう。わたしね、一緒に来たはずの子とはぐれちゃって…会場がこの橋の向こうなのは分かるのだけれど…沢山参加している人がいるでしょう？不安で…」

「では、僕達とご一緒したらいかがですか？ねえ、ご主人？」

「えっ」

人間の姿をしているリエイは気さくにアルタへ笑顔を向けた。

なるべく大会前からは面倒ごとを避けたかったアルタだったが、彼女をそのまま見捨てる気にもなれず、大きなため息をついて頷き返した。

「そう…だな…きみ、名前は?俺はアルタ。アルタ・マクベインこいつはリエイ」
「そう、アルタとリエイね。わたしはアーデルハイト・バッカー。アディでいいよ」
「じゃあ、よろしく、アディ」

アルタは右手を差し出し、先ほど折れそうだと感じた彼女の冷たい手のひらを握った。
リエイもそれを返し、三人はさっと大聖堂を見上げる。
アルタは息を飲んだ。あの向こうにはクロード、そしてウルリアがいるはず。
命に絡み付いていた呪いは新たなリエイとの契約で打ち消されたが、またその契約内容と魔法陣を把握し、いつ呪われたり殺されそうになるか分からない。

「行こっか、アルタ」

能天気なリエイと穏やかなアーデルハイトの笑顔を見つめ、守るものが出来たアルタはより一層気を引き締めた。
アルタに科せられたハンデ。魔法と召喚が十分に行えないアルタの武器は只一つリエイだけ。
リエイの本当の力を手中にし、何が何でも過去の真相を知らなければならない。
アルタは曖昧に笑い、「今行く」と答えてじっと目を閉じた。

(ウルリア…お前の本意も必ず…俺がこの手で暴いてやる…!)

五話

街はアルタの想像を上回って発展していた。大きな声を張り上げる行商人のテントに目を奪われながら細い路地を進んで行き、アルタはついここが巨大な橋の上であることを忘れてしまいそうになる。この先には大聖堂があって、あくまでもこの街が広がっている場所はその聖堂までの道なのだ。

「そういえばアディさんがはぐれた方はどんな方なんですか？」

リエイは肩から提げたアルタの荷物を揺らし、背後からついてきていたアーデルハイトに振り返った。アーデルハイトも同じく屋台に目を奪われていたらしく、我に返ったように顔を跳ね上げ照れた笑顔をみせる。

「あ！えっと…私とは全然正反対で…ハキハキなんでも言う、とっても明るくて優しい子だよ」

「名前はなんていうんだ？」

「モニカっていうの。髪を二つに結ってて、色は黒がかった紫。目は大きくてとっても綺麗な金色なの」

「金色…？それだけ珍しい髪色に目の色の女の子なら目立つな…彼女の臭いとか、お前追えるか？」

リエイは困ったような顔をして首を振った。人間の姿では無理、という意味だろう。アルタは嘆息し、アーデルハイトに返った。

「もし見かけたらすぐ俺かリエイに伝えてくれ。一人で行動しないでくれよ」

「うん、そうするね」

アーデルハイトは人形のようなカールの髪をふんわりと揺らして笑顔を向けた。アルタはあまり女の子に慣れていないせいか、ふっと顔を背けて赤らんだ顔を隠す。リエイはその様子をほほえましげに眺めていた。

「きゃあああ、泥棒っ！」

ふと、橋の真ん中辺りに差し掛かった所で、甲高い声が響き渡ってアルタは足を止めた。

その悲鳴がしっかり耳に触れた瞬間、アルタの肩を突き飛ばし一人の男が走り去っていった。

アルタは彼が泥棒だと気がつき、バッと急いで振り返る。

「泥棒…？」

背後にはきょとんとした表情のアーデルハイトがアルタの焦った顔を見上げていたが、

その直後、彼女は何者かにぐっと掴まれて仰け反り、アルタは思わず声を上げた。

「アディ…！」

手を伸ばすが、届かず。

アーデルハイトはそのまま男に捕まり、男は高く腕を挙げて銃を打ち鳴らした。

「きゃあっ」

ざわっ、とささめく人の波は男とアーデルハイトから遠ざかり、男はぐるりと群集を見渡して盗んだ金が入った麻袋を注意深く胸元に押し込んだ。

「退け！こいつを殺されたくなかったら道を開けろ！」

「アーデルハイト！」

「アルタ…！」

アーデルハイトは口を塞がれ、宝石のような大きな瞳からはぼろぼろと涙をこぼしていた。

アルタは早速連れがこんなに目立つようなことになって、少々後悔していた。

クロードからはなるべく注意を逸らしたかったが、先ほど出会ったばかりとはいえ、アーデルハイトはもうアルタにとっては友人、見過ごすわけにはいかなかった。

「リエイ…！」

ワン！と吠えたリエイは体制を低くし、拳を握る。

しかしその姿はどこまでもひ弱で、アルタは若干この状況を絶望視していた。

男は再び銃を空へと鳴らすと、じわりじわりと引いてゆく群集を警戒しながら後ずさってゆく。

アーデルハイトは引きずられるように首元を掴まれていた。

「くそっ…何かないのか…！」

リエイはアルタの命令をじれったそうに待っていた。
だが彼は曲りなりにしも一般人で、今のリエイの力がどれほどかを知らずに痛めつけるようなことは出来なかった。リエイは最高クラスの召喚獣で、手加減をしてもただでは済まない。
アルタの手に汗が滲む。
口元を押さえられていたアーデルハイトは必死に涙をこぼしてアルタの名を呼んだ。

「助けて…！アルタ…！」

アルタはその声にただ、思考を止めて息を飲んだ。
そうだ、考えている間にも彼女のこめかみに犯人が銃を押し当ててしまえば、
彼女と関わってクロードに見つかってしまう遥か以上に後悔して生きていかなければならない。

アルタは飛び出した。
蹴り上げた右足は震えている。殴り合いの喧嘩なんて一度もしたことがなかった。
ぐっと握った拳を振り上げ、今にも銃をアルタに発砲しそうな男の表情は焦燥。アルタは死を覚悟した。

「チッ、何をちんたらやってんのよ」

ふと声がしてアルタは振り返る。目の前には引き金に手をかける男、目をぎゅっと閉じたアーデルハイト。まるでこの一秒がスローモーションになったかのような不思議な感覚。そしてアルタは左肩を無理やり引かれて、パン！と乾いた音が鳴り響いた。

第七章　彼との再会

アルタは大きく尻餅をついてうめき声を一つあげ、そのすぐ足元に先ほどまで自分が向けられていた小型拳銃が転がった。アルタは先ほどの一瞬、一体何が起こったか理解できず、目をしばたかせて目の前に佇む一人の存在に気がついて顔を上げた。

風にたなびく背中までの長い髪は二つに結われている。その色はマゼンタより深い紫。堂々としたその立ち姿に反して身長が低く、その身長には更にピンヒールのブーツの高さが加わっている。

リエイは尻餅をついたアルタに駆け寄り、心配そうに情けない顔をしていた。

「ご、ご主人…！」

「あ…ああ、心配ない…俺は平気…それより」

男は銃を奪われて、アルタ同様、何が起こったのか理解しようと固まっている。その呆然とした男の腕から逃れ、アーデルハイトは嬉しそうな声を上げた。

「モニカちゃん…！助けてくれたの？」

カツン、と高い音を鳴らし、少女は振り返った。長いツインテールを指先で払いのけ、うっとりするほど美しい瞳を細長くして澄ました声で返す。

「別に。通りがかったら間抜けな男とアンタを見つけただけよっ」

モニカと呼ばれた少女は冷たい視線をアルタに送る。彼女は一体何をしたのか、アルタは立ち上がり、アーデルハイトと自分を助けてくれた事を詫びようと手を差し出した。

「ありがとう、助かったよ。俺はアルタ。そこの子とたまたま知り合って、一緒にいたんだ。確か…彼女の連れ…だったよな…？」

モニカはアルタのつま先から頭までじっくり見つめて、差し出された手に視線を落とした。
そして今までぶら下げていた両手を組むと、じろりとアルタを睨みつけた。

「たまたま知り合って…？本当はアーデルハイトがかわいいからって声を掛けたんじゃないでしょうね？」

アルタは目を丸くした。
突然つんけんとした彼女の態度もそうだが、まさかそんな言いがかりをつけられるとは露ほどにも思っていなかったからだ。アーデルハイトはおたおたとそんなモニカの手を引いた。

「ち、違うよ、モニカちゃん。この人は迷子になっていた私を、モニカちゃんのところまで連れて行ってくれようとしてたんだよ？」
「本当かしら？男二人で女の子にそんなに無償に親切なんかするとは思えないけど」
「あー、悪かったよ…その、パートナーの彼女を連れまわして。俺達は本当に偶然に出会っただけだし、合流できたなら俺達はもう行くよ」

アルタはうんざりとして踵を返した。まるでどこかのお嬢様とそっくりな彼女はアルタには苦手な属性だった。リエイはおろおろとし

てアルタの後を追ったが、数歩歩いた所でモニカはアルタに声を掛けた。

「待ちなさい！」

「何だよ？」

モニカはツンと澄ました顔でアルタを見つめるとスッ、と腰に携えていた短い鞭を突き出し、アルタに不敵な笑顔を向けた。そしてどさくさに逃げようとした男の横腹を容赦なく蹴り上げるとその腹部にピンヒールを食い込ませアルタに返る。

「こんなこそ泥一匹捕まえられなかったアンタでも…私の姉を助けようとしてくれたその心意気は認めてあげてもいいわ…私の下僕にしてあげる」

眉間に最大限寄せられたしわを深く刻んで、アルタは聞き返す。

「…はあっ？！」

男が暴言をあげ、抵抗したが、モニカはそんな男に鞭を数回浴びせ、切れた男のジャケットから金貨が散らばり、モニカはそれを一枚拾い上げてキスをした。

「アンタ、神の試練に出るんでしょう？だったら共同したっていいじゃない。この間抜けな姉を助けようとした代わりに、アタシがお礼をたっぷりしてあげるわ」

「ど、どうしてそうなるんだ！？俺はもうあんたらと関わる気は…」

ピシャン、と鞭がしなり、地面を叩きつける。男が悲鳴をあげ、モ

ニカはムッとした表情で返した。

「因みに、返事はイエスしか認めないわ」

アルタは大きく息を吐いて顔を両手で覆った。アーデルハイトはのん気にモニカとアルタを見比べ、モニカちゃん、アルタが気に入ったのね。と笑顔をみせていた。

リエイは同情するようにアルタの肩を叩くとそっと小さな声でアルタに告げた。

（彼女、かなりのサディストな気がありそうですね…）

（…うるさい…もう俺は後悔したら行動しないことにした…）

アルタはモニカを一瞥し呟いた。

「…今じゃ…ヘティーがかわいく思えるもんな…」

そうして正に前途多難、といった風に再びため息が唇からあふれ出るのだった。

二話

「そういえばアディはモニカと姉妹だったのか…」

買い食いしたクレープを片手に、アルタは横からしゃんとついてまわるアーデルハイトとモニカを半ば呆れた風に見つめた。モニカはアルタをじっと一瞥するとツン、と顔を再び逸らす。

「下僕のくせに私を呼び捨てなんていい度胸じゃない。」
「…俺はお前の下僕なんかじゃない」
「似てないって言いたいんでしょ？」

アルタはぴたりと足を止めた。まるで、いつも似てないと言われ慣れてるとばかりのモニカの言動に何か引っかかるものを感じたのだ。モニカはアルタが止まったことなど気にもとめず、クレープから溢れた生クリームをこぼす姉の服を拭いてやっていた。

「別に、いいのよ。私達、血が薄いもの」
「どういうことだ？」
「そんなことより」

ピシャン！とお得意の鞭をふるったモニカはアルタを睨んだまま、不服そうな表情をみせた。
アルタは話を意図的に変えられ、まだ引っかかりを尋ねたくてうずうずしたが、すぐ足元を鞭で叩かれしばらく言葉を失う。

「あのこそ泥。ウーラノスの使節団のヤツに引き渡すなんて…どういうこと？あいつらは警察じゃないのよ」

「引き渡したわけじゃねえよ。あいつらが勝手に来て勝手に連れて行ったじゃんか…」
「何企んでいるのかしら…教団はこの大会を快く思っていないし…私達が用心するに越したことはないわね」

アルタはふと、その言葉で家に置いてきたシモンのことを思い出した。実際、アルタもウーラノスの使者であるウィリアムが何を考えているかは知れない。モニカのその一言はアルタの不安感を大いに掻き立てたが、首をふり、彼を一度でも信用した自分を否定することはできなかった。

「おい、何でもいいがその鞭は危ないから街中でむやみやたらに振り回すんじゃない」

アルタは大きく息をついてモニカに向き直った。手のひらに皮の感触を楽しむように鞭を緩く往復させていたモニカはその一言に足を止め、アルタがもう一度口を開いた瞬間にはその鞭の先がアルタ目掛けて飛んでいった。

「うわっ！」

クレープがその切っ先に触れ、地面に叩き落される。アルタは咄嗟に仰け反ったが、彼には鞭が触れることはなかった。モニカは眉根にしわを寄せて彼女の鞭を止めたリエイを睨んだ。

「何？下僕二号のくせして生意気な真似してくれるじゃない」
「たとえどんな方であろうと僕のご主人に武器を向けることは許しません…！」

キッとリエイもまたモニカを睨み、アーデル ハイトは険悪な雰囲気

を感じておろおろと左右を見渡した。

「主人…？お笑いね…下僕の下僕っ？ふふっ」

「いい加減にしろ、モニカ。そいつは下僕なんかじゃない、俺のパートナーで召喚獣だ」

モニカは黄金の大きな両目を見開き、アルタとリエイを交互に見遣る。

「人型の召喚獣…？聞いたことないわ。」

「モニカちゃん、仲良くしなきゃだめだよ…」

「フン、下僕が歯向かったからお仕置きしていただけよ！」

行き場をなくした鞭はリエイの手から離れ、その鬱憤を晴らすように地面に音を鳴らしてしなる。

アルタは取り合えず彼女が引いてくれたことに安堵し、リエイに返った。

「手、大丈夫か？」

「心配におよびません！僕のこの姿はあくまで仮の姿ですから。ダメージがあるように見えてもさほどひどい傷を負っていることはありませんので」

リエイは明るく笑ってみせたが、先ほどの行動をアルタは少し意外に思っていた。

モニカも先ほど男にふるっていた様子からして、大怪我するような鞭さばきをする気ではなかった、

ほんの冗談まじりにふるうつもりだっただろうに、それに対して何故かリエイは敏感だった。

モニカもアルタがあまり鞭をふるうなと言ったことに憤慨したとい

うよりは、今のリエイの態度が気に入らなかった用でツンとしている。
アルタはやんわりと笑顔をみせ、リエイの肩をぽんぽん、と叩いた。
「俺が狙われてるからって…あんまり気ぃ張るなって。大丈夫だよ」
「あ…はいっ！その…すみません、なんかムキになっちゃって…」
「ちょっと、何してるの！早く行くわよっ！」
少し不機嫌なモニカの声に急かされ、アルタは顔を上げて小走りしていった。
複雑そうな表情のリエイは気まずそうに頭を掻いてその後を遅れて追うのだった。

三話

橋を渡り終えると、転送チケットのちぎった半券を確かめる教団の使者が数人立っていた。アルタは自分の半券を手渡し、リエイが召喚獣であることを説明し、門をくぐった。

いくつも枝分かれした道は上下左右に広がり、ローブを身に纏ったこの大会の参加者が歩いていた。

橋の中心からでもその存在を周りに知らしめていた大聖堂の存在感は正に圧巻という佇まい。

巨大な石像が二対並んでおり、その昔神話の戦争で戦った二人の神がモニュメントとして飾られていた。アルタは抱えていた荷物を地面へと落とし、ただただ長いため息をつく。

こんな巨大な大聖堂を建設するほどの力を保有した組織が立ちはだかるのだ。ため息がどれだけ出ても足りないだろう。

モニカはぼさっと立ち尽くしたアルタのすねを蹴り上げ、不機嫌そうな表情でアルタを見つめた。

「何突っ立ってるのよ、通行の邪魔、邪魔よ」

「そんな事言ったって…こんなに枝分かれした道…一体どこに行ったら…」

「はあ、アンタって本当に愚図ね。私達は先に、このウーラノスが用意した宿泊施設に行くの」

「宿泊施設？」

「もう、本当に何も知らないのね！」

モニカはイラついた様子でブーツを鳴らした。モニカが知らないの

は当然だが、
アルタは本来落選した身分なので、詳しい説明など聞いているはずがなかった。
アルタはモニカが親切に教えてくれそうな様子なのでじっと言いたいことを我慢して聞いておくことにした。

「大聖堂の横手に、この大会で起用される学生には宿泊施設が設けられているの。もちろんそこに寝泊りするのだけれど、最初はいい待遇ではないわ。徐々に自分の実力で、この大会の地位を勝ち取るの」

アルタは眉根を寄せる。
完全なる格差と競争の社会。大会内の枠から飛び出してまで人を争わせるのかとアルタは少し嫌な気分になった。自分の待遇はどうであれ構わなかったが、フェアじゃなく感じられてアルタの信念からすこし逸脱しているとさえ感じたのだ。

「それで、大会はあまりに沢山の人数が参加するから、この大聖堂で行われるトーナメントは少し特殊なの。二つのチームが同じ空間でそれぞれ決められた対戦相手と戦う。けれどもそれを妨害することや別の人物と戦うことは禁止されてないわ。まっ、力がものをいうの」

アルタは一瞬で血の気が引く気持ちになってモニカの言葉を繰り返し反芻した。

「禁止されていない…？！」
「そうよ。アンタみたいな甘ちゃんはすぐに病院行きかしらね、うふふっ」

妨害や別の人物と戦うことが許される初戦のトーナメントは敵が多いアルタに取って飛んで火に入る夏の虫、といった具合だ。妨害までが禁止されていないとなると、そのトーナメントに参加している数十人が一度にアルタへと襲い掛かってもおかしくはないのだ。

「そうだ、これ」

モニカは提げていた小さなポシェットから一台の薄っぺらい機械を取り出してアルタに差し出す。

「下僕であるお前は、私の指示したときにはすぐに飛んでくるのが当たり前よ。これを渡しておくから、無くしたり壊したりしたら容赦しないんだからね」

「…何度も言うが、俺は…」

「返事は、イエス！でしょ？」

アルタはうんざりとしてモニカを見上げる。勝ち誇った表情で微笑む彼女に、アルタは折れた。

「…誰かと連絡が取れるのは便利…だしな…じゃあ借りてやるよ」

「貸してください、でしょ。言葉遣いすらなってないんだからこの愚図男！」

モニカは悪態をついて、さきほど説明した宿泊施設まで歩いてゆく為、踵を返す。

アルタは小さなモニターがついたその通信機を手のひらで遊び、無くしたりしないようそっと胸ポケットにしまいこんだ。

四話

モニカとアーデルハイトと別れて、アルタは小さな渡り廊下をリエイを連れて歩いていた。
モニカ達は施設の手続きを済ませてから会場である大聖堂に向かうと言っていたが、アルタは何となくまだ歩いていたい気持ちがあってか、モニカと行動を共にするのをやめた。
すれ違うまだ自分よりはるかに若いような少年が、一心不乱に呪文を繰り返していたり、肩が触れた少女なんかはアルタに唾を吐きかけていった。

アルタは渡り廊下の手すりに上半身を預けてため息をつく。
ここは巨大で、沢山の人がいるのに、人は欲望に忠実ですっかり目の前の視野が狭くなってしまっているように見えた。
自分も長くここにいては、心が腐ってしまうのではないだろうか、そう考えてしまうほどに…。

「この大会のルールは…新しく考案されたもの…ですね。よく考えてみれば、オーヴァン様が大会に参加されたのはもう…二十年近く前ですし…」
「…やっぱり父さんは…この大会に参加していたのか」
「とても大事な御用事があったんです。ご自分の身分を隠しておいででした」
「……なあ、父さんはこの大会に参加したから…殺されちゃったのか？」

リエイは目を伏せた。
パッと目を惹く赤毛がふわりと風に揺られている。

「ある意味…そうであったのかもしれません…この大会でのオーヴァン様の目的は一つでしたから」
「…何だよ？」
「この世界の規律を…正すこと…つまり、神の意思に従って…魔法と召喚術をこの世界から消え去る事でした」
「そう…なのか…？でも何で父さんが？グラウンドキングダムの国王ならそんな事望まないはずだ」

リエイは俯いた。まるで親に叱られてしまうのを覚悟している子供のように、
少し泣き出しそうな表情は強張っている。アルタはしばらくリエイが何か言うのを待ったが、
彼は唇をかみ締めたまま、黙っていた。

「言いたくないなら…いいよ。俺だって、聞いて楽しくないことだろうと何となく分かるさ」
「…いつか…この話はあなた様に話さなければなりません…でも今はその時ではないかと」

異国の服が髪と一緒にはためいて、リエイは困った表情のまま緩く微笑んだ。
アルタはリエイの目がとても気に入っていた。
そして、本来の姿であるあの毛並みも、まるで黄昏にこぼれた太陽の光のようで温かく、それでいて儚いような不思議な魅力。
父が自分の命を守るために遺した召喚獣。とてもクロードの召喚獣には叶わなかったが、それでもアルタは彼をいつしか自分の誇りだと感じるようになった。
彼が力を放つ為に、自分は尽力する。
そしてこの大会にがんじがらめになった様々なものと対峙するため

に。

「大丈夫、僕がついています！」

落ちこぼれだった時は友達も少なくて、こんな気持ちになったのは始めてだった。

何も知らず、自分の無能さに歯がゆさを感じていたあの頃とは全く違う、強い意志をアルタは感じた。そして聞きなれたこのリエイの言葉も、今は信頼できる。

「ああ、頼んだぞ」

そして、笑顔を向け、アルタは会場である大聖堂へと向かい、歩き出した。

「…ねえ、見てアルファ…、アレ…」

一人の少年が、下に伸びた渡り廊下を歩く二人の少年の姿を目で追っていた。

側に立っていた大柄の青年は渡り廊下を覗き込む少年の首元を落ち

ないように支えてやり、一瞥する。

「あいつ…王位継承者の、えっと」

「アルタ・マクベイン」

「そう！そいつだよう！」

嬉しそうに一回転し、少年はわざとらしく浮かべられていた笑顔を消して冷たい視線をアルタに送る。

「本来なら…僕がこのグラウンドキングダムに君臨するはずだった、そうだろう？」

「ええ、ジノ様」

「ジジイのあの遺言は間違っているって教えてあげなきゃね…」

蒼穹のような瞳をきゅっと細めて、ジノと呼ばれた少年は低い声で告げた。

「そうだ、僕がこの世界の…だよねえ…クロード…」

五話

通路を歩いている最中、アルタは少しだけ頭痛を覚えて時々足を止めた。それは最初は気のせいであると思えるほど些細なものであったが、次第に足を止めなくてはいられないほど痛み、とうとうアルタは膝をついて呻いた。リエイは前を歩いていたアルタが辛そうにしているのをすぐに駆けつけ心配そうな表情で彼の顔を覗き込む。

「ご、ご主人!?」

「悪い…頭…痛くてさ」

「やっぱり宿泊施設に戻りましょう、体調が優れないなら明日に備えて寝ておいたほうがいいですよ」

「うん、今行くからちょっと…待っ…」

その瞬間。キーン、と耳鳴りがアルタの耳に突き刺さるように鳴り、一際激しい頭痛にアルタは頭を抑え込んでうずくまった。

―来て、ここに―

「誰なんだよ…お前は…!」

―来て、そして連れ出して―

「やめろ…」

―私は…、ここに……―

「やめろっつってんだろ！！」
「ご主人、ご主人！しっかり！」

リエイの手を振り払ったアルタは、自分を思わず突っぱねてしまったリエイに詫び、すっかりクリアになった頭痛から開放されて立ち上がった。
脳内に反響音のように鳴り響いた声。それは何度もアルタに語りかけてきていたが、今回は特に長く、そして意味を理解できる語りかけだった。
助けを求めるかのような言葉を連ね、呼びかける若い女の声。
アルタはその声を忘れるように首を振り、リエイに素っ気無くなんでもないからと返して再び歩き出した。

しかし数歩歩いた所でアルタは、大柄な男が目の前に立ちふさがりすぐに足を止めてしまう。
ぶつかりそうになって立ち止まったアルタがその横を通り抜けようとした時、ドン、と胸元を叩かれアルタは尻餅をついて倒れこんでしまう。
リエイは咄嗟にアルタを庇い、威嚇するように八重歯をむき出した。

「何だ…よ？俺からはぶつかってないだろ！」

男は答えない。
全身黒いスーツに覆われ、その顔は伺えない。
アルタが不審がっていると、アルタを背中で支えていたリエイが悲鳴のような声を上げた。

「ご主人！後ろっ！」

アルタはリエイに言われて振り返り、ようやく自分達が置かれていた状況を把握して眉根を寄せた。

「そういうことかよ…きたねえヤツ」

挟み撃ちにするようにアルタのまわりには目の前の男のようなスーツ姿の男たちが武装してアルタを睨みつけていて、絶対絶命なのは目に見えて明らかだった。

「お前ら…何者…？クロードの手先？」

「やれ」

アルタの質問などお構いなしに男達は一斉にアルタに飛び掛った。リエイはアルタを守ろうと必死に男達に殴りかかり、アルタは渡り廊下のふちへと追いやられて咄嗟に手すりに捕まる。しかしそんな努力むなしく。アルタを支えきれなかった手すりは大きな音を立てて一部が崩壊し、アルタはそのまま門がある最下層の地面目掛けて真っ逆さまに落ちていった。

「…！ご主人！」

リエイは即座にアルタが落ちていったのを追おうとしたが、それを男達が阻んだ為、咆哮を上げ、その肉を食いちぎらん勢いで掴みかかった。ただ彼が無事であることだけを望みながら…。

六話

落下していく最中、アルタは今まで起こったことをぼんやり考えていた。それはほんの数秒の出来事であったが、アルタにしてみれば走馬灯。すごくゆっくりとした時間が流れて地面が確実に近づいているのだと感じられた。

リエイは無事だろうか。そもそも自分が死ねば、還れなくなってしまわないか。そんな事をふつふつと考えながらアルタはついに地面まで落下し、ぎゅっと目を閉じた。

「もう目をあけていいよ」

ふと声を掛けられ、アルタは目を覚ました。

一体何が起きたのか瞬時に理解できず、ファーのコートを目深までかぶった少年がこちらを見つめているのを見つめ返すので精一杯だった。

まるでその感覚はモニカに出会ったばかりの瞬間と似ていて、現すならば時間が突然止まって戻された感覚。アルタは首をふり、ここがあの世ではないことを確かめるように自分の手を握ったり開いたりと落ち着きのないそぶりを見せた。

「まさか君を狙っているやつが他にもいたなんてね…立てる?」

「お前は…?いや、それより俺は生きて…いるのか…?」

「生きているさ、僕の顔もきっと覚えているよ」

少年がフードを取る。
アルタは大きく息を吸って目をしばたかせた。

「久しぶり…元気そうで…その…安心してるよ」
「う…ウル…リア…」

学生だったあの時からほんの数ヶ月も経ってないというのに、目の前の親友はどこか悲壮感が大人びてみせていた。アルタは突然捜していた親友が現れ、混乱が最高潮に達し、何から問い詰めてやろうか何を言ってやろうかと考える暇もなくただ一言

「生きていたんだな」

と安堵の息と共に吐き出した。

ウルリアはその一言に複雑そうな表情をみせていた。
もちろんアルタの命を狙っていたことはアルタが既に知っていることも分かっていたし
こうして当たり前のように顔を見せることすら本来ならばしてはいけないことだった。万が一クロードがこのことを知れば、またウルリアはただではすまない。
それでも彼は、アルタに伝えておきたいことがあった。
たとえ彼の命をいつか奪う形になっても、自分自身がこのことを伝えていなくて後悔しないように。
せめて親友だったときの自分が死ぬ前に、親友としての情報提供をしてあげたい。

…そんな所だった。

「君は僕にいくつか聞きたいことがあるだろうけど…生憎、僕はそんな事を答えてあげている時間はないんだ」
「…上の奴ら…お前らの部下？」
「…違うよ。言ったろ、他にも君を狙ってる奴がいるなんてって。」
「何で…今更…俺なんか…俺をわざわざ助けて、殺しにきたのか？」

ウルリアは言葉が出ない様子で首を振った。今にも涙が出そうな彼の表情は、しっかりとアルタを捉えていた。そしてそんなウルリアより遥かに傷ついた表情を浮かべたアルタはウルリアには痛々しいほどだった。

「それも違う。…君にかけた呪いは…新しい契約で破棄されてしまったし…今はクロード様にも内緒で来ている」
「クロードさま…ね…」
「君にとって有益な情報だ。信じるか信じないは君に委ねる」

アルタはそっぽを向いてウルリアと視線を交えなかった。
ウルリアはそっと視線を落として続けた。

「君の両親は事故で亡くなったとシモンさんが言っていたけれど、嘘なのはもう…知っているよね？」
「…ああ」
「君は王子様で、そして君の父さんはもう亡くなっている。だけども考えなかったかい？じゃあ一体母親はどうなったのか」

アルタは目を見開いた。
そういえば父を追う事で頭が一杯で、会ったことはないが魔法陣（レコード）で見たあの母のことをすっかり失念していた。いやむしろ、母ももういないんだろうと勝手に頭がそう理解していた。
だが

「君の母親は…生きている」
「嘘…だろう…？そんな事を言ってまた俺を騙すんだろう…！」
「…だから信じるかどうかは君に任せると言ったはずだ。」

ウルリアはそっと右手をかざした。ほんのりと淡い煙がたちこめ、ウルリアの体がその煙に包まれてゆく。アルタはウルリアがそれだけを伝えようとやってきたことを悟り、ウルリアの手を必死に掴んだ。

「どういうことだよ…！ウルリア、何でお前がそんな事を…！」
「…真実を知りたかったら…追えばいい…僕達はそのために君を待っている」

パッと軽く手を払いのけたウルリアは、困ったような笑みを浮かべて片手を挙げる。

「次会うときは…分かってるだろうけど…僕達は敵同士だ…」
「待て、行くな、行くなよ、ウルリア…！」
「…じゃあね…アルタ」

懸命に伸ばした両手は虚しく、パシュッと鳴った空気と共に消え去ったウルリアを掴むことなく垂れ下がった。アルタはあまりの悔しさから唇から血が滲むほどかみ締めて地面にうずくまった。
なんて自分は非力なんだろう。
クロードからウルリアを救ってやることも、自分自身の身の安全すら守れない。
そんな人間が自分なのだと。

「何で…そんなにお前が悲しそうなんだ」

第八章覚醒

絵に描いたような仏頂面をぶら下げた男が豪奢な廊下を歩いていた。
やがて廊下は行き止まりになり、大きな扉が一枚あるのみ。男は躊躇なくその扉を開いた。
扉の向こうは少し開けたホールになっていた。白で統一された部屋には男より早く到着していた数人の男女が一斉に入ってきた男を注視した。

「やあ、アスピヴァーラさん今調度面白い話をしていましてね」

男、ニコデムスに気がついた一人の初老の男が愉快げに声を掛けてきたが、ニコデムスはすっとその男を無視して側を過ぎ去る。
ホールの中央に申し訳なさ程度に設置されていた小さな大理石のテーブルと椅子に腰掛け、一人チェスを楽しむ男の側まで歩いてゆく。
そして何を言うでもなく、ニコデムスはそのままそのチェス盤を手で大きく払いのけて男を睨みつけた。

「何のつもりだ、ヨハン」

特に驚いた様子もなく、ヨハンと呼ばれた男はにんまりと笑みを浮かべた。

「そりゃこっちの台詞でしょうがー、何、一人で遊んでたのに邪魔するなんて変態？アハッ」
「変態は貴様だろうが。聞いた話だが…貴様、グラウンドキングダムの四本柱でありながら…冥府と取引して収賄している…とかな」

ホールがざわつく。突然現れて問題発言を飛び出させたニコデムスに何を思うでもなく、奇跡的に倒れなかった花瓶から一本薔薇を抜いてヨハンはそれを手のひらで遊び始めた。

「ふふっ、突然戻ってきて何を言うかと思えば…白には黒がつきまとう。分かるー？つまりね、何にもしていなくったって、僕様たちはどうしたって囁かれる色んな情報があるわけさ。それこそー、エーオース統括のアスピヴァーラ・ニコデムス様だって何を囁かれているのやら…」

「はぐらかすな、貴様ならやりかねん話だ…貴様のような奴がこの世界の秩序を乱す…美しい世界には貴様のような人間は必要は…ない！」

張り詰めた雰囲気がホールに漂い、何の関連もなくしてその場にいた数名はおどおどと険悪な二人の様子を見つめているしかなかった。ヨハンは薔薇を投げ捨てパチン、と指を鳴らす。するとたちまち薔薇は炎のに包まれ、薔薇は灰となって地面へ散った。

「ピリピリしないでよ。アンタが僕様を気に入ってないのは知っているよ。だからはい、退散ー退散！」

ヨハンは最初にニコデムスに話掛けていた初老の男の背中を押しながら部屋を出た。

巻き添えを食った男は戸惑いながらも険悪な雰囲気から脱出したかったのか、押されるままに部屋をでた。

「アハッ、言い忘れてたけど…僕様もアンタなんか好きじゃないよ、じゃあねー！」

パタン、とドアを閉め本当に出て行ったヨハンの姿をその髪の毛の先が見えなくなるまで見つめ、ニコデムスは大きく息をついた。グラウンドキングダムの四本柱。王、オネイロス、エーオース、ウーラノス。その内の一つであるエーオース統括であるニコデムスは、オネイロス統括であるヨハンの行動に疑惑を抱いていた。先ほどわざわざ公言した冥府との不正な取引もそうだが、彼は何か裏で操って事を起こしているように思えてならないニコデムスは吐き捨てるように呟いた。

「何を考えてる…マッドサイエティニスト…」

アルタが落ちていったことが気がかりだったリエイは、病み上がりだったこともあり、苦戦を強いられていた。自分の存在が脅かされてない以上、アルタは無事だったのだろうが、やはり気がかりでならない。ちぎっては投げ、ちぎっては投げを繰り返していたが、スーツ姿の男達はどういうわけか全く傷を負っても倒れない。いい加減体力の限界に到達したリエイは大きく身構え、後ずさりをした。

（一体こいつらは何だ…?!ご主人…！）

「あーあーあー」

ふと背後から幼い声が響く。リエイが振り返るとそこには真っ白なスーツに身を包んだ男が一人。そしてその男に抱えられていた少年がつまらなさそうにくたびれた様子のリエイを見下ろしていた。

「馬鹿だねお前達。こいつはアルタ・…何だっけ?」
「アルタ・マクベイン…ですジノ様」
「そう、そいつじゃない。そいつを痛めつけたって無意味だ。退け」

少年が命令すると、スーツ姿の男達は一斉に姿勢を正し、ただの壁のように敬礼して廊下に立ち尽くした。リエイはかすんできた両目で男に抱えられている少年を見上げる。もしやクロードではとしっかりと目をこすったが、全く別人の少年だった。

「でもお前…アルタ・マクベインと一緒に居たな?何だお前、あいつの従者か?」
「ぼ…僕は…!」
「フン、どうでもいいや。でもさ、僕いいこと考えた。お前を人質にして、アルタ・マクベインを呼び出そう」
「……!」
「ねえ、いい考えだと思わない?アルファ?」

少年を抱えた男はただ頷く。
リエイはもう一度拳を握って男と少年を見据える。
少年、ジノは楽しげな声を一声上げ、舌なめずりをした。

「まだ抵抗しようなんて本当に馬鹿で間抜けで愚劣だなあ…まあいいよ。楽しいからさ、さあアルファ。やっつけちゃおう、僕達の未来のために…ね」
「御意」

「出来るだけ抵抗して、痛がって命乞いをするんだねそうしたら殺しちゃうか人質にするかどうか…考えてやるよ」

残忍な笑みを浮かべたジノが手をかざす。

リエイは真っ赤な三つ編みを揺らして体を低くし、アルファに飛び掛った。

まるでその姿は犬。本来の能力をかみ締めるように、リエイは爪を振り上げたのだった。

二話（前書き）

オネイロス統括のヨハンは作ってみたら気に入ってしまったので何かと出てくると思います。ただ…変態なのがアレですが…

二話

来た道を戻って走るアルタの脳内では、先ほどウルリアが告げた一言が常に付きまとっていた。彼が言っている話が本当なのであれば、ウルリアはアルタの母親がどこにいるのか知っているはずだった。今まで父の死の真相を暴こうとしていて、自分にいたはずの家族の存在を蔑ろにしてしまうところだった。しかしながらシモンは、何故生きているはずの母親の存在は教えられなかったのか、アルタは疑問に思った。

父親同様、アルタが狙われるから隠していた可能性もあったが、母親がよからぬ連中に関わって捕まっているならもう何かしら手を打ってくれていてもおかしくない。

何かがおかしい。

アルタはその疑問がそもそもどこが間違っていての疑問なのかも分からず、ただ今は相棒である召喚獣が無事であることを望みながら走る。

暫く走ったところで、人だかりが出来ている場所に差し掛かったアルタは通行を邪魔され足を止めた。

ざわめく人ごみに少しだけ視線を遣る。何かを見ているようだったが、アルタの位置からはよく見えなかった。

「何だ…？」

向こう側に渡りたいが、用事がある向こう側にめがけて調度人が集まっているので、アルタはおどおどと群集に飲まれながら歩いてゆく。

何かを見つめて人が集まっているのは分かるが一体何が？その答えに行き着こうと、人をおしのけ、ようやく視界がクリアになった瞬間、アルタはそこに横たわった一人の少年を見下ろし、絶句した。

「り…リエイ…」

髪を無残に切り落とされ、体中に痣を作ったリエイは絶え絶えの呼吸を吐きながら血まみれで倒れていた。その姿は目をあてるのも痛々しく、うつぶせになったその背中には

『次はお前だアルタ・マクベイン』

と書かれていた。

アルタは急いでリエイに駆け寄りその細い体を抱きしめた。まさか自分がいない間にこんなにも彼が痛めつけられていたとは。それなのにも関わらず、自分は自分の母親のことで精一杯だったこと、ウルリアの再会に少なからず喜んでいた自分を叱責した。

「何だよこれ！誰が、誰が一体こんなことを…！」

目からは悔しさからか涙がとめどなく流れ、揺さ振られてもぴくりともしないリエイに不安を覚え、滲んだ視界でリエイの表情を見つめる。

「誰が…！誰がお前にこんな…！」

「ご…ご主人…」

周りの群集は与えられた悲劇にしばらく感情移入するかのようによどめきあっていたが、それにも飽きたのか、まばらに散り始めていた。

アルタは憎しみに満ちた両の目でしっかりとリエイに貼り付けられていた紙を見つめ、跡形もなくなるほどにそれを裂いた。この教会

は戦いの場。自分の覚悟がいかに甘かったのか思い知らされた気分になり、アルタは再び唇を噛んだ。

「あれー？ここで何かあったって言うから見に来たのにーぃ、終わった…のかな？」

妙な明るい声にアルタはハッと顔を上げる。
リエイを痛めつけた敵かと素早く振り返ると、そこには一人の男とまだ初老の男が立っていた。
男のほうはおどけた様子で長い黒髪を指に巻きつけてくすくすと微笑み、初老の男は自分が置かれた現状が理解できない様子で立ち尽くしていた。
アルタはその両方を睨みつけ、リエイを抱えた両手に力を込めた。

「ふぅん、血なまぐさいねぇ、いけないねぇ、世界の秩序の混沌だねぇ…」

すいっとアルタに顔を寄せた男はにやにやと不謹慎な笑みを浮かべたまま、睨むアルタと虫の息のリエイを交互に見つめる。

「誰…だよ…近寄るな…っ」
「怯えてるね。怖いのかな」

アルタは差し出してきた男の手を払いのけ、リエイをかばうようにうずくまった。
男はその反応に笑みを浮かべ、そっと優しい手つきで隣にいた男を連れ、アルタの視界まで躍り出た。

「ね、そんな顔しないで。元気出しなって！アハッ、もしかして僕様たちがその子を傷つけたとか思ってるんでしょ？違うよーお兄さ

んねー、今いけすかないヤツと喧嘩してきたところなんだ、ね」
「えっ、は、はあそうですね。クロンクヴィストさん」
突然話を振られた初老の男は戸惑い、曖昧な笑みを浮かべて頭を掻いた。
先ほどホールから連れ出され、そのまま成り行きでついてきてしまったがそろそろ男、ヨハンと別れたかったため少しそわそわしていた。
ヨハンはにっこりと善人そうな笑みを浮かべて静かに男の首に手をかけた。
「じゃあたとえば僕様がいまこのオジサンと仲たがいして殺しあっちゃったら…疑われないよね、僕様、子供なんか傷つけないって証明になるよね？」
「へっ…？！」
「なっ、やめ…」
ヨハンは男の首を掴んだ手に力を込めた。たちまち男の顔色は急変し、音だけの声が数回鳴って男は白目をむく。アルタは咄嗟にリエイから両手を離し、男の首を絞めているヨハネに飛び掛った。
「アハッ、いいね、その通りだ」
アルタが制止に入った瞬間、ヨハンは手を離して男をあっさりと開放した。
「今少年が制止しなければ彼は死んだ。そして僕様は疑いから開放されてこの彼を殺した罪を背負わなくてはならなかった。そうまでして、ああ、そうまでして僕様はそこの少年に危害を加えてないと証明しなくてはならなかったのか…どうなのか…君が彼を助ける確

立を計算しておいてよかった、うむ、実によかった！」
「何をふざけたこと抜かしてやがんだ…人間、計算なんかで生きてねぇんだよ…これは俺の意志だ！大体…そんなヤツ殺したって、何の証明になるんだか俺には理解できねえよ」

ふん、と考え込むようにして指先を口元にもっていったヨハンは、ショックで気絶してしまった男を見下ろして笑んだ。

「きみ、名前は？」
「……何で名乗らなきゃいけねんだよ…俺は俺のことで精一杯なんだよあっちにいけよ変態」
「アハッ、本日二回目～！では、そんな変態は君が大変気になるので自分から名乗るとします」

おどけたまま敬礼してみせ、リエイを再び抱えたアルタを見つめてヨハンは心底楽しげに告げた。

「わたくし、このグラウンドキングダム科学特別教団内組織、オネイロス、統括…ヨハン・クロンクヴィストと申しまーす、ふふっ以後よろしくね」

アルタは思わず顔をしかめ、素早くリエイを引きずるようにしてヨハンから離れた。
オネイロス統括とういう身分というのはアルタにどんな権限があるかは知れない。ただこんな性格でありながらそこまでの肩書きがあるこの男の本質が分からず、本能的に危険を感じたアルタはただ震えた体で強く自身の武器である召喚獣を抱きしめる。
ヨハンはにやついた表情のままアルタを見下ろした。

「君は何か…とてつもないものを感じるね…これからが楽しみだアハッなーんてね。ほら帰ろう君の奥さん恐妻なんだろ?」

ヨハンは側に転がっていた男のみぞおちを蹴り、無理やり起こすとそのままふらりとその場から離れていった。
アルタはとてつもないものと対峙したためか、どっと疲れを感じ、リエイを背負うとよろよろと歩き出した。

「僕なら…平気…ですから…」
「馬鹿、喋るな。俺は俺のことに始末をつけたいだけだ」

三話

宿泊施設、暁の庵には数十人の参加者達が列をなしていた。調度夕方にかけて寒くなる時間に帰宅する者が多かった為か、受付付近は混雑していた。アルタはその中できちんと列に並びながらも早く自室に案内されることを強く望んでいた。モニカが言うのであれば、最初参加したばかりの時は数人とのルームシェアを強いられる。リエイはアルタの召喚獣の為同室であることを許されるだろうが、もしも万が一に自分の命を狙うような人間と相部屋になってしまった時。

その時は冷静な判断が出来るのだろうか。アルタはそう考えていた。

リエイの傷は彼がおぶっている間に少しずつ癒えてきたが、このままでは数週間も試合には出られないだろうとアルタは思った。

ここまでリエイを痛めつけられるとすれば相当の力の持ち主であるのは明らかだった。

ウルリアは知らない相手だと言っていたが、アルタはこの大会に参加するようになってから信用するとういうことを酷く恐れていた。

もしかすればウルリアが言っていたのは全て嘘であって、本来自分を呼びつけたのはそもそもリエイを痛めつけて試合を放棄させるのが目的だったのだろうか…など。

アルタの頭の中にはいくつもの疑惑が上がっては消えていった。

そんな事を考えていても、その背中に背負った痛みだけはアルタの中にも、リエイの中にも消えることはない。

ようやく少し動いた列の中、反対側から歩いてくる人ごみの中にアルタに気がついて声を掛けた人物がいた。

「…マクベイン…?!」

じっと地面を見つめ、焦る心を抑えていたアルタは、聞きなれた声に顔を上げた。

「お前っ…!」

ツンとした顔はどこか冷静さを失っている。大会予選で命を救われてからというもの会っていなかった少女、ヘティーがこちらを見つめている。アルタはなんとなく彼女が懐かしくすら感じられて、弱弱しく微笑んだ。

目がしっかり合ってどこか気恥ずかしくなったのか、すぐさまいつも通り澄ました顔に戻ると列に割り込んでアルタの手を取った。

「な、何だよ?」

「…急いでいるんでしょ?さっさとついてきなさい」

どこか不機嫌そうに手を引き、ヘティーはアルタを列から連れ出し、暁の庵に向かって歩き出した。アルタは突然声をかけてきたヘティーを不審に思いながらも、あの長い列で心を焦らせているよりずっとマシだと思うことにして黙ってついてゆく。

冷たく細いヘティーの指先はアルタの手首を掴んだまま。二人は薄暗い庵と名づけられた無機質な建物へと吸い込まれていった。

受付を過ぎると、そこは一瞬にして開けたホールになった。
巨大な吹き抜けとなったお洒落な外装で、日が差し込むエントランスと、透明な階段が一本上に伸びており、その下には沢山の参加者達がおのおの語り合っていて、奥には部屋へと続くエレベーターがあった。
この場所から第一、第二と、この巨大な企画に挑む参加者達を収容できる部屋の棟が連なっていた。

ヘティーはこのホールをさくさくと歩いて行き、思い出したようにアルタから手を離して再び歩き出した。

「おい…、どこに行くんだ?女子棟には入れないんだろ?」
「…この向こうに庭があったの。人も少ないし、そこで話があるわ」
「話って…」

アルタは背中におぶったリエイを見遣る。まだ本調子ではなかったのに戦闘を強いられ、長く美しかった三つ編みも無残に切り刻まれた傷心のリエイをどこまでも連れまわす気になれない。
だがそんなアルタの心情を読み取ってか、ヘティーは振り向かないまま答えた。

「そのお友達も介抱させてあげるわよ」
「あ…ありがとう…」

アルタはそんあヘティーの背中を見つめ、少し意外さを感じていた。以前の彼女ならあこで自分を見つけても知らないふりをしただろうが、どうしたことか、彼女はあの予選だった試験の日から態度がおかしい。
アルタはそれを含めて色々なことが聞きたかった。

そして彼女が言ったとおり、ホールを抜けた先には大きな中庭があり、そのテラスには確かに人はまばらだった。

ヘティーはその中でも一番空いた場所を見つけ腰掛け、アルタにも座るように無言で指示した。

アルタは自分が着ていた学生服のブレザーを芝生が植わった地面に敷き、そこにそっとリエイを寝かせて椅子に座った。ヘティーはその一連のアルタの行動を静かに見守りやがて口を開いた。

「何があったのかなんて無粋なことは聞かないでいてあげる。ただ、」

ヘティーは指先からぼんやりとした緑色の光を放ち、それをそっと操作してリエイの傷口まで持っていく。アルタはその姿を不安げに見ていたが、以前ウィリアムが連れていた少女が同じ技を使っていたので、それが治癒であるのはアルタにも何となく分かった。暫くその光がリエイを包んでいたが、ふっと消えると彼の荒かった呼吸は落ち着いたものへと変わり、その成果が見て取れた。

「教えて欲しいの。ママとパパの仇が…一体アンタと何の関係があるのかを」

アルタはその質問に首を傾げ、言葉を選ぼうと少し考えた。

ママとパパの仇？確か彼女はあの学園のパトロンをしていた大手会社社長令嬢で…何不自由なく生活していたはず。しかしそれを改めて聞くのもいかがなものかと考えていると、ヘティーは小さく舌打ちして指先を鳴らしてアルタをこづいた。

「説明してあげるわよ。私には…どうしても必要なの、あの男の情

報が」

「あの男って…もしかしてクロードの…？」

「そう、のこのこ私の前に現れてくれたあの男に、私は十年前の仇討ちをしてやるわ十年前の冬…私が小さかった頃に…あいつが…」

彼女の目は不思議と自分の目によく似ていることに気がついた。強い復讐心に支配されたあの目。アルタはそんな彼女を見ていると、いつもリエイはこんな自分を見つめていたんだと気づかされた。悲しいことにその心はまだ父の真相を知り、憎き敵を倒すということに縛られたままだが、アルタはそれでも今は構わないと思っていた。

十年前、彼女が辿ったその数奇な運命の物語を聞きながら…。

―ヘティーの追憶1―

あの寒い日の夜を私は一生忘れない。あの日、パパとママの日付は突然、止まってしまったんだ。

―ヘティーの追憶―

その日、六歳の誕生日を迎えるはずだった少女、ヘティー・ディズリーの運命はこの日ある男の出現によって捻じ曲げられようとしていた。

「じゃあ、いってらっしゃい。また学校の話聞かせてね」
「うん、ママ行ってきます」

小さな手のひらを振り、今年の春高校までが付属された魔法召喚学園に入園した少女、ヘティーは母親に見送られて家を元気よく飛び出した。
真新しい靴、真新しい学習道具、真新しい洋服。
その全てが彼女の気分を高揚させ、冬休みが明けたこの新学期は彼女にとっても特別な日だった。

「おはよう、ヘティー」

一人の少年がヘティー声を掛ける。ヘティーはだらしなく緩んでいた表情を一度に凍らせてツンと澄まして長いブロンドの髪をたなびかせる。

「おはようライアン」
「今日誕生日だったろう?父さんがさ、うちに来てパーティしないかって言ってるんだけど」
「私、今日は家ですごすの。ごめんなさいね」

そうして少し見栄を張って買って貰ったヒールの靴を鳴らして側を過ぎ去る。
ライアンがその横顔を熱い視線で見送り、ヘティーの一日はこうして順調に始まっている。
元々、明るくて楽しいことが好きなヘティーは、ボーイフレンドであるライアンやバーツと遊びたい気持ちはあったが、それは小学生になってからというもの抑えることにしていた。
勿論ませて見せている部分もあったが、彼女は他の生徒とは違い、この学園に進んで入学したいと申し込んでいた為気を強く持っていたかったのだ。

彼女の父は学園に協力し、会社を運営する理事を努めていた。
彼女の父は魔法に長けており、この学園もそんな得意な魔法で子供達が将来職を見つけられるようにと開校させたのだ。ヘティーはそんな父を心から尊敬していたし、
自分はそんな父を超えられるような存在にならなくてはと、幼い頃から少しずつ自制を覚えていった。

かわいいものや、女の子と遊んだりするのを我慢して、
授業には特に真面目に参加し、父に褒められようと過ごす。
そしていつかは父からも母からも学園を任せていいといわれるほど頼られたいと。そう目標があった。

しかし今日は誕生日。

自分の大好きな両親と過ごして幸せな気分になれる最高の一日。

ヘティーは新しく買って貰ったノートを開いたり閉じたりと落ち着きなく放課後を待っていた。
何をしていても今日は寛容できると思っていたが、ふと、そんな彼女の前に一人の少年が通りかかり、ヘティーは顔をしかめた。

淡い栗色の毛が少しはねている。そう、寝癖だ。
ヘティーはライアンとバーツがヘティーの気を惹こうと頑張ってお洒落しているのを知っていた。
そしてそんな向上心がある二人が好きだったし、その向上心も悪くないと思っている。

だが目の前を過ぎていったあの少年はどうだ？
みすぼらしいまはでいかなくても、彼はあれでも元々貴族である有名な魔法商業の名家の子で
顔を見てみればその造形はバーツやライアンより遥かに勝っている。
それなのにも関わらず自分には省みず、適当な格好で適当にやってきてあまつさえ彼は魔法、召喚が一切出来ない落ちこぼれ。

それなのにも関わらず彼は自分と同じようにこの学園で学びたくてやってきた唯一の人間。
ヘティーはそんな少年、アルタ・マクベインが気に入らなかった。

（こんな大事な日にあんなヤツの顔を見ることになるなんて…パパに言って辞めさせてやろうかしら）

ふと、見つめていたヘティーの視線に気がついたのか、
アルタは食い入るように見つめていた教科書から顔を上げて柔らかく笑んだ。

思わず心臓が飛び跳ねる。
髪は跳ね放題だったが、彼は無駄に顔がいい。
ヘティーはツン、と顔を背けて真っ白なノートを閉じた。

真剣な彼の姿は分かっていた。だけども気に入らない。
そんなことを思って彼女の唇からはため息が漏れ出した。

―ヘティーの追憶1―（後書き）

アルタはヘティーと小学生のときからの幼馴染であることをクラスが離れてからすっかり忘れています。そういう子なんです

―ヘティーの追憶2―（前書き）

今思い返すと…外国って外履きとか内履きとかないんだろうな…。
思わず日本の感覚で書いてる所もある学生生活ですが、パラレルワールドみたいのだしあまり気にしないで下さい。

―ヘティーの追憶2―

終業のベルが礼拝堂から鳴り響き、ヘティーはようやく開放された気分で体を大きく伸ばした。
今日は誕生日だからと父が学校の終わりに迎えに来ると約束していた為、ヘティーは急いで校門へと向かった。
その足取りは軽い。じんわりと滲んだように夕日がまだあどけなく幼いヘティーの頬を染めていた。
今日で六歳。やがて夕焼けはしっとりとした雲を呼び、空には真っ白な雪がちらつき始めた。
しばらく校門に身を預けて待っていたヘティーは手のひらが冷たくなるのを感じて息を吹きかける。
少し遅いがそのうち来てくれるはず。
高まっていた気持ちは幾分か落ち着き、ヘティーは薄っぺらくて簡単な文字が連なった教科書をめくりながらそっと空を見上げた。

「帰らないの？」

ふと声を掛けられて顔を上げ、ヘティーはまたすぐに視線を落とした。
嫌いだとあしらっているのにも関わらず、飽きもせず自分に声を掛けてくる栗色の寝癖の少年、アルタ。
数センチ近寄れば、ヘティーは数十センチずれて離れる。
あまり彼を意識しないようにと教科書にぐっと視線を遣れば、ぷらりと何かが目の前にぶらさがった。

「寒いでしょ？これ…あげる」

一本のヒモで繋がった子供が使う一本指の手袋。

その色は何故か男の子が使うにしてはかわいいピンク色だった。
ヘティーはしばらく言葉を失っていると、アルタはそんなヘティーの手に無理やりその毛糸の手袋を握らせるとパッと背中を向け、振り返る。

「ライアンに聞いたんだ、おめでとう誕生日」

そうして、アルタは降りしきる雪の中。真っ白な景色に一人楽しそうに軽やかな足取りで去っていった。
教科書なんてすでに落としてしまって、まだ少しアルタの手のひらの温かさが残ったようなその手袋はとてもきれいで、一目瞭然に新品だった。
冷えた指先を申し訳なさそうにそっと滑り込ませると、ヘティーは一言白い息と共に吐いた。

「なんだ…私の誕生日…知ってたんじゃない…」

それから、何時間経っただろうか。
ヘティーはぐずぐずと泣きはらした目をこすりながら帰路をとぼとぼと歩いていた。
父は何故だか迎えになど来ず、母からの連絡もなかった。
まさか誕生日なんて忘れてしまったんだろうか？
昨日まで話していたはずなのにどうして？

雪は高級なヒールの靴に容赦なく進入し、足の指は感覚が無い。
見栄を張ってヒールなんかにしたものだから長時間歩くと足首までが痛んだ。
最悪の誕生日だ。
拭った袖にハッとして視線を落とすと、唯一手のひらだけ温めているピンクの手袋が視界に入った。
こんなものっ！と投げてしまおうかと放してみるが、すぐに拾い上げて首に巻く。

結局、今日心から喜べたプレゼントはこれだけだった。
クラスメイトが何故だか誕生日だというのに聖歌を歌いだし、それがプレゼントだといい笑顔で答える。ライアンは趣味のわるい人形、バーツは誕生日プレゼントすら忘れてしまっていた。
どうせ私なんて本当は嫌われている。
ライアンがくれた趣味のわるい人形を鞄から取り出して、それはそのまま野良犬に放ってしまった。

もしも父が迎えに来たなら。
あの既に綿を取り出されている人形は飾られて、バーツもプレゼントを持ってきたし、お祝いだってしたくれたはず。
だけども父が遅れなかったら、少し気弱なアルタはもう手袋を渡す機会なんてなかっただろう。

歩くのをやめてしまって、ヘティーはその場に座り込んだ。
もうどうだっていい。パパとママなんて嫌いだ。

そしてうつむいて地面を見つめて、ヘティーは大きくため息をついた。

「どうしたの？」

細い路地。ヘティーの家は丘に建てられた豪邸で、歩くのは骨が折れた。
いつもは使用人が送迎するのだが。今日は父が迎えにくる予定だったので来なかった。
まだ仕事が立て込んでいるのか、代わりを呼ぶ暇すらないらしい。
もっとも、今すれ違ったところで分かるはずもないのだが。

ヘティーはゆっくりと顔を上げた。
まず声を掛けてきた相手のブーツを見る。編み上げでレザーを使った少し上品なブーツに、カーキのズボンが押し込まれている。男だ。
そして更に顔を上げ、ふんわりとしたポンチョがまず目につき、次に大きな眼鏡、クリーム色の美しい毛が雪と一緒に風に揺れているのを見る。まだ幼くて自分より5ほど上ぐらいの少年だった。

「君…迷子?」
「…足が疲れたから…休んでいるだけよ」
「怪我したの?送っていこうか?」
「放っておいて!」

パン、とその真っ白な手を払いのけ、ヘティーは再び立ち上がった。
しかし急いで立ち上がったからか、よろめいてバランスを崩したヘティーはそのまま少年の手の中に崩れ落ちる。

「ほら、無理しないで。僕調度今…そこの丘から降りてきたんだ。今から行くならついていくよ」
「えっ…?丘から?」

丘にはヘティーの家が所有する森が取り囲み、その周りには何の建物も町の一つだってない、いわば彼女の家の庭に等しかった。

客人だったのだろうか？ヘティーはまじまじと少年を見つめ、少年は彼女をおぶって来た道を戻るように歩き出した。

「そう…探し物をしに…ね」

―ヘティーの追憶3―

家はヘティーが何となく口頭で伝えながらたどり着き、ヘティーは少年にお礼を述べて屋敷へと走った。家のすぐ側で別れた少年はひらひらと手のひらを振って笑顔でヘティーを見送りしばらくずっとそのまま立ち尽くしていた。

ヘティーはそんな少年などお構いもなしに走り出した。ふつふつと忘れていたような怒りが体中に駆け巡り気持ちが悪かった。首から下げた鍵をひねろうとドアノブに手をかけた瞬間、ドアはまるで彼女を案内するかのようにゆっくりとそのまま開いてすぐに止まった。

（鍵がかかっていない？使用人の不注意なら叱り付けてやる、この鬱憤と一緒に！）

そういきりたって邸内に入った。

シン、と驚くほど冷たい静けさが広がっている。

そこはまるで今まで自分が過ごしていた家だとは思えないほど雰囲気が違ってみえて、ヘティーは足を止めてエントランスを見渡した。

何か変だ。

でも一体何が？

背後で突然大きな音がし、ドアが風で閉じてしまったのに気がついて、ヘティーは息を飲む。

手のひらでそっと魔法を操り、薄暗い邸内を少しだけ照らしてヘティーは住み慣れた家に恐る恐る歩き出す。

「ママ…？ベッキー、ミック、イザベラ？！いるんでしょ！返事なさいよ！」

使用人の名前をあげるが返事がない。
まるでお化け屋敷じゃないか。これは何だ？
そうまで考えた挙句、ヘティーはふとある考えに到って表情を一変させた。

（そうよ、もしかしてこれは…パパのサプライズなんじゃない？）

誰もいないと思わせる邸内。返事の全くない使用人と人影。
そう考えると今まで抱いていた不安感が一度に抜け、ヘティーはわくわくした気持ちを取り戻し始めた。
そうだ今日は最高の日、誕生日！
嫌なことが起こるはずなんてない。アルタからもらった手袋を鞄にしまいこんで、ヘティーは走り出した。

「もうどこ！？絶対見つけちゃうんだから！」

ここじゃない、ここでもない、色々な部屋をまるで宝探しでもするように開けて行き、ふとダイニングへと続く中通路のドアが開いているのに気がついてヘティーは表情を明るくする。
勢いよくドアを開く。きっとそこには使用人が飾りつけたパーティー飾りがあって、
悪夢にみせかけた最悪の誕生日は終わる。
そう信じてヘティーは飛び出した。

「ここねっ！」

はしゃいだヘティーの声が外にむき出しの中廊下に響き渡った。

その声は反響し、花弁のように舞い散る雪のようにさっと消え、ヘティーは勢いあまって何かにつまずき、倒れこんだ。

「きゃあっ！」

鼻から転んでしまったヘティーはとても女の子とは思えない悪態をつき、体を起こす。

そしてつまずいた物を改めて見つめ更に声にならない悲鳴がこみ上げる。

「イザ…ベラ？」

黒いメイド服を身に纏った女性がひとりうつぶせにたおれこんでいた。

ヘティーは一瞬驚いたが、これもサプライズだろうとこみあげる笑いが止まらなかった。こんな寒い所でかわいそうに。そうそっと起き上がるように声を掛けようと手を伸ばした瞬間、イザベラはものすごい力でヘティーの手首を掴み、顔を上げた。

「おじょう…さま…っ」

「ひっ…い、イザベラ…？！どっ、どうし…？」

イザベラの顔は、半分、潰れたトマトのように半壊していた。

それはおふざけでメイクしたにしてはできすぎていて、その何よりの証拠に臭いが立ち込めていてヘティーは思わず顔を背けた。手を放して欲しい、そう思ったが、イザベラはこの瀕死の状態にて伝えたいことがあるのか、音にならない声で懸命に訴える。

「お逃げ…くだ…あのおとこ…がき…て」

「いやっ…いやよ放して！何を言っているのよ！」

ヘティーはイザベラにつかまれた手を振りほどき、走り出した。

（嘘でしょう…！？パパ、ママっ…！）

ヘティーはダイニングの扉を開け放った。
その瞬間、ものすごい死臭が鼻をつき、むせかえった毒ガスのようにそれは脳内をつきぬけ耐えられないほどの嘔吐感にヘティーは胃液を吐き出した。
地面に自然と落とされた視線は死屍累々の真っ赤な絨毯を映し出し、ヘティーは金切り声を上げてドアまで後ずさった。

そういえば母親は？そう思って虚ろな瞳は真っ直ぐにダイニングテーブルに寄せられた。
そこに一人、俯いて座り込んだ一人の女。それこそまさしくヘティーが愛する母親だった。

「まっ…ママ！」

ヘティーは平常心を既に失い、今まで可笑しくやってきた使用人たちの顔や体を踏みつけながら母の元まで走っていった。大丈夫だ、母親は無事だ。それだけでもこの不可解な悪夢を少しは和らげてくれるはず。そう思ってヘティーは母へと手を伸ばす。

「ママ、ヘティーよ、ねえ、ママ！」

体を揺さ振るが、どうしたことか反応がない。だが生きてはいる。もうこの現状に精神をやられてしまったのか、目は虚ろで何も答えない。それでもヘティーはぼろぼろと涙をこぼしながら母を揺さ振った。

「ねっ…ねえ、ママ？」

ふとぐるりと突然、母親が顔をしっかりとヘティーに向ける。
ようやく安堵の息をついた途端、母はその唇からだらしなくよだれを垂らし、白目をむいた。
ヘティーは豹変した母の姿に驚愕し、血溜りとなった床に尻餅をつく。

「ママ…」
「その人はもう、人間として生きていけないよ」

ヘティーは振り返る。
一度聞いた声だった。こんな現状なのにも関わらず、その声はどこか客観的に冷静で、穏やかだった。

「心が壊れてしまったんだ。彼女の夫が守る魔石が、奪われてしまったからね」
「さっきの…！」

上品なブーツはすっかり血で汚れ、真っ白だったポンチョは赤く染まっている。
先ほどの人当たりがよさそうな少年はまるでさっきからその場にいたような佇まいでにっこりと笑んでいた。ヘティーはすぐに、彼が自分の家族を貶めた人物だろうと理解し、声をあげ、そばにあった飾りの剣をふりかざして飛び掛った。
しかしまだ六歳の少女がうまく剣をあやつれるわけもなく、すぐさま避けられてしまったヘティーはそのまま血の海に倒れこんだ。

「どうして…パパは…パパはどこっ？！」

「君のパパは死んだよ。ママとママの魔石を守る為にパーンっと水風船みたいに破裂しっちゃってさ」

手のひらを鳴らして、少年は大げさに笑ってみせる。

ヘティーは目の前が真っ暗になりそうになりながら、再び剣をかまえた。

「手が震えているかわいそうにね…ねえ、武器はこうやって使うんだよ」

少年はそっと手をかざし、手のひらに握っていた魔石を透明な剣へと変えた。

ヘティーは恐れる余り剣を手放し目を閉じた。

「ほら、ちゃんと見るんだ。この醜い色の魔石が君のママだよ」

「いやあああああああっ」

剣は一直線にヘティーの腹を突き破り、口から出た真っ白な息は数回浅く繰り替えされ、魔石の剣は侵食するようにヘティーの体に入り込み、しばらく魚のように口を開いていたヘティーは気絶してそのまま地面へ倒れこんだ。

少年、クロードは笑む。悪しき魔石の触媒となる憎しみを抱いた少女の姿を見下ろしてそっと膝を折った。

「憎しみこそが…お前の生きる価値だよ。ヘティー・ディズリー」

そして彼女は再び目を覚まし、その内に秘められた邪悪な力も知らず男を憎む。
それこそが彼の本意とも知らずに…。

四話

アルタはしばらく、祈るように組んだ自分の指先に視線を落としたまま言葉を失った。
この話が真実であるのは彼女から感じる憎悪、恐怖感、そしてその強い眼差しから見て取れた。
だが彼は随分前、学園祭が行われたときに講演会に出席していた彼女の父をしっかり見たし、何より記憶に鮮明だったのが、彼自ら自分に話かけてきたことがあったからだった。
ヘティーは人当たりが悪い節があるが、どうか嫌わないでやってくれ。
そんな一言を…。

「何か…言いたそうね」
「…俺は…数年近く前にお前の父さんに会った記憶がある。だけどもさっきの話が嘘だとも言わない…一体、何があったんだ…？」

怪訝そうな表情のアルタに、ヘティーはほんの少し表情を緩ませた。
もういっそ色んな事が起きて頭が整理出来ず、自分に妙に可笑しく感じるように、ふっと笑んだのだ。

「パパは…死んだわ…ママが生きる為に必要な魔石を守る為に魔石を飲み込んだの」
「…その、ママの魔石って…何だよ？お前の母さん、まだ生きているんだろう？」
「…もう生きていると言えるのか、分からないわ」

ヘティーのブロンドの髪が、ふんわりと揺れた。

憂いを帯びた流し目の彼女はやはり美しく、改めて向き合っていたアルタは視線を泳がせた。
ヘティーは視線を大きく上へと伸ばし、遠い空を旋回するガルーダを眩しそうに見上げた。

「神様は、私達に一番最初…ご自身の姿を模して作った人間が高度な成長を遂げられるように、自分の能力の一つである魔法を授けて…その魔法を授けられた人間は１４人。」
「創生神話か？なんで今更そんな話を…」
「その１４人には、それぞれ強大な力を持つ魔石が授けられて互いが互いを牽制したり奪い合ったりしないように、必ず打ち消しあう反照の魔法が込められていてね…ママは…その末裔なの」

アルタは思わずえっ、と口から大きく飛び出した言葉のまま立ち上がった。
ざわついていた喧騒がすっかり消えてしまったように、その言葉はようやく意味をなしてアルタに繋がった。

「クロードはその魔石が欲しいの。反照してしまう魔石は７つ。それを完全に壊して、力のある魔石だけを集めている」
「魔石が…、魔石がクロードのものになったら…どうなっちゃうんだ…？」
「…少なくともいい事は起こらないわ、ね」

アルタは少し落ち着きを取り戻し、椅子に腰掛けた。
冷静に淡々と過去あったことを話す彼女の表情はいつものように取り澄ましていたが、
あの時クロードに触れられた瞬間、取り乱した彼女の姿は今でも忘れられなかった。あれが彼女の傷。言葉で出てくる物語よりもずっと鮮明で辛い思いをした彼女を思うと、アルタはいたたまれなかっ

た。

「でも…なんで俺が嫌いなお前が…そんな事話すんだよ…」

「さあね…まあ、わざわざ説明するなら、アンタなんかよりずっとクロードの方が胸糞悪いって所かしらね」

ヘティーはすっと立ち上がり、脇に置いていたポシェットを肩に提げる。

アルタはそれに釣られて立ち上がり、彼女はそれを制止した。

「そこの彼、そのままじゃ助からないわよ。部屋で休ませるより、早めに医者へ行くことね」

「…ありがとう、ヘティー…」

「ふん、落ちこぼれのくせに大会に参加するなんて馬鹿な男」

カツン、と慣れた調子でかかとを鳴らして歩き去ったヘティーを見送り、

アルタは苦笑いした。

あんなに苦手だと感じていた嫌味なクラスメイトは、自分が背負った運命より遥かに過酷な過去を乗り越えていた。

強く拳を握ったアルタは、呼吸が整ってきたリエイを背負い、列に並びなおすべくホールを後にするのだった。

五話

部屋にようやく案内されたアルタは、二段のベッドが両脇に挟み込むようにしてある小さな部屋で
すぐさまリエイを寝かせ、そっとルームメイト以外が入らないよう、鍵をかけた。
リエイは眠るように瞼が時々呼吸に合わせて上下していたが、うっすらと目を開き、アルタを見つめた。アルタはそんなリエイの姿に胸を痛め、彼の胸元に顔を埋めて謝る。

「リエイ…すまない…俺が…俺がいなくなったばっかりに…」
「いえ…さっきのあのいけすかない女に助けられて…どういうわけだが元気ですよご主人」

リエイはゆっくりと目を動かし、今にも泣きそうなアルタを元気付けようと笑んでみせた。
アルタは一先ず会話ができるほど回復したリエイに安堵し、椅子に座りなおす。

「さっき…あの女えっと…ディズリーさんが言っていたのが本当であれば…まずい事態です」
「…どういうことだ?」
「この世界は魔法の使える１４人の賢者による秩序によって保たれていました…それが…クロードが関わっているとなると…やはりヤツの目的はこの世界の支配かと…そして…」
「無理すんなって、待ってろ今水を…」

アルタは苦しげに会話するリエイに焦り、椅子を倒して立ち上がっ

た。
だがそんなアルタにまだ伝えなくてはならないことがあったリエイは、彼の袖を掴んで上半身を起こし、苦しげな表情をして引き止めた。

「ヤツは１４人の賢者が神、リザイアから与えられた魔石をねらっています。その末裔の一人が、シモン様なのです」
「何だって！？」

リエイはアルタから手を放し、呆然とするアルタに向かい合うように座り込んだ。

「シモン様が危険です…、お戻りになった方がいい。想像以上に、あなた様は命を狙われておいでです」
「…ば、馬鹿を言うな…！」

悲痛そうなアルタの声に、リエイは口をつぐんだ。
振り下ろされた拳はリエイのすぐそばに落とされ、シーツに皺を刻み込んだ。
カッとなったのが愚かしい気分になったのか、すぐさま手を放し、アルタはその手で顔を覆った。

「今更…そう言われて帰れるわけもない…そんな覚悟で俺はここに来ちゃいない…！」
「ですが、ご主人…！」
「分かってるさ、分かってる…けど…シモンは大事な家族だ…だけどこの俺の命を無駄にするわけにもいかない…！」

アルタは顔を覆っていた手のひらを見つめた。
沢山の命が絡み付いてくるこの両手は、父が遺してくれたたった一

匹の召喚獣に守られなければ何もできない無力な両手。
ヘティーの言葉が頭の中で反芻するようだった。完全なる弱者、そうだ、その通りだ。
ふと目から一粒、涙がこぼれた。
アルタはその涙を振り払いたがるように、目を閉じる。

その途端、まるで体中に電撃が走るような感覚が迸り、暗闇が広がった瞬間、夢でも見ているかのように様々な光景が一瞬にして広がり、アルタは驚いて目を開いた。

「えっ」

そのふらつた脳は体の自由を奪い、側においてあった枯れた花の入った花瓶が地面に落下した瞬間、アルタはがくりと膝をついてその場にうずくまった。

「ご、ご主人…?!」

リエイが慌ててベッドから覗き込むと、頭を抱えたアルタが額に汗を浮かべて答える。

「今…何だかすごく色んなものが見えた…その最後に花瓶が落ちるのを見たんだ…。調度…今のような…」

「それは先見(さきみ)の力だな」

突然響いた知らない声。アルタが驚いて振り返ると、指先に鍵束を弄ぶ青年が一人、ニマッとした笑顔で壁を背にして立っている。
アルタが何か言わんとする前に、男は鍵を持った手とは反対の手を差し出してアルタに告げる。

「どうやら俺はこれから、お前とルームメイトみたいだな、よろしく相棒」

アルタは戸惑いながらその手を取った。

ルームメイトと名乗る青年はぶんぶんとアルタの手を振り、胸を指先でとんとんと軽く叩いてもう一度笑顔になった。

「俺はフレディク・バーシュナート。フレクって気軽に呼んでくれ。さあて、お宅らの自己紹介といこうか」

第九章　ペンは剣より強し

シモンは懐かしい夢を見ていた。
幼い自分と、幼い兄。そしていつも一緒にいた少年と、少女。
四人はまだ自分達の運命を動かされる前から親しく、そして家族同然のような温かみがそこにはあった。
物心がついてくると、シモンはずっと親友だった少女がとても眩しく思えて、淡く恋心を抱いた。
そうそれはどれだけ想ったところで叶わないと知っていながら、彼女の笑顔がどうか自分に向いてくれはしないかと望んでいた。
少女は、兄と生まれたときから決まっていたフィアンセ。
噛み絞った唇からそっと、繊細な音になってシモンはその少女の名を呼んだ。

「ああ、シュキア…」

分厚い眼鏡越しの世界は、クリアだった。だけども彼の心はいつしか曇っていくようで、
霞んでゆく毎日に気づいて視線を落とせば、彼女が生んだたった一人の親族がその両手に抱かれていた。

「アルタ…」

数日振りに目を覚ましたシモンは、くすんだ自室の天井を見上げた。
髪はすっかり水分をなくし、美しい絹のような飴色の髪はからりと枕に散らばり、

目の下には深い隈が刻まれていた。
少し体を起こすと、自分の命を繋いでいた点滴がすこし揺れ、シモンは部屋を見渡す。
驚くほど静かで、どうして自分は眠っていたのか思い出し、シモンは頭を抱えた…。

「そうだ…この前…アルタの誕生日会に…」

シモンはハッとして服をまくしあげて腹部を見つめる。
まるで何事もなかったように完璧に縫い上げられていた傷口は、思い出すと何故だか痛んだ。

あの時、一体何があったのか。
あまりに突然すぎて覚えがない。シモンは魔術に長けているとはいえ、戦闘魔術はからっきしで、
何があったのか分かったところで立ち向かえはしていなかっただろう。
ベッドから緩やかに降り立ち、足元にいつでもシモンが使えるようにと揃えてあったスリッパを履いて歩き出す。
キッチンで水でも飲もうかと顔を上げると、まるで銅像のようにピシっと背を伸ばして立ち尽くした男を見つけ、シモンはやや眉を上げた。

「あ…ああ、アルタかと思って一瞬驚いた…いつの間にそんなに大きくなったかと…」
「アルタ様は既に外出しております。…帰還予定は未定ですが…」
「…馬鹿な子だ…あんな大会に出るなんて…」

男、ウィリアムはシモンを見つめるように体の向きを少しだけ変えた。

シモンは蛇口をひねり、水をあおってからすぐそばにあったカウンターの椅子に腰掛けた。

「いてて…まだ本調子ではないか…。」

「シモン様」

「…何だい？」

ウィリアムは改まった様子でシモンに頭を下げ、モノクルと垂れ下がった前髪で隠れた瞳にやや感情を乗せたようにしっかりと彼を見つめて切り出した。

「私めは…そろそろ仕事に戻らねばなりません。ですが、私はアルタ様とあなた様をこの命に代えてもお守りすると約束しましたので、新たに、従者を呼ばせていただきたいのですが。」

「…感心しないな…。アルタの約束を放っておかなければならないほどの用事かい？まあ、私は一人でも平気だけどアルタが納得しないんじゃないかな」

「先ほど、速達で鳩が飛ばされてきました。どうやら、王位継承の争いにアルタ様が巻き込まれ、召喚獣が瀕死の怪我を負ったそうです」

「…な、何だって？」

シモンは耳を疑った。

彼が従えている召喚獣はただの召喚獣ではない。選りすぐって天界から召喚されたオーヴァンの召喚獣。神がその力を欲しいとまで言わせたオーヴァンが大切にしてきた召喚獣が、王位継承争いごときで破られるはずがない。それほど、リエイは仕方なくとはいえ、酷使されてきたのだ。

「じゃあ…すぐに向かってあげてくれないか…やっぱり…神の試練

なんてリザイアの遊びに過ぎない…アルタが参加したって…兄さんはそんなこと…望んでないはずだ…」
「この大会の参加は当初、召喚獣がアルタ様と改めて契約する際に条項として提示されたものだそうです」
「リエイが…」
「それはきっと、先代様のお考えあっての事…アルタ様を信じましょう」
「そう…だね。私達が不安がっているより…彼はずっと…強いな」

シモンは立ち上がり、ウィリアムに右手を差し出した。
ウィリアムがその右手に戸惑っていると、シモンは無理やりウィリアムの手を取り、握手を交わした。

「私の甥を、どうか助けてやってくれ。」

ウィリアムは戸惑いながらも頷き、その細い手を握り返した。
そして反対の手をやや上げ、パチン、と指を鳴らした。途端、チケットを使ってこの場所に転送されてきた少女、エミリーがすっと頭を下げスカートの端を摘まみお辞儀をしてみせる。
シモンは突然やってきたエミリーに少なからず驚いていたが彼女がフードを取った瞬間
そんな驚きは些細なものとなった。

「あ、あなたは…！」
「では、私は本来の仕事に戻らせていただきます。その間の護衛はエミリーが」
「……。」

何も発さない彼女の唇は弧を描いていた。ウィリアムは満足そうに

微笑み、彼の眷属である蝶が舞い、ウィリアムはエミリーに代わって姿を消した。
シモンは背中に伝う汗が、彼女へ対する畏怖であることに気づいて唾を飲み込んだ。
そして冷や汗が伝う額を拭い、美しい顔に焦りを見せた。

「こんなところであなたにお会いできるなんて…、正に最高のボディーガード…ですね」

エミリーは答えない。ただ黙ったまま静かに微笑むばかりだった。

二話

アルタはあまりにもナチュラルに彼が入室してきたことと、先ほどみた光景に気を取られていて少しだけ呆然としてフレディクを見つめる。
フレディクは自分の名前が書かれたベッドに横たわり、夏の太陽を思わせる爽やかな笑顔になる。
やや褐色の肌に、真っ白な歯がきれいに浮いて見えた。
アルタはよろよろと立ち上がり、リエイが横たわっていたベッドに腰掛け、改めてフレディクと対峙した。

「どうかしたのか？顔色、悪いぜ？」
「あ…、いやその…なんでもない…俺はアルタ…アルタ・マクベインそれでこっちはリエイ。俺の召喚獣だ」
「ほお、そいつは珍しいな。よっぽど上位召喚獣じゃなきゃ人型なんて取らないが…アンタ中々いいライバルになるかもな」
「…聞いてもいいか？さっきの…さきみ…？の力って…何だ？」

フレディクは靴を脱ぎ、楽な姿勢を取って鞄を放りだした。この大会での宿舎生活に慣れているのか、今にも目を閉じて寝るような勢いだった。

「先見の力。言葉の通り、先を見越すことができる能力。一説だが…賢者の魔石の適応者っていうのがあってその魔石の適応者には魔法とも科学とも召喚術とも言われぬ不思議な力を身につけるんだ。アンタがそうなりゃ、もしかしたらアンタはこの世のどこかにある賢者の魔石の後継者ってこったな」

アルタはその言葉を頭で繰り返し、息を止めた。
ヘティーが言っていた、母親が持っていた魔石は元々、魔法と共に創生神であるリザイアから与えられたもので、それは１４人のただの人間に引き継がれて彼女の母親はその末裔。
そしてリエイが言うにはその１４人末裔にはシモンも含まれていて、アルタがこの能力が芽生えた原因がもし魔石なのであれば、アルタもその１４人の末裔の一人となる。

しかしそれでは、血のつながりがあるとはいえ、親ではないシモンと自分がどうしてたまたま賢者の末裔だったというのか。
新しく浮上してきたその疑問に、アルタは押し黙った。
からかってやるような軽い気持ちでこの話をしたフレディクは、突然黙ってしまったアルタに困ったような表情をみせる。

「おいおい、間に受けんなって。あくまでも仮説だよ。その能力がどうして授かるかなんて知らないが、そんな特別な能力が開花したっていう参加者はここに結構見るからな。それがいちいち賢者の末裔だとか後継者だろうってのはないだろうよ」
「あ、ああ、そうだよな…ごめん。びっくりして…さ」
「また今みたいな能力は出てくるとは思うが…そん時はそん時。今度は落ち着いて受け入れられるさ。」

肩をすくめるような感じで目を閉じたフレディクは、本格的に寝るため、アルタに背を向けた。
リエイが傷だらけなのはどうやら大会に参加してでのことだと思ったのか、気をつかって聞かないでおくのか特に触れることはなかった。だがしばらく沈黙が続き、フレディクは思い出したように声を上げた。

「そうだ…アンタ…ここに来たばかりだろ？一応、忠告しておくぜ。

」
「えっ、何を？」
ぐるん、と首だけやや振り返り、フレディクは静かな声で答えた。
「このウーラノスの大聖堂にはな、グラウンドキングダム四本柱とも言われるこの世界のまあ、いわば代表だ。そいつらの会議場が最上階にある。たまーにだけどその内のオネイロス統括の男が…試合観戦なんかしたりするんだが…あいつ、危険だから気をつけろよ」
「…オネイロス…統括…？」
「名前はヨハン・クロンクヴィスト。サディストで超ド変態野朗で野蛮だ。あいつは人間をただの実験動物だとしか認識してない。この大会に参加しているやつらで結構痛い目みてるのが多くて…ここ」
そう言ってフレディクは胸をとんとん、と軽く二回ほど叩いてみせる。
「ヤツの実験室に行けば二、三箇所は持ってかれるぜ。注意しな」
アルタは血の気が引く思いがし、サッと俯きリエイを介抱したときのことを思い出した。
もう既に、そして完全に目をつけられてしまった。
確かに嫌な予感はしていたが、どうしてこうも自分は命を次から次へと狙われるのかとただただ深いため息が漏れた。
「おい、もしかして…もうヤツに会っちまったのか？」
「…それが…半分…掴みかかるみたいなことしちゃって…」
「マジかよ？あーあー、そりゃ完全に目、つけられたな…本当にあいつはやばいから気をつけろよ」
「…ありがとう…なるべくそうするよ」

深くうなだれたアルタを励ますように、フレディクは起き上がってアルタの肩を豪快に叩いて大きく笑んだ。アルタもそんな気さくなフレディクに釣られ、数日振りに心からの笑みを見せた。
ふとアルタの胸元がぼんやりと光を放つ。
薄暗いこの部屋でしっかりとアルタの視線に止まったそれは、モニカから渡されていた通信機だった。

「げっ…」

再び、よく当たる嫌な予感を感じながら、アルタは通信機の通話ボタンを押した。

三話

アルタは、重い足取りで暁の庵のロビーを目指していた。
事の発端はモニカが寄越した通信機。アルタが応答した途端、まくしたてるようにロビーに来るように言われたアルタは、不安を抱えつつも、しばらくリエイをフレディクに見てもらうことにした。
会ったばかりで信用してよいものか考えたが、彼は快諾し、もし信用ならないならと彼の鍵まで受け取った。そのため、いつまでも疑って部屋にいるわけにもいかず、こうしてロビーへとやったきたのだった。

モニカは入り口付近に立ち尽くし、言い寄ってきた男たちをあしらっている最中だった。
見るからに声を掛けづらい状況の中、アルタに気がついたモニカがキッと視線を鋭くさせ、アルタを睨んだ。

「遅い！」

側にいた男を突き飛ばし、ヒールをならして歩く様は、益々ヘティーを彷彿させる。アルタは自分の女運のなさを悲観しながらも、手っ取り早く用事を済ませるためにモニカへと近づいていった。

「下僕の分際で…私を待たせるなんていーい度胸ね…」
「…何だよ、俺は今お前になんか構ってやるほど暇じゃな…」
「…ここ、何もなさすぎるの。アンタ…買い物に行ってきなさいよ」
「はあっ？！」

アルタは耳を疑う。そんなことをしている間に、リエイの病状が悪化でもしたらどうする。もしフレディクが刺客で、リエイを送り返

されでもしたら。
突然芽生えた能力や、ヘティーから明かされた真実。それから母親の存在。
整理する暇を与えられなかったアルタの頭は限界に達し、ついにそれは怒りとなってこぼれ出た。

「ふざけるな！馬鹿にしやがって…俺は今、俺のことで精一杯なんだよ、お前のことぐらい、お前自身がしろっ！」
「な、何を怒って…！」

モニカは反抗したアルタに驚き、腰に巻いていた鞭に手を掛けた。
だがその瞬間、パッとその手を払ったアルタの表情を見上げ、モニカは凍りついた。
強い憎悪に包まれた、それでいて強い意志。
圧倒され、モニカは言葉を失ってただ呆然とアルタを見つめた。

「これ、もういらねえからな」

ぐいっと無理やり押し付けるようにモニカに持たされた通信機を返し、アルタは自室に帰るべく踵を返した。突然怒り出したアルタに、自分の怒りすら忘れてしまったモニカはつい、あっ、と短く声を発して右手を伸ばした。
引き止めたい、そう思って出した右手は彼女のいつもの姿からは想像もできないほど弱弱しかった。そして、引き止めることなど叶わず、ぶらりと宙を掻いた右手をおろし、モニカは一人きりになってようやく声を出した。

「何よ…一緒に行くって…言えばよかったの…？…下僕のくせに…」

荒々しくドアを閉めたアルタに、フレディクはやや驚いて顔をほころばせた。
まだ怒りが収まりきらないアルタは、無言でフレディクに鍵を返し、ベッドに横たわった。

「何だよ、彼女と喧嘩したのか？」
「違う、彼女なんかじゃないあんな女…」
「ハハッ、若いな」

フレディクは額に巻いてあるバンダナをくいっと引き上げて笑んだ。
今のアルタは無駄に明るくしてみせるそんなフレディクの笑顔すら腹立たしい気分になった。
だがフレディクはそんなアルタをなだめるように、静かな声で返した。

「さっきの子、友達だろう？どうして喧嘩なんかしたんだ。この大会では一人の味方だって有利になるチャンスだってのに」
「…俺は…今リエイがこんな状態なのに、あのわがまま悪魔女が買い物に行ってこいだなんて言うから…！」
「…なあ、それってアンタと仲良くしたかっただけ…じゃないか？」
「…そうかな」
「そうさ。いったろう、この大会では味方は一人でも多いほうが有利。裏切られる可能性だってあるがまあそれは諸刃の剣。彼女は素直じゃないタイプなんだろう？」

アルタは黙り込んでリエイを見つめた。
リエイはフレディクと同じように、叱るでもなく、同情するでもないようにじっとアルタを見つめている。
フレディクはそんな二人を交互に見遣り、ベッドから立ち上がって

アルタの前に立ちその頭をやんわりと撫でた。くしゃり、と柔らかい栗色の髪が様々な方向に跳ねて、アルタは驚いて顔を上げる。

「彼女もそうさ。きっと利害も共にして、本当に戦えるような相手をアンタだろうと選んだのさ。素直じゃないからただそれをうまく…伝えられないんだよ。」

アルタは撫でられた頭に手を遣り、やり場のない照れくささに困って俯いた。

あまりに色んなことがおきすぎて、他者を疑うことに真剣で、思いやることを忘れていたことに気づかされてアルタはため息をついた。そしてほんのすこし口元をゆるませて、小さな声で返した。

「…なんだか…フレクは俺の叔父さんに似ている…考えさせられたよ…その疑って…ごめん」

「いいさ。ここでは疑うのも大事だからな。早く謝ったほうがいいんじゃないか?頭も冷えただろう」

「そう…だよな。うん、ちょっと走って行けば間に合っ…」

アルタはフレディクに背中を押され、立ち上がると駆け出した。しかし前はしっかりと確認しておらず、ドン、と何かにぶつかるような感覚がしてアルタはすぐに立ち止まった。

目の端に、金色の光が舞い上がる。

それはまるで窓の外に舞い落ちる雪が、ほんのわずかに視界に侵入するかのようなもので、

両の目がその姿を捉えたときには、その黄金の光は瞬く間に姿を変えて真っ白に輝いた。

アルタが思わず目を奪われていると、颯爽と彼の元にひれ伏し、白銀の髪がさらりと揺れ、その姿がアルタにも確認できた。

「ご無沙汰しておりました…アルタ様…」

四話

アルタは一瞬、息を止めて突然現れた従者を見遣った。
傅き、まるでアルタが何かを命じるのを従順に待つかのようにウィリアムはそれから一言も発しなかった。背後からその様をしっかり見ていたフレディクはアルタと同様、驚いて声も出ないようすでしげしげと二人を見つめていた。
アルタは思い出したように息を吐き、ウィリアムに急いで掴みかかった。

「お、おいお前…！シモンはどうしたんだ…！」
「ご命令違反だとは分かっておりますが…何分わたくしはアルタ様の従者のして護衛。シモン様には私の信頼おけるガーディアンを置いてきました故、ご心配なさいませんよう、どうかご容赦下さいませ」

アルタは背後でフレディクがほう、と何だか納得した様子で声を上げたのを聞き、ウィリアムから手を放した。ここでは話したいことも話せない。ため息を吐き、アルタは指先でウィリアムに立ち上がるように指す。一礼して立ち上がったウィリアムの背中を押し、アルタは部屋を出た。
そして出際、アルタはフレディクに振り返った。

「悪い、ちょっとこいつに話があるんだ。暫くリエイを見ててくれ」
「あ、ああ。そうだ、鍵…」
「いいよ、すぐに戻るから。ありがとう、フレク」

そう残すと足早にアルタはドアを乱暴に閉めて出て行った。
リエイと二人きりになったフレディクは、小さく口笛を鳴らすとリ

エイに返った。

「お前のご主人、なんかとんでもねぇもん懐かせてんな…お前も含めて」

リエイは苦々しく笑んで、気まずそうにアルタが出て行ったドアを眺める。

もう一度横になったフレディクはリエイにも聞こえないようなか細い声で呟いた。

「ウーラノスの使者にベルフェゴールの狗…ね」

無言でロビーまで真っ白なウーラノスの制服を身に纏ったウィリアムを連れ出したアルタは、周りの視線が一度に集められているのを感じた。

それは二つ理由があるのも、アルタは知っていた。まず一つ目はウィリアムの手をわざわさ引いてやって歩いていること。彼がウーラノスの者であることは見てすぐに分かる。

そして先ほどアルタは渡り廊下で瀕死のリエイを介抱したとき、オネイロス統括であるヨハンに掴みかかり、その噂は既に暁の庵にじわじわと広がっていたことにあった。

あまり目立った行動はできないと思った矢先、アルタの周りはそれを許してくれない。

アルタは中庭のテラスが調度いいと思い出し、キッと野次馬のよう

に自分を見つめる参加者たちを睨みながら中庭へと進んだ。
そうしてようやく群集から開放され、疲れたように椅子にもたれかかるのだった。

「なあ…、言いたいことが沢山あって…話にくい。まずお前の話を聞かせてくれないか。シモンは…無事…なんだろうな」
「はい。その点はご心配におよびません。シモン様は既にご自身で歩けるほど回復しております」
「お前が連れてきたガードってどんなヤツだ?大丈夫なのか?」
「はい。それに関しましても、一段と問題はありません。彼女は私より遥かに優れた能力者ですので」
「女なのか…あいつ…女好きだから色々と心配だけど…まあいいや。それより」

アルタはだれていた体制から向き直り、真剣な眼差しをウィリアムに向けた。

「お前の今ここにいる理由、もしかしてリエイがああなったから…なのか」
「お察しの通りでございます。今回は緊急事態ともありまして、こちらを」

ウィリアムは袖口から小瓶に入った空色の液体を差し出した。
アルタはそれを一度目にしていたため、暫くそれを見つめて納得し、受け取るともう一度ウィリアムに返る。

「妖精の…涙だっけか」
「さようにに。私の眷属が妖精であることから入手には苦労いたしませんが、この液体は第一級の薬品。中々使用許可がおりぬ物なのです」

「えっ、そうだったのか…コルネリアにお礼しなきゃな…」

アルタはそれをハンカチに包んで胸ポケットにしまいこんだ。
ウィリアムはアルタがそうして話す手順を踏むまで待ち、やがて口を開いた。

「今回…あなた様のお命を恐れ多くも狙ったのはクロードの手先ではないでしょう」
「何だって？」

アルタはウルリアが言っていた言葉を頭の中で反芻する。
しっかりと彼らは知らない者だと言っていたが、それもクロードの配下にあるウルリアの言葉。
元親友だったとはいえ、信用してはいなかったが、その場にいなかったウィリアムがそう言うのであればそれは事実なのだろうとアルタは自然に受け止めた。

「恐らく、今回の刺客は王位継承者です。」
「…はあっ？な、なんで王位継承者が俺を…？俺は王位継承を破棄したはずだろ！」
「それこそ、私達の言葉を信用していないのでしょう。きっとその者はあなた様のお命を奪うまで安心できないのだと思いますよほど王位が欲しいのか…また別の目的があるかは計りかねます」

アルタは眉間にしわを寄せた。
ウィリアムは王位継承権第一位に自分があると言っていたが、オーヴァンが王だったのはそもそも、アルタが生まれるより前もう１６年も前になる。
そしてオーヴァンは既に死んでおり、その後には二人の人間が王座についていた。

それなのにも関わらず、血筋で辿ればアルタが継承権一位というのはにわかには信じられない話だった。

「…それだけ的が絞れているってことは…もしかして根拠があるのか？」

「はい。王位継承者にはご存知の通り、バトラーがウーラノスの使者の内数人が出ております。そのバトラーの間にはちょっとしたコミュニティーがございまして、王位継承権をお持ちのやんごとなき血筋の方々がどうなさっているのか、報告する義務が私達にはあるのです」

「うえっ、マジかよ」

「もちろん、アルタ様も例外なく、今回のことを報告させていただきました所、ただ一人。反応しなかったバトラーがいまして…その後連絡が途絶えております」

「…そいつが…！」

「そのバトラーの名前はアルファ、使えている王位継承者がジノ・ヴァンフィリツ様。この二人が怪しいのです」

アルタは突っ伏した。もうこりごりだった。

リエイをあこまで傷つけたのは心底許せない気持ちはあったが、憎む相手があまりに多過ぎるためか心が休まらず、放棄した王位継承ぐらいで自分の命を狙ったのだとすればかわいいものだとすら感じられた。

クロードが何故自分の父の命を奪い、そして魔石を欲するのか。目的も、自分に近づく意図も、全てが読めない彼のほうがずっと悪質だとアルタは思った。

頭を振り、そういった面倒な考え事を押し出した瞬間、ふとアルタはある重要な話題を思い出して飛び上がった。

「そういえば…ウルリアに会ったんだ…、あの、クロードの手先に

…。その時そいつが…、俺の母さんは生きているって言ってた…本当なのか？」

ウィリアムはやや驚いた様子で目を見開き、いいにくそうに唇を噛んだ。
そしておそるおそるといった風にこぼす。

「シュキア様は…ご存命でいらっしゃいます…先々代が崩御召された際、シモン様にお預けしたアルタ様には極力…話してはならないと仰せつかったのですが…」
「…いいから話せよ、母さんは一体どこに…」

ウィリアムは苦しげな表情になり、やがて消え入りそうなほど小さく、押しつぶした声で返した。

「分からないのです…実はシュキア様は先々代がご存命の時から行方が知れず…捜索しているのですが何とも…」
「な…何でそんな大事なことをシモンやお前達は俺に黙って…！」

アルタは思わず立ち上がった。
父が死んだのは自分がまだ生まれて間もなく。ともなれば彼女はアルタを生んですぐにいなくなってしまったということになる。アルタは眩む頭を押さえて首を振る。何もかもが現実味を帯びていない。そう感じた。

「じゃ…じゃあ母さんが生きてるって証拠なんかどこにも…」
「そ、それがシュキア様は生きているかどうか、私達は知ることができたのです」
「えっ…？どうして？」
「シュキア様は…特別力をお持ちになっておいででした。そしてそ

れはその…」
「何だよ、はっきりしろ！」
ウィリアムは言葉に詰まって暫く黙っていたが、やがて静かな声で告げる。
「かのお方はこのグラウンドキングダム全てのシステムを動かしている魔石をそのお体に宿していらっしゃるからでございます…」

五話

アルタは暫く言葉が出ない様子で、俯いたままのウィリアムを見つめていた。
震えた両足はゆっくりと椅子に倒れこみ、そのまま座り込んだアルタは息を飲み込んで数秒、黙っていたが声をようやく上げた。

「…つまり…母さんは１４賢者の末裔の一人で…今も魔石を持っているってこと…か？」
「正式には…少々違うのですが…」

ウィリアムは咳払いをし、喋り過ぎた自分に後悔しているのか、その額にはなおも冷や汗が流れていた。アルタはウィリアムが次にはどんな自分を驚かせるようなことを言うのか覚悟しながら彼をただ見つめている。
やがて、右手で汗を拭ったウィリアムが、ややあってため息まじりに返した。

「シュキア様がそのお体に宿されている魔石。それは１４人の賢者が与えられた中でも特別なものなのです。創生主であらせられるリザイアが一番最初生み出したとされる我々の祖先のアダム、そしてイヴに与えた創生の鍵となる重要な魔石だったのです」
「創生の…鍵？まわりくどいな、端的に話してくれ」
「承知いたしました。アダムが与えられた魔石は人間に様々な能力を及ぼす力を持つ魔石。例えば転送チケットなどはあの魔石の効力のお蔭で、こうして私達が便利な生活を営む魔法のシステムを形成して…」
「あーあー、いいよ、その口調がいけないっての」

アルタはウィリアムの言葉を遮り、くっ、と彼の胸元を掴んで引き寄せる。
突然のことに驚いているウィリアムを尻目に、アルタはそのままニッと笑んで見せた。

「堅いな。俺に永属するってんならそれはなってないぜ。もっと砕けて喋れよ。出来るだろ？」

ウィリアムは目を丸くして、アルタを見つめていたが、やがてふっと笑みがこぼれてやんわりとアルタの手を離した。

「…昔、私に懐いていた弟に失礼ながら似ていますね、あなた様は。」
「弟がいたのか？」
「ええ。数年前、亡くしてしまいましたが」
「そ、そうか。」
「さて、先ほどの話の続きですね。私は無理をしてこんな口調ではないので、ご心配に及びません。ですがご命令ですので端的に」

ウィリアムはサッと手のひらをかざし、淡い炎を出現させる。
それは徐々に形を成し、一冊の黒い手帳が空中に浮かび上がった。
魔法が不得手なアルタはその様に感動し、暫く見つめていたが、手帳が自分の手に収まる様に落ちてきたので、アルタは急いで手のひらを広げてそれを受け取った。

「開きなさい」

ウィリアムの一言に手帳がバラッと独りでに開き、真っ白なページ

がアルタの目の前に広がった。

「図式であれば、分かりやすいかと」

そして指先を滑らかに動かし、まるで自分の指先をペンに見立てたかのようにウィリアムの指が躍るたびページにインクが滲んで文字が浮かんでゆく。

まず、ページに現れたのは丸い円だった。それは軽く色を塗られ横に小さくアダム、と表記される。

そして色のついていない円がもう一つ隣に描かれ、その横にはイヴと表記された。

「まず、黒く塗ってあるのがアダムの魔石です。そして白いのはイヴ。あなた様のお母様が持っている魔石です。」

「ああ」

「そしてこれが」

黒い魔石の絵からすっと線が伸び、人間の絵が描かれた絵まで引っ張られた。

「人の生活を豊かにする、魔石。他の魔石と違って直接人間に影響を及ぼすものです。そして」

白い魔石の絵が、人間の下に大きく描かれた円に伸びる。人間の下に描かれた円は世界を現しているようだった。

「この白い魔石はその人間以外のものを豊かにする魔石。すなわち植物や水など根本的エネルギーを構築するに欠かせない魔石です」

「なるほどな。図式にするとなんとなく分かりやすい」

「この二つは、他の魔石と違って人間が本来持っていない技術を生

み出せるわけではありません。ですがこの世界を構築している大事な魔石ですので、この二つが世界から消えれば、世界はどうなってしまうのか分かりません」

「となると…つまり…母さんが攫われたのって…この魔石が…？」

ウィリアムは顔を上げ、深く頷いた。

アルタは眉間に皺を寄せて、まだ会ったこともない母を想った。

彼女はこの世界を揺るがす人質として、誰とも知れぬものに誘拐され、そしてそれは今も尚続いている。アルタは母を誘拐したのが誰なのか、ある人物が思い当たって頭を振る。

まさか、それじゃあもう一つの魔石は…？

「なあ…ウィリアム。黒い魔石、アダムの魔石はどこにあるんだ？」

ウィリアムは答えなかった。

アルタはもどかしくなってどうして答えないのか尋ねようと身を乗り出したが、その瞬間、

ウィリアムがはっきりと自分を見つめているのに気がついて口をつぐんだ。

まさか、そんな。

明確に閃いた真実にアルタは思わず上ずった声を上げた。

「もしかして…俺が持って…いるのか…？」

「先々代があなた様と一緒に乳母に預けたものです。それは１６年前、召喚獣と共に手渡された、確か首輪だったはずです」

アルタはその言葉を聞き終わる前に走り出した。

だとしたら、もう一番見られてはならない男が一度あの首輪を目にしている。

急がなければ、手元に、持って居なければ！

それだけが今のアルタを動かしていた。ウィリアムは一人、置いていかれたためか小さくため息をつき、吹き抜けのテラスを見上げた。空は曇天。今にも雨が降り出しそうだった。

六話

暁の庵は、それぞれ棟構成となっている。その別れた棟に向かうためには長い廊下を渡らなくてはならない。アルタも同様に、様々な参加者達が歩いてゆく中、一人その波に逆らうように走っていた。ウィリアムが示唆したアダムの魔石。

それはこの大会に参加する前、あまりに強大な力を持つリエイが放つ存在感を抑制するための首輪をシモンに渡されていた。それは中央に翡翠の大きな魔石が輝く美しい首輪で、オーヴァンの形見だった。だとすれば、アダムの魔石のもともとの所有者はオーヴァン、つまりアルタの父であり国王だったということになる。

わざわざリエイに合わせた首輪に加工した意思は分からなかったが、それを知らずして学校につけていった時、シータと名乗る少年、クロードが一度目にしている。

拘束器具をつけた状態のリエイが見えたというのは、よほど力がある術者でなければ出来ないことだったが、今のアルタはクロードなら確かに見えていただろうと確信出来た。

それは彼が召喚してみせたドラゴンがなにより物語っている。

角を曲がろうとしたとき、たまたま雨が降り出したため、濡れていた廊下でうっかりバランスを崩したアルタは、そのまま転んでしまい、周りの参加者達からは小さな嘲笑がもれた。

そんなことに構っている場合ではなかったアルタもさすがの恥ずかしさから赤面し、中々立ち上がれないでいると、すっとアルタの目の前に助けるように手のひらが差し出された。

「ほら」

アルタが驚いていると、見上げた先には一人の女性。
いつまでたっても立ち上がろうとしないアルタに業を煮やしたのか、無理にアルタの手を引き、ぐっと前へ引き寄せ立ち上がらせると、ため息を一つと笑顔を見せた。

「ぼーっとしてたんだろう？気をつけなよ」

明るい色のポニーテールに、豊満なバストを惜しげもなく晒した黒のチューブトップ。
それにくわえて深緑のジャケットとパンツ。パッと見れば軍人のような装いのその女性はしばらく呆然としているアルタの頬を軽く叩き、面白そうに笑った。

「おいおい、大丈夫か？頭でも打ったかー？」
「あ、いや…あ、ありがとう」
「おう」

今までこんなにも魅力的な女性とであったことの一切なかったアルタは、目のやり場に困って俯いたままお辞儀をした。
女性は納得したような、満足したように頷くと背を向け歩き出した。
アルタは咄嗟にあっ、と声を掛けて引き止めてしまい、なんと声を掛けるべきか悩んで尋ねる。

「ああ、あのっ、お、お名前は…？」
「名前？アタシの？」

二カッ、と再び気持ちのいい笑顔を見せた女性は、自身を指差して快く自己紹介をしてみせた。

「アタシはマーテル。マーテル・ジックス。今度は転ばないようにね！また会えたら戦うの、楽しみにしてるぜ」

そう男らしい言葉を残し、颯爽とその場を後にしたマーテルのポニーテールを見つめて、アルタは恍惚としてため息をつく。

「マーテル…さんか…」

アルタは暫くそうしてぽうっとしていたが、やがてどうして転んでしまったかまで思い出して我に返る。

（そうだった！魔石…！）

そして本来の目的を果たすべく、自分の宿舎を目指して再び走り出すのだった。

「それにしても久しぶりよな」

紅茶を淹れる手が、ほんの少し震えているのに気がついたシモンは、一旦ポットから手を放してにっこりと女性が好む笑顔を見せた。

シモンが特注させたウサギ皮の優しい肌触りを確かめるようにソファーにふんぞり返った少女、エミリーはシモンが動揺しているのを楽しむかのように、サイドテーブルに置かれた愛らしい菓子を手に取って口に放り込んでゆく。そしてあらかた平らげた後はぺろりと

舌なめずりし、新しい菓子を要求するようにステッキを二度鳴らす。

「はあ…カイザース卿もとてもお元気そうで…その、安心?致しました」

「おい、本心が垣間見えておるわ。やせ我慢なぞするもんではないぞ」

シモンはシルバーに乗せたお菓子と紅茶をそれぞれサイドボードに丁寧に並べ、ちらりと横目でエミリーを見遣った。新しい菓子に喜んだエミリーはさっそく両手で遠慮なく菓子にむさぼりつく。

「でも、どうして貴女がわざわざ…。他にもウーラノスには精鋭がごまんといるではありませんか」

「何だ、わしでは不足と申すか」

「いえ、そういう意味ではありませんが…お心強いですよ…そりゃあ、もう」

フン、と鼻を鳴らしたエミリーは真っ赤なフードをようやく取り、どこか怯えた様子のシモンを改めて見つめて小さく笑んだ。

「しかし人は早く大きくなるのう。わしが世話しとった頃はあーんなに小さかったというに。寝小便垂れてますみたいな小童も…こう大きくなると中々ソソるよのう」

「ば、馬鹿なことを言わないで下さい…一体何十年前の話をしているんですか」

「いや待て…それでもあやつほどは変わっておらんがなぁ」

苦笑していたシモンは、すぐに誰のことか理解してぴたりと笑んでいた表情と手を止めた。

エミリーは作法など関係なく音を鳴らして紅茶をすすり、すっかり

真っ白になってしまったシモンの顔を見て、どこか確信を感じていた。

「やはり…ローズハイト嬢をかどわかしたのはあの男か」
「どこまでご存知かと思えば…貴女という人は…」
「無論、伊達に創生時代から根を張っておらんわ。しかし」

すっと細められたエミリーの視線は、鋭くシモンへと突き刺さる。
そうして大きく息を吐くと、両手を組んで声のトーンをやや上げ、話題を切り替えた。

「お前さんの甥…どうかね。このグラウンドキングダムに向いておろうか」
「ですが…聞きましたよ、あの子は自らの意志で、王になることを拒んだと」
「ふふ、うつけが。そんなことは関係ないさ。問題はそうさな、これからあやつが学ぶことだろう」

エミリーは立ち上がり、紅茶がすこし残ったティーカップをテーブルへと戻して両手をかざす。
そこにぼんやりとした青白い光が生まれ、やがてそれはじんわりと暁の庵を駆けるアルタの姿を映し出した。

「そしてわしらが決めること…くくく、オーヴァンの忘れ形見…さてどう動くことやら」

シモンは呆れたようにティーカップを回収し、光に映し出された甥の姿に目を細めた。
どうか無事で。そしてまたここに戻ってきて欲しい。そんな願いを込めながら…。

七話（前書き）

どうでもいいですがマニュキアが乾いているか不安でキーがうまく打てない…。

七話

アルタは部屋のドアを開け放ち、荒くなった呼吸を落ち着けるように数回深呼吸し、ぐるりと狭いこの個室を見渡す。
少し打ち解けたのか、会話を楽しんでいた様子のリエイとフレディクは目を大きく開き、突然一人で帰ってきたアルタを見つめている。
アルタは一先ず、何もなかったことを安堵して息をつき、まだ驚いたような表情をみせる二人に苦笑して見せた。

「ん？どうかしたのか？」
「あ、いや…それはこっちの台詞だぜ？突然いなくなったと思ったら…それから」

フレディクは逆に怪訝そうな顔でふいっ、と視線を逸らし、アルタがその視線の先を辿るようにちらりともう一度彼に振り返った。

「お前の荷物…何だか光ってるんだが…」
「えっ！」

アルタは慌てて自分が荷物を置いたベッドサイドまで小走りで近づく。
言われたとおり、今まで気がつかなかったのが不思議なほど、アルタのトランクは青白い光を放っていた。ふと、ある不安と予感が浮かび、アルタは恐る恐るトランクのベルトをほどく。
するとたちまち小さなアルタの宿舎は真っ青な光に包まれ、アルタは目をつよく閉じた。

『見つけた』

幼い声。
とても聞き覚えがある声にハッとアルタは目を開いた。
真っ白な空間。今まで自分がいた質素な部屋とは打って変わって、真っ白なその部屋は上品、それでいて無機質だった。
突然訪れた奇妙な感覚に驚いていると、すっと背後から一人の少年がアルタを追い越すように横を通り過ぎる。

『僕の…』

アルタは目を見開いた。
クリーム色の美しい髪がさらりと風もないのにたなびいている。
分厚い眼鏡の奥から見える蒼穹の両目がにっこりと優しく笑みを作っていた。
アルタはぱくぱくと音のない声をあげ、再び目を閉じた。

「クロード…！」

アルタは自分の声で覚醒するように、まばたきをしてもう一度自分が置かれた状況を確認する。
不思議そうな顔で自分を覗き込むフレディク、そして声に驚いたリエイがそれぞれ自分に視線を向けている。アルタは落ち着きなく打ち鳴らす心臓を押さえるように胸に手をやり、トランクに視線を落とした。

「おいおい、大丈夫か？ぼーっとして。何ださっきの光は？」
「あ…えっと」

アルタは少し身を屈めて、なるべくトランクの中身が見えないようにしてトランクを確認する。
首輪は無事だった。中央の魔石はあいも変わらず怪しげな光を湛えていたが、特に変化はきたしていない。では一体何が変化したというのか。アルタが手を差し込んだ瞬間、それは唐突に姿を現した。
真っ青な光をまだ放つ、細長い箱。
アルタはそれが何か気づき、声をあげようとした瞬間、背後から急に室内に居た二人以外の声が響いて振り返る。

「シモン様からお譲りになられたそれは、魔剣、リヴァイアサン…」

にっこりと微笑んだ真っ白な従者は、驚くアルタにひざまずき、白銀の髪を垂らして頭を垂れた。

「あなた様の、大きな力となりましょう」

そしてその右手は恭しく、アルタの前へと差し出される。
それは美しい深い青に包まれた一枚の布。サテンのようなその感触の小さなその布袋を受け取り、アルタはウィリアムを見下ろした。

「１６年間、先々代にお預かりしていたリヴァイアサンの鞘でございます」

アルタは困惑した。
今手にしているのは明らかに手の中に収まる布袋。そして、もう片手に持っている細長い箱は誕生日に譲り受けた万年筆。魔剣というには少々情けないその二つを前に言葉が出ない。

リエイはひざまついたウィリアムをただ困ったように見下ろしていたし、フレディクは一人、何かを思案するようにその二人を見つめていた。

第十章　初戦（前書き）

そういえばシモンたちのいる場所と、アルタがいるウーラノスの大聖堂は、空間的に違って、異空間なので時間経過が異なるんです！……嘘です間違いました。なんか時間経過がおかしいな？というのはそういう設定にしておきます…すみません…。

第十章　初戦

弾けとんだ爪が、弧を描きながら飛んでいく様を見つめていたヨハンは、思い出したようにくすくすと小さな笑い声を抑えきれず、こぼした。
隣に居た彼の弟は冷ややかに兄を見つめ、ヨハンは再び爪を切り始めた。

「いやね、思い出したんだよ…昔この教会に幽閉されていた女のことをさ」
「女？」

彼の弟、リーフはヨハンの言葉を反芻し、やや首を傾げて本を閉じた。

「そう、真面目な女でさ…つまんなかったよ」

リーフはヨハンの横顔を見つめる。
いつものおどけた様子はなく、ただ懐かしむようにじっくりと言葉を発したヨハンの姿に、リーフは意外さを感じていた。彼にとってはこの世界全てがおもちゃ箱。
特に足らない使い捨てたちが織り成す虚無に満ちた世界。そう、それが血のつながった弟であっても変わらない。彼と過ごした何十年で、リーフは嫌と言うほどそれを知ったというのに、そんな女がいたことや、ヨハンがあんな風に語るのもリーフにとっては興味深いものだった。

「何故今そんな話を」

リーフが尋ねる。
ヨハンは振り返ってこう返した。

「思い出したんだってば」

一度、一人にしてくれと部屋を出たアルタは、大きなため息と共につい持ち出してしまった魔石と、シモンがくれた万年筆に視線を落としていた。
魔剣、リヴァイアサン。
そう呼べるには程遠いほど、小さく、そして儚い存在を見つめてアルタは目を閉じた。
父が遺したものはこれで四つ。
まず一つ目はいわずもがな、リエイ。
そして二つ目は魔石。
三つ目は魔剣リヴァイアサンに、四つ目はこの人間界、グランドキングダム。

権力、力、魔力。１６年間アルタに無縁だったこの三つが、突然手のひらに落ちてきたようで、
アルタは落ち着かなかった。
オーヴァンは死ぬのを分かっていて、アルタにこれを託したとしか思えないほど出来過ぎている。
深呼吸し、改めて魔石と万年筆を見つめたアルタは、それらをポケ

ットに無理やりねじ込み、ふらりと暁の庵を出て歩き出した。

外は紫のグラデーションが落ちる夕方過ぎ。色濃い一日がようやく閉じようとしている。

アルタは少しだけ冷静になり、先ほど万年筆に触れた瞬間起こった不思議な感覚を思い出していた。

まるで記憶に干渉されたような、酔ったような気持ちの悪さに包まれて、

聞き覚えのある声に、あの姿。

クロードは見つけた、と一言残していた。それは自分のことだったのか、魔石のことだったのか。

今となってはどちらも同じことだと感じた。

クロードは必ず、この大会でなんらかの目的を達成させようとしている。

神はそれを知っていて見逃すのか、のん気に知らずと見ているのか。

どちらにせよ、アルタは自分がクロードを止めなければという強い信念があった。

父がどうして死ななければならなかったのか、母はどうして誘拐され、そして見つからず、何処にいてどうしているのか。

天界に案内されようが、この大会でふるわれてしまおうがアルタには関係ない。

この大会には必ず父と関わった人物が多数参加している。それだけでアルタには十分だった。

きっと、ヘティーもそうなのだろう。

彼女はクロードを憎んでいて、その上で復讐してやろうという野望がある。

それは遠からず、アルタの目的にも追随するものがあった。

アルタは静かに深く、目を閉じ今度は自分から望んでみる。
先見の力とやらが、自分にかかってくれますようにと。

目を閉じた瞬間、体が浮くようなふわりとした感覚になり、アルタは意識を飛ばして倒れこんだ。

『きて…わたしは…ここに』

静かな水面に落ちる水滴のような声が、じんわりと響いていた。

二話

水面を打つような音に、アルタは緩やかに目を覚ました。
先ほどまでいた暁の庵の出入り口とは異なり、薄暗くどこか冷たさが広がる部屋だった。ここはどこなのだろうか、という意思よりも早くアルタは素早く起き上がり目の前の人物に目を丸くした。

「母さん…」

魔法陣（レコード）で出会った母の姿がそこにあったのだ。
優しげな面差しに、どこか気品のある姿。直接会ったことは一度も無かったが、こうして対面していると、達成感にも似た思いが溢れ、それは涙として具現する。
アルタの前にしゃがみ込んでいたシュキアは、安堵のため息をついてアルタから離れた。

「そう、私の顔を知っていたのね」
「母さんこそ…、俺は…もう16年も会ってない…だろ」
「分かるわ。あの人にそっくりだもの…」

頭に響く、静かな声の正体、それは自身の母であることを、アルタは再確認した。
あの時、呼びかけたのは自分の未来だったのにも関わらず、どうして母親と対面しているのか、アルタは分からなかったが、今はそれすらどうとてでもいいと思えた。
16年間、自分を生んだ両親を思ってきたアルタは、突然の再会に戸惑ってうまく声が出せない。足も、座っている為シュキアには分からなかったが震えている。

触れていいのか分からず、その両手はかたく握られていた。

「ねえアルタ時間がないの。あなたは私の精神に介入しているに過ぎないから、見つかってしまったらもう会話ができないわ。だから聞いて」

「精神に…、介入？」

「そう、お互いに干渉しあっているの。まず、あなたに謝らなければならないことがあるの。私はそれをあなたに会うまでずっと、誰にも伝えてないのだけれど、私は、あなたを」

アルタは部屋をもう一度見渡した。

シュキアが言うには、アルタはシュキアの心の中にそっと入り込むようにして今こうして向き合っていて、それは誰かに見つかってはならない。恐らく、クロードのことを指しているのだろうとアルタは咄嗟に悟った。

そして部屋は彼女が監禁されている部屋。窓もなく、鉄格子もなく、ドアもなく、家具も無い。ただ無機質な箱に彼女が押し込められているようだった。

「ごめんなさい、アルタ、私はあなたを一度だけ…！」

「…母さん？」

だがそんな事をしている間にも、アルタの体は半透明に揺らぎ、必死に何かを訴えようとするシュキアは消えかかっているアルタの手を掴もうとするが、掴めず。

アルタも両腕を懸命に動かし、シュキアの体を抱きしめようとするが、シュキアの体を自分の手のひらが貫通する。

シュキアは涙の跡をなぞるように指先を動かし、消え入りそうな声で最後にアルタへと告げた。

「あなたを置いて、逃げようとしたの」

ハッとして目を覚ますと、そこは宿舎のベッドの上だった。
横に立っていたウィリアムは、ようやく目を覚ましたアルタに振り返ると、無事な姿に安心した様子で胸を撫で下ろしていた。

「アルタ様…、目が覚められてよかったです…！」
「ウィリアム…？」
「外で倒れているのを、フレディクさんが救って下さいました」
「大丈夫か？顔色、悪いぜ？」

アルタは額の汗を手の甲で拭うと、二三度まばたきをして、あれが夢ではなかったことを頭の中で思い返し、深く嘆息する。枕元にはリエイの拘束具、そして万年筆が置かれていて二つとも無事だった。リエイは妖精の涙で復帰したのか、心配そうにアルタの顔を覗き込んでいた。

「あれっ、お前気づかなかった。もう大丈夫なのか…？」
「僕のことは気にしなくても大丈夫ですよ、ご主人。」
「そう、か」

アルタはリエイを見た瞬間、脳裏にシュキアの言葉が蘇り、唇をかみ締めた。
自分を置いて、逃げようとした。それは一体どういう意味なのか。
整理のつかない頭はまだ休息を求めていて、アルタはウィリアムに振り返ると、ウィリアムはすぐに察したように頭を下げた。

「…では私は聖堂に一度帰還するとします。名前を呼んでくだされば いつでも参りますので、お申し付け下さい」

そう言うとウィリアムはサッと蝶に包まれて姿を消した。
フレディクはアダルト雑誌を眺めながら横目でアルタを見つめていたが、やがて雑誌に視線を戻してアルタ言う。

「気をつけろよ。あいつらはお前を利用するつもりだろうからな」

ウィリアムが付き添っている以上、知っているものならばアルタが王族の親族であることはもう分かってしまう。何か含みがある言い方で忠告をしたフレディクに、ああ。と短く返してアルタは寝返りをうった。リエイはそんなアルタのすぐそばに座り込んで、目を閉じた。どうやらそこで寝るらしい。
アルタは腕だけ伸ばして拘束具と万年筆を引っつかむと、枕の中にそれらをねじこんで自分も目を閉じた。父の死を追うことが、果たして本当に正しいのかを心の奥底で審議しながら…。

三話

翌日。教会に鳴り響くベルが朝を告げてアルタは目を覚ました。
隣のベッドを見遣れば、フレディクは既に起きていたのか空だった。
アルタは起き上がり、服を着替えると枕の下の魔石とペンが無事であることを確認して窓を開け放った。
荘厳な鐘の音と共に白い鳩が一斉に飛び出している。
グラウンドキングダム全土からやってくる人間を収容できる巨大な教会がその下に広がる街を見下ろしていた。アルタは暁の庵の棟から人がまばらに散っていくのを見つけ、自身も準備するべく歩き出した。

暁の庵のアナウンスが、神の試練初参加者を募るとの連絡が入った。
朝食を摂っていたアルタは、静かにアナウンスを聴いていたが、ふと視線を感じて手を止めた。

明確な視線の先は見渡しても分からないが、誰かが自分を見ている。
その感覚だけがアルタに巡り、気持ちの悪さから嫌な汗が伝う。リエイは真っ先にその視線に気づいていたのか、黙ったまま鋭い視線を走らせている。

食事も満足に食べきらないまま、アルタは席を立った。

「おい」

すると途端に、アルタは声を掛けられて振り返った。

「ああ、やっぱりそうだ。アンタ…この前の」

アルタは意外な人物からの呼び止めに、やや拍子抜けしたように目を丸くした。
それはこの前ぶつかってしまったあの、美女マーテル・ジックス。
言葉遣いは相変わらずだったが、その声音は優しかった。

「ああ、えっと…マーテル、さん」
「あ、覚えてた？それはそうとアタシ、アンタの名前聞いておくの忘れたな。アンタ、名前は？」
「アルタ、それでこっちはリエイ。」

よろしく、とアルタとリエイ交互に握手を交わしたマーテルは、笑顔を向けた。
魅力的な彼女の笑顔に、アルタはやや赤面して俯く。

「それで、もしかしたらなんだけどさ、二人とも初参加…だったりするか？」
「はい、初めてです。マーテルさんも、ですか？」
「ああ。折角だからさ、捜してたんだ一緒に行ってくれるヤツ。よかったらいいかな？」

アルタは少し迷ったが、悪い人ではなさそうだったし了承し、頷いた。

「ありがとう、じゃあ準備もあるだろうからアタシはロビーで待ってるぜ」

手を振り、マーテルと別れたアルタは彼女の背中が見えなくなってからリエイに尋ねた。

「彼女がさっきの視線を送ってきた人か？」
「いいえ。明らかに敵意を感じました。早々に離れましょう」
「わかった」

宿舎の部屋に戻ると、手荷物を解く見知らぬ少年が座っていた。
この宿舎は基本、四人一つ部屋だったので誰が来ていていもおかしくなかったが、大会は今日から。来るには少し遅いほどだった。

「えっと、初めまして」

アルタから声を掛ければ少年はくるりと振り返ってアルタを見遣った。どこか遠くをみつめるようなコバルトブルーの瞳が印象的で、少年はそのままこくり、と頷くと再び荷物に向き合った。
すっかり会話が寸断されてしまったアルタは、手持ち無沙汰に差し出した右手を引っ込めて苦笑いをした。

「俺はアルタ、こっちがリエイ。そのっ、よろしく」
「……クリエス…、オールドリッチ」
「そう、クリエスってんのか。」
「クリスで…いいよ」

どこか影のある少年で、何とも会話が続けにくい。アルタは適当に荷物をまとめ、大事な物はすべて胸ポケットに仕舞いこんだ。服やら生活用品やらが入ったトランクはそのまま鍵もかけずにトランクに詰めておくことにした。試合が始まるまで少し時間があったが、マーテルを待たせるのも悪い気がして、ロビーへ向かうことにした。
部屋を出る間際、何となくアルタはクリエスに振り返る。
背丈や顔、性格なんか丸っきり違ったが、顔が端整な少年を見てい

るとどうしてもアルタはクロードを思い出してしまう。
何故シモンが幼かった時の姿を借りているのかアルタにはわからなかったが、それもまた不気味だと感じた。

アルタがロビーを出る数分前。
モニカとアーデルハイトはアルタを食堂で見かけていた。
最初に声を掛けたのはアーデルハイトで、モニカはそんなアルタの様子に不愉快そうに眉を寄せていた。

「アルタ、新しい友達ができたのかな…」
「関係ないわよあんな男。」
「ねえ、モニカちゃんあの女の人…どこかで見たことない？」

でれでれと鼻の下を伸ばしたアルタを軽蔑の眼差しで見つめていたモニカは、アーデルハイトに指摘されてその横のマーテルに視線を移す。
健康的な美しいスタイル。一度見れば忘れられないような整った顔に、ポニーテールが揺れる髪。
何かピンとくるものが欠けているが、確かにその顔には見覚えがあった。

「本当ね…彼女…どこかで」

暫く思案していたが思い出せない。
いつ、どこで見た顔だったか。考えているとアーデルハイトは腕を少し引っ張る。

「アルタ…大丈夫かな…」

モニカは横目でアルタを見つめる。

どうやらまた会う約束をしたのか、その表情はどこか晴れ晴れとしていた。

モニカはそんなアルタに再び怒りがこみ上げ、ツンと背を向けて知らないと一言アーデルハイトに返した。

四話

アルタがロビーに到着した頃には、マーテルは準備を終えてアルタを待っていたらしく、アルタの姿を確認するともたれ掛かっていた壁から背を離してアルタに歩み寄った。

「ごめんなさい、遅れてしまいましたか？」

「いやいいよ、アタシは特に準備なんてなかったからさ」

そう笑ってマーテルはアルタと共に歩き出す。これから行われるのは初戦で、今回初参加となる者同士でのトーナメントだった。指定された場所は大聖堂の巨大な戦闘施設。広く、魔法で建物が壊れないように工夫されている為、選手は気兼ねなく大聖堂で戦うことが出来る。

大聖堂へ向かう中、マーテルはアルタに尋ねる。

「なあ、どうして天界なんかに行きたいんだい？この世界に飽き飽きしてる…とか？」

「いえ…俺の目的はあくまで、この戦いに出ることなんで…あんまり天界に行くとか…そういうのは…」

「へえ…そういうヤツもいるんだ…」

「マーテルさんは？」

「アタシはこの世を変える為さ。まあ、そんな大それたことがアタシに出来るとも思ってはないけどさ、それでも…変えたいんだ…この腐った豚這いずり回る世界をね」

マーテルのその言葉に、アルタは思わず数秒、その場に立ち尽くしてしまう。

彼女の目から、強い憎悪を感じたのだ。
よほど誰かか、この世界にか恨みがなければそんな表情はしないだろう。アルタの心に、不安が滲む。
転んだ所を鼻で笑われている中、手を差し伸べてくれるような優しい女性でもこんなに強い意志があってこの大会に挑んできるのだ。
この大会では様々な思惑を抱えた人物がいる。
そんな現状を改めて知ったようで、アルタは次の言葉が出てこなくなってしまったのだ。

マーテルはそんなアルタに振り返り、柔らかく笑んだ。

「何だよ変な顔して、ほら行くぞ、アルタ」
「…はい」

神が本当にこの大会に意味を持って挑ませているのならば、その意味を知りたい。アルタはそう思った。
こうして殺しあったり傷つけあったりすることの何の意味があるのか、今更どうして与えた知恵を奪うような真似をするのか。

重い足取りで大聖堂へと進むアルタは心の中で呟いた。

（これ以上誰かを疑いたくない…）

大聖堂には大勢の人間が寄せ集まっていた。
談笑をしたり、一人隅で黙っていたり。
アルタとマーテルはそんな参加者達を見つめながら歩いてゆく。ここでは初戦で戦うメンバーが揃っている。ここにもしかしたらクロ

ードがいる。そう思うとアルタも気が引き締まり、つい視線をさ迷わせてしまう。
とん、とマーテルが止まったためぶつかってしまったアルタは、一点を注視するマーテルを見上げた。

「どうし…」

マーテルの視線の先には、二人の人間が居た。それぞれ鳶色のローブを着ており、顔はよく見えなかったが、豪奢なそのローブは大会関係者だと思われた。
二人は選手より数段上の壇上に設置された椅子に腰掛け、互いに会話をするでもなく片方は腕を組み、じっと座っている。
椅子は三つ置かれていたが、一つは空席だった。

アルタはマーテルの表情を見て、声を掛けることが出来なくなった。視線を送る姿は正に憎悪で満ちていて、随分前にヘティがクロードへ見せたような表情に重なる。
何故彼女がそこまで彼らにあからさまな敵意を向けるかは分からなかったが、彼女の先ほどの言動からして、何か因縁があるのだろう。
アルタはマーテルに何も聞けないまま立ち尽くし、大聖堂の鐘が鳴り響いた。

「諸君、静粛に。私語を慎み整列したまえ」

鐘の音が止んだ頃、木槌を打ち鳴らした初老の男が壇上に歩み出る。しばらく話し声が残っていた大聖堂に静寂が訪れ、男は咳払い一つ声を高々に続けた。

「トーナメント表を発表する。初戦試合が決まっている者はこの後の鐘の音が鳴ったら再びここに来るように。では試合内容を説明す

る。既に聞いている者はもう退場しても構わん」

参加者達に教会の者と思われる黒フードの人物から紙が手渡される。
小さな文字がびっしりと並んだトーナメント表に目を凝らしながら、アルタは隣のマーテルを見上げた。

「マーテルさんはどうします、退場されますか？」
「いや…確認しておきたいから残るよ、アルタは？」
「俺もよく把握してないんで残ります、初戦は当たりませんでしたね」
「そうみたいだな」

小さな文字からようやく自分の名前を探し当てたアルタは、戦う予定の相手の名前をなぞる。
どうやら女性のようで、名をエルシィ・アルムグレンというようだ。
アルタはこの少女と相手だが、二人一組で二組が同じ会場で戦う為、となりの相手も見る。
隣には見覚えがある名前が綴られていた。

（クリエス…彼とおなじ会場か…）

クリエスはこの会場にくる直前で現れたルームメイト。たまたま同じ会場で戦うこととなったが、彼が自分の刺客でなければいいのだが、とアルタは不安感を抱く。

男はある程度退場する者達を確認すると試合の説明を始めた。

「試合はこの大聖堂で行う。戦闘施設で二人一組、二組の試合を同時に行うが、その際妨害行為、戦闘相手の変更、一対三などの禁止

はない。一人残れば誰を蹴倒そうと構わん、勿論二人勝ち上がるのもトーナメント上可能な為、共同しても構わん。但し殺害、致命傷はその場で即刻退場となり、以後大会に参加することを認めない。事故は除く」

アルタは少し安堵して大会トーナメント表を眺める。その中には確かに、シータ・エーベルリンの名前がある。複雑な気持ちでその名前を見つめ、アルタは再び男に視線を戻した。

「怪我を負った者はすぐに申し出るように。侵入者のたぐいが参戦した場合は一時試合を中止する為その場合も申し出るように。質問は暁の庵のセンターでも受け付ける、不明な点があればセンターを利用しても構わない。次の鐘の音までにこの会場からあぶれていれば棄権とみなす、以上」

カン！と静かにさせる時にも鳴らした木槌を再び打ち、男の説明は終わった。

壇上に座っていたのはお偉いさんだったのか、説明の様子を視察するとすぐに席を立ち、男と共に裏から出て行った。

アルタは、マーテルがそれを視線で追っていた為しばらく人の波に逆らいマーテルを見つめ、彼女がこちらを見れば笑顔になった。

「一度出ますか、丁度お昼ですし」

「…ああ、そうだな。すまないぼーっとしていて」

「…いえ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9392o/

アルタの赤い狗

2011年11月29日02時01分発行